妨害しやうとすると、忽ち戰端を開いて香港を占領してしまつた。兎に角商賣が主であるから、商賣が出來て居れば決して他の國を侵略するとか占領するとか云ふことはしない。英吉利は現に植民地を澤山有つて居るけれども、大體に於て其の植民地は商品輸出時代に出來たものではなく、其の以前に出來たのである。商品輸出時代は、自由貿易、世界平等主義であつたから、領土の擴張は餘りしなかつた、又植民政策と云ふことをも積極的にはしなかつた。加奈陀に對しても、濠洲に對しても、本國は餘り干渉しなかつた。唯だ、印度だけは政治上、人種上から嚴重にする必要があるが、其の他に於ては成べく自由を許すと云ふ方針を採つて來た。是は世界各國に取つて洵に好い事であつて、若し英吉利が當時侵略主義、併呑主義を標榜して働いた日には、今日と違つて、もつと澤山の國が英吉利に併呑せられたに違ひない。所が英吉利が、少くとも世界的には侵略主義を採らなかつたら、其が世界全體に及んだ。何となれば英吉利を除けて他の國が侵略主義を採らうと思つても、英吉利が承知しない限りは行ふことが出來ない。亞米利加にせよ、佛蘭西にせよ、獨逸にせよ、其國力が英吉利より何れも遙か下に在つたから、英吉利の承知しない侵略主義は何れの國も採ることが出來ない。それが爲め十九世紀の半ば過ぎ頃までは、侵略主義は世界の表面から影を隱して、平和主義が世界を支配して居た。

所が茲に自から變化を惹き起さずして已む能はざる事情が起つて來た。其はマンチエスター中心の木綿工業に代るに、バーミンガム中心の鐵工業が起つて來た事是である。鐵製品の輸出が段々重要を得るに從つて、商品輸出の國是が段々資本輸出主義に變じて來た。木綿製品は比較的廉價なもので其代金を直ちに回收することが出來るが、鐵製品は機械なりレールなり何れも多くは高價のものでその代金を右から左へ取るわけに行かぬ、又木綿製品は直接の消費品であるが、鐵製品は原料品又は生產要具である。即ち其性質は資本となるを要するもので、而して賣捌代金を掛けにする必要があるから、英國の商人から云へば單なる商賣でなくなつて、資本の貸付けの形を取るようになり、買ふ

方では、品物の買入れと云ふよりも、寧ろ資本の借入れと云ふ姿になる。此れ鐵製品輸出時代は資本輸出時代に移り行く根本的の理由である。而して段々資本貸付けの純粹の形に移つて行く品物を輸出するには、唯買つて呉れさへすれば宜い。さうして一度得意にしたと言つても、若し其得意に面倒が起れば、他へ行つて賣りさへすれば宜い。トコロが資本の貸付の形となるとさうは行かない。一度輸出した資本に對しては、利息を取らなければならぬ、又何年かの後には元金も返して貰はなければならぬと云ふやうに、關係が永續的になつて來るから、支那に賣れなくなれば印度に賣る、印度に賣れなくなれば日本に賣ると云ふやうな工合に行かない。そこで成るべく先方の自由を尊重して、唯だ品物を買つて呉れゝば宜いとばかりは言つて居られぬ。一度資本を貸付けた上は、其國を屬國にはしないまでも、自分の勢力範圍の下に置き、其處で起る政治上なり經濟上の事件はどうなつても、貸付けた資本が害を被らないだけには絶えず注意をして居らなくてはならぬ。レールを掛で賣れば、鐵道布設の面倒を見るは勿論其鐵道が收益を擧げるやうに絶えず監視するを要する。其の結果自由貿易主義では行かない。自由貿易主義が惡いのではない、英吉利の國情が、自由貿易主義では行かれなくなつたのである。品物賣渡の貿易の時代には、相手の國が買つて呉れゝば宜い、先方で出來る品物は、此方は買つても買はないでも、世界中を通じて勘定が立てば宜いと云ふのであつたが、資本を貸付けた鐵製品を掛けで賣つた上は、萬一の場合には其國の品物を自分が脊負ひ込まなければならぬから、成るべく自分の使へるやうな品物を作らせなければならぬ。だから生産にも關係するやうになる、或は自國と利害の衝突する國に其の生産品を送られては困るから、先方の品物を此方に取り、又此方の品物は成るべく買はせるやうにしなければならぬ。從つて是れまでのやうなお客扱ひでなく、もつと深い關係に立たなければならぬやうになる。又品物を賣る時代には、利益の種類が賣の利益と買の利益との二種だけであつて、又一度限りの關係であつた。所が資本の輸出になると、其資本は金でなく品物で行く。英吉利が資本を輸出する時には、英吉利で出來た機械なり、レールな

り、色々な品物になつて出て行く。それも直接に其國に行く斗りではなく、例へば英吉利が日本に賣つた金を、支那に貸すと云ふことになる。英吉利が造つた品物は支那に行くのでなく、日本に來る、さうして日本で出來たもつと粗末な品が支那に行く、其の代は英吉利から借て拂ふと云ふことになる。であるから資本の輸出と云ふのは、直接に金が出るのでなく、品物が出る。從つてその賣つた利益と、日本に代金を拂つた金の利息と、最後には其元金とが英吉利に入つて來るのである。而して其利益も、利息も、元金も、金が入つて來るのでなく、品物で入つて來るのであるし、又買の方の利益もある。それから今一つ外國の事業の資金として投下してあるものもある。是は利息ばかりでなく、事業から生ずる利潤も取る。例へば日本で水力電氣を起す爲に英吉利の共同出資を求めたとすると、其水力電氣の年々の配當を取る。配當は利子の外に利潤が加はつて居るから利益が殖える。利子ならば五分か六分のものが、九分とか一割とか、若くはそれ以上の收益を得ることになるのである。

そこで英吉利の外交は、國外に於ける投資の保護を大方針とするやうに段々變つて來た。英吉利の大使公使は表面は英吉利の名譽を護り、英吉利國全體の利益を代表すると云いふのであるが、實際は英吉利の資本家が外國に向つて投下したる資本を擁護することが主たる任務となつて居る。殊に領事の如きは、明かにそれが任務である。以前のやうに商品の販路を擴張することを主とせずして、外國が英國の資本を借りるやうに仕向け、又貸した上は、何處までもそれを擁護するのである。商品の輸出時代には、英吉利の品物の賣れるやうに、例へば英吉利の石鹼の効能を知らない人に向つては、之を使つて御覽なさい、安くて德用で、工合が好いと言つて盛に廣告し、販路を擴張してお客を自分の方に引付け樣とした。單にお客を引付けるばかりでなく、お客を拵へる。文明の商賣は、客の來るを待つばかりでなく、客を作るのである。商品の製造をすると共に、一面にはお客の製造もする。例へば三越などでは美しいカタログを配つて、三越の物をお買ひなさい、三越の物を買はなければ文明人でないなどゝ言つて、人の購買心を唆る。

そこで買はうと思つて居なかつたものでも、ツイ買ふやうになる、買つて使つて見ると成程工合が好いと云ふやうなことから、お客樣になる。是は宜いこともあるが、又大なる弊害も伴ふ。大英百科辭典を倫敦タイムス新聞社で賣り出した時の如きは、全國の新聞に一頁大の廣告を出して、特價で提供する、倫敦で賣る値段の半分だ、金は月賦で宜い、五圓拂込めば直ぐ立派な本を送る、期限何時までゝ、二度と斯う云機會は來ないから大急ぎで申込め、アト三日になつた、二日になつた、遠方の者は電報で申込めなどゝ、盛んに廣告するものだから、左程必要もない人までが、そんなに安いものなら一つ買つて見やう、五圓送れば二百圓の本が來るのだからと云ふので申込む。申込んだ以上は、否應なしに月々月賦を拂はなければならぬ。さうして其買つた本が實際役に立つかと云ふと、役に立てる人もあらうが、立たない人の方が多い。折角買つた本は左程自分の役に立たず、月賦の拂込は苦しいと云ふやうなことから、非常な損をして古本屋に賣飛ばしてしまふと云ふやうなことになる。日本中に何れ位無用の大英百科辭典が轉がつて居るか知れない、誠に勿體ない無駄であつた。

さういふやうに要らない物を賣付けられて損をすることもあるが、一面には買はせられた爲に大變に調法し、それが爲に生活上幸福を得ることもある。然し品物は、實際要らないものを賣付けられても、多少の損をすれば止さうと思へば何時でも止せる、けれども金を借りた場合はさうは行かぬ。而も借りた金は容易に返せるものでない。骨を折つて自分が働いた結果で返すか、左もなくば他から又借りて返すかより途はない。だから一たひ借りると退引ならぬ永久的の關係が出來て仕舞ふ。

さう云ふやうに英吉利の資本を借りた國は、どうしても英吉利の支配の下に立たなければならぬ。今の大英百科辭典の例で言つても、縱し要らないものを買つても、損をして賣つてしまへばそれだけであるが、資本を借りれば、唯だ利息を拂ふ義務ばかりでなく、英吉利の品物を買はなければならぬ。品物を買ふばかりでなく、色々の無理をも聽かなければならぬと云ふやうに、段々深みに陷つて行く。其も資本が本當に役立つて、

事業が起り、其の事業の收益で利息が拂へ、何年かの後には元金の償還も出來るやうならば宜いが、實際に收益の無い場合は元金が返せない、返せないから利息は長い間取られる。營々として稼いだものは、皆利息として持て行かれることになる。歐羅巴の諸國では、左程英吉利から資本を借りて居らぬが、併し葡萄牙の如きは英吉利の資本が殆ど國中に行渡つて居るから、今度の戰爭に於ても、英吉利に厭でも應でも盲從せねばならぬやうになつた。其に次では希臘である。希臘の王樣は、獨逸と親戚の關係がある爲に、英吉利から資本を借りては居るが、英吉利の言ふ通りにならない。そこで英吉利は腹を立てゝ、終に天子樣を廢してしまつた、詰り獨立國の王樣までが、借金の關係で廢立せられるやうなことにもなるから、怖いと言へば是れ程怖いことはない。獨逸が白耳義の中立を侵したのは怪しからぬと言つて居るが、それは獨逸のみではない。成程獨逸は軍隊を以て攻入つたのであるが、希臘の亡びたのも大して變らぬ。英吉利は少しは軍艦を持て行つた、少しは兵隊を持て行つたが、大體は金縛りに縛り上げて、而も王樣を追出してしまつた。希臘と云ふ國は、表面は亡びて居ないやうであるが、王樣は廢せられ、今までの大臣は皆國外に追放せられた。そして人民は居るが、國政は英佛、殊に英吉利が主にやつて居るのである。それからもつと覿面なのは埃及である。埃及は全く金の爲に縛られて、何うも斯うも出來なくなつて、英國に併呑せられて仕舞つたのである。

そこで英吉利では、此の變つた狀態が國是の上にも現はれて、所謂帝國主義と云ふものになつて來た。帝國主義と云ふのは、是はチャムバーレンが主張し出した說である。チャムバーレンはバーミンガム選出の代議士で、其バーミンガムは前云つた通り英國製鐵業の中心である。チャムバーレンの帝國主義は木綿工業本位のマンチエスターの自由貿易主義に對抗するものである。如何にチャムバーレンが有力なる政治家でも、英吉利の事情が之を必要とする時代にあらざれば、斯かる議論が勢力を占めるやうにはならないのである。英吉利が資本輸出國になつて見ると、どうしても今までの自由貿易主義では安心が出來ない。是に於て英吉利の植民地、屬領、勢力範圍の國を英吉利の權力の下

に引締めやう、さうして帝國の束縛を堅固に築かうと云ふことになつた。所が此の帝國主義を實現せしめやうとするに邪魔になるのは獨逸、亞米利加、露西亞、其の中でも殊に目前の邪魔になるのは獨逸であつた。

此の如くにして戰爭の始る間際まで、資本の輸出を以て國を立てゝ居つた所の英吉利が、世界に旗を振つて居つた。他の國は英吉利に就て資本を融通して貰ふ、或は借り、或は貸し、或は品物の代金の決濟をし、一切合財やつて居つたのであるが、英國が資本の輸出を主とするやうになつてからは、商品の輸出を專らとして居つた時代とは、世界の中央市場と云ふ意味が大分違つて來た。

倫敦のロムバード街は金の自由市場として、如何なる時でも、又如何に多くとも賣買が出來た。貨幣の本位である金が自由に賣買出來るから、從つて一切の債權債務の決濟が出來た。それで皆倫敦に行くから、倫敦には溜つ居る金が殆ど無い、始終流れ出たり流れ込んだりして一刻も斷絶しない、けれども堰止めればウンと溜ると云ふ市場であつた。所が資本を輸出するやうになつてから後は、倫敦に集つて來た所のものは、皆輸出に充てゝしまふ。自國に出來た資本を輸出するばかりでなく、他國から來て居る資本も輸出して居る。詰り英吉利に入つて來た所のものは、悉く資本に化し、資本として輸出して居る。日本が有つて居る債權でも、英吉利國內に在るものは、英吉利は之を自分の資本として輸出して居る。亞米利加が倫敦へ行つて品物を賣つた代を取つて、其の代金を暫く預けて置くと、其の金は英吉利の資本となつて輸出される。而して其の輸出先は何處と限らない。競爭の相手國たる日本にでも何でも貸付けて、どし〳〵競爭させる。それが見す〳〵分つて居るが、どうすることも出來ない。即ち英吉利の絶大なる金融の力は、總てのものを資本に化して輸出し、而して其の利益は英吉利が取る。英吉利に對する債權者には、英吉利國內に於ける利子、二分かそこらを拂つて置いて、自分が外國に貸した利子は八分にも九分にもなる。即ち之を亞弗利加なり、南米なり、印度なり、濠洲なりと云ふやうな未開の國に高い利子で貸して、其の利益は皆自分が取つてし

まふ。どうしてさう云ふことが出來るかと云ふと、今まで世界の金は皆倫敦に集まる、倫敦に行かなければ貸さうと思つても貸せられないし、借りたいと思つても借りられない、倫敦ならば何日でも貸すことも借りることも出來る。それは英吉利の金融市場が危險の無いやうに、或は危險を最も小にするやうに色々聯帶責任の組織が出來て居るからである。例へば日本が支那に金を貸す、經濟借款とか何とか云ふことで金を貸さうと云ふ場合でも、日本が單獨で貸したのでは危險で堪らない。仕方がないから英吉利の手を通して貸して貰ふ。さうすると英吉利は八分なり一割なりの利息を取りながら、日本には英吉利の相場で二分位の利息しか拂はない。殊に英蘭銀行では、當座預金には利子を拂はない。さう云ふ無利子の金でも、やはり資本として使つて居る。さう云ふのは丸儲けになる。

そこで英吉利以外の各國では、どうかして此樣な組織は打壞したいと思つて居るが、中々打壞せない。と云ふものは今までの樣な便利を受けて來たからである。英吉利に行きさへすれば何時でも金を買ふことも賣ることも、貸すことも借りることも出來たが、其の代り甘い汁は皆英吉利に吸はれて、各國は粕しか嘗められない。けれども長い間やり來つて、總ての機關が井然と出來て居るから、如何ともすることが出來ない。唯、米國だけは、紐育のウォール・ストリートを以て倫敦のロムバード街に對抗しやうとして努力して居たが、戰爭前まではそれも出來なかつた。戰爭が始まつて以後、大分金融の實力が紐育に移つて行つたが、まだロムバード街に取つて代はることは出來ない。恐らく將來と雖も、容易にそれは出來なからうと思ふ。それならなぜ倫敦のロムバード街が、さう云ふ地位を占るに至つたかと云ふと、詰り信用機關が非常に發達して居るからで、是は到底他の國の企て及ばざる所である。そこで是は爲替の說明にも、資本運用の說明にもなるから、此の場合簡單にロムバード街の模樣を說明して見よう。

七　金融中心國としての英國

先づ手形の事に就て云ふと、例へば横濱のAなる商人が亞米利加のBと云ふ人から品

物を買つた。買ひは買つたが資本の手薄な人で、直ぐに右から左に代金を拂ふことが出來ぬ。けれども二月なり三月なり待つて貰へば、今三千圓で買つたものが、四千圓に賣れる見込があると云ふ所から、Bと相談の上、金を送る代りに金三千圓何月何日何々銀行に於て代金相渡可申候也と云ふ手形をAからBに向つて送る。それを約束手形と云ふ。Bは三千圓の約束手形を受取つて、其の取引は濟ませたが、Bも亦二月先きまで其の約束手形を持て居ることが出來ぬ、一日も早く之を現金に換へて運轉しなければならぬ、六十日なら六十日の間の利息は差引かれても、之を金に換へた方が利益であると云ふ場合には、倫敦に居る所のCに依頼する。紐育などの銀行へ持て行つても、Aは果して信用すべき人かどうかと云ふことが分らないから割引をして呉れない。所が倫敦のCは世界中に色々な關係を有つて居るので、日本の事情も分つて居る、横濱のAと云ふ人には此の位の金を支拂ふことが出來ると云ふことを知つて居る、其約束から手形引受をしてやる。即ち期日が來て若しAが拂はなければ私が拂ひますと言つて裏書をする。

併しBは多くは引受をするだけで、自分が割引をしてやるのではない、引受料を取つて裏書をしてやるだけである。所がCは倫敦に於ては大變信用のある者であるから、Bは Cの引受けた約束手形を以てDの所へ行と割引をして呉れる。DはAをば知らないが、Cは能く知つて居る。そこでCが裏書をすれば間違はないと云ふので、Aの出した手形を割引してBに金を渡す。此の引受を商賣として居る者を稱して引受屋（アクセプチング・ハウス）と云ひ、割引を商賣として居る者を割引屋（ヂスカウンチング・ハウス）と名ける。割引屋は銀行ではない、預金などは扱はないで、手形の割引のみを專業として居る、是が倫敦には澤山居る。引受屋は割引をしない、唯世界中の商人の信用調査をして、世界中から集つて來る手形の引受をして居る。さう云ふのが倫敦には澤山にある。

所で此の割引屋は、一口に言へば、金を貸して利息を取るのが商賣であるから、金が非常に忙がしい。そこで割引屋は、其の割引した手形を銀行へ持て行つて又割引して貰ふ。之を再割引と云ふ。資本と云ふものは、成るべく多く廻轉させた方が利益である、

出來るならば同じ金を一日に何遍も廻はした方が利益であるから、割引屋は直ぐに其の手形を銀行に送つて再割引をして貰ふ。銀行は預金も扱つて資金も潤澤であるから、是が再割引をしてやる。若し銀行でも其を其の儘寢かせて置くことの出來ない場合には、更に英蘭銀行へ持て行つて再々割引をして貰ふ。

さう云ふやうな組織になつて居つた所が、今度の戰爭が始まるや、市中の銀行が警戒を加へて手形の割引をしない。資金が無い譯ではないが、戰爭の前途の見込が立たないから手控へる。併し其の場合でも道に英蘭銀行は偉い、市中の銀行が手控をして居るやうな場合でも、英蘭銀行は手形の性質さへ良ければ決して割引を拒まない。即ち第一流の引受屋の引受けた手形ならば、幾らでも割引に應ずる。此處が倫敦の中央金融市場たる所以である。なぜ其が出來るかと云ふと、英蘭銀行は割引をする金を無限に有つて居る。他の銀行は預金を運轉して居るだけだから、預金の在高しか使へない、又預金の中には何時取付けられるか分らぬのもあるから、幾らでも割引して金を貸出すと云ふことは出來ない。所が英蘭銀行は預金もあるけれども、預金にあらずして、而も何時取付けられても拂ふことの出來る金を持て居る。それは何かと云ふと兌換券である。英蘭銀行は兌換券を發行する權利を有つて居るから、兌換券を印刷する時間さへあれば、幾らでも金が出來る。是は他の銀行では出來ないことで、英蘭銀行だけが出來るのである。英蘭銀行で發行した兌換券は、直ちに貨幣と同樣に流通するから、そこで幾らでも割引の請求に應ずることが出來る。

斯う云ふと、それなら我邦の日本銀行だつて同じではないか、印刷局で兌換券を印刷して持て來れば幾らでも出來るだらう、それに日本銀行は英蘭銀行の眞似をして拵へたのだから同じに行くだらうと思ふ人があるかも知れぬが、それは日本銀行には出來ない。なぜかと云ふと英蘭銀行には何時でもそれを金に引換へるだけの力がある。兌換券を出すことは、印刷機でゴロ〳〵と刷つて出せば宜いのだから極めて容易いやうであるが、其の代り兌換券は金に引換へなければならぬ。故に餘り多くの兌換券を出すと、

日本銀行などでは、金の引換に來られた時に、終には金が無くなつて、兌換停止をしなければならぬやうになるから、無制限に兌換券を出す譯に行かない。所が英吉利は前にも云ふ通り金の自由市場であるから、金が寸時も絶間なく、流れ出たり、又流れ込んだりする。恰度此の前を流れて居る天龍川の水のやうに、水の深さは左程でないが、溜つて居る水でなく、流れて居る河の水と同樣だから、兌換券と金とを引換へても、後から後からと入つて來て盡さることがない。水車がグル〳〵廻つて居るやうであるから、英蘭銀行だけは、幾らでも手形の引換に應ずることが出來るのである。

英吉利は大抵金曜日土曜日が支拂日で、此の日に諸拂をするから、銀行に割引を求めて來る者が多い。そこで此の兩日は英蘭銀行の兌換券發行高が非常に殖える。又それを金貨に引換に來る者も頗る多い。所が日曜一日明けて月曜日になると、今度は預金する者が大變に多くなる。と云ふものは勞働者は、賃銀として英蘭銀行の兌換券を受取ると、直ぐに之を拂に當てる、肉屋に拂ふ、酒屋に拂ふと云ふやうに、色々の拂ひに當てる。之を受取つた商人は、自分の懷ろに入れて置かないで、直ぐに銀行に預入れると云ふ習慣になつて居るから、金曜日土曜日に出した兌換券は、二三日すると大部分又英蘭銀行に戻つて來る。唯だ外國へ支拂はなければならぬ分だけは、直ぐに戻つて來ぬが、一方に出て行くと共に、他方には入つて來るから、巧く循環して居るのである。

それから英蘭銀行でも市中の銀行に於ても、手形の割引をするに、成べく滿期になる日を順に揃へると云ふことをする。それ故に今日八月三日なら八月三日ばかりの手形を有つて居つて、後の四日五日六日の支拂の手形は無いと云ふやうなことはしない。八月二日に十萬圓、三日にも十萬圓、四日にも十萬圓と云ふやうな風に、手形の期限の日を揃へて置く。是は英蘭銀行でもやるけれども、特に引受銀行で揃へて置く。夫故に滿期の日が一緒になつて、一時に非常に澤山な、何千萬圓と云ふやうな需要があつて、其の次の日には少しも要らないと云ふやうなことのないやう、何時も平均して圓滑に轉〻流通して行くやうになつて居る。それ等の仕組と云ふものは、ロムバード街に於ては

最も完全に出來て居る。他の國でも手形の日附を揃へると云ふ事は無論やつて居るが、どうも倫敦のやうに巧く行かぬ。英吉利には世界中の手形が集つて來て、其の額も多いから、どうにでも思ふやうに調節することが出來るが、他の國では出と入とが巧く出合はない、どうしても偏るから、非常に巨額の金を準備して置けば兎も角、さうでなければ圓滑に運轉して行くことが出來ない。倫敦のみは、それが工合好く行はれるやうになつて居る。

以上國際間の商業上の取引は倫敦に於ける引受屋、割引屋、市中銀行、英蘭銀行と云ふ樣な機關で決濟するのであると云ふことを約束手形を一例として簡單に說明したが、實際には約束手形を以てするのでなく、多くは爲替手形を使つて居るのである。而して倫敦に於て或は爲替と言ひ、或は手形といへば必ず爲替手形のことを意味するのである。

爲替手形とはどう云ふ形式のものかと云ふと、約束手形に於ては、AがBに對して、何月何日に金何圓を支拂ひなすと云ふ約束をするので、Bがそれを早く金にしたい時には、Cに引受けて貰つて、Dの所で割引して貰ふと云ふことになつて居る、然るに爲替手形に於ては、Aが約束手形をBに送る代りに、代金を受取る可きBの方から發動して手形を振出すのである。即ちBからA宛にして、此手形一覽後、或は何月何日に金何程をC殿へ御仕拂ひ下さる可く候と云ふ形式の手形を出すのである。約束手形は、AがBに對して、五千圓なら五千圓を何月何日に拂ひますと云ふ手形を出すのだが、爲替手形は反對にBがAに對して、五千圓を何月何日にC殿へ御拂ひ下さいと云ふのである。CはAから五千圓を受取る權利はないのであるが、其の手形を持つて行けば、Aから五千圓を拂つて貰へると云ふことを知つて居るから、CはBから手形を買ふ、買ふに就ては五千圓に對して割引をする。所がCは引受をするのが商賣で、割引が商賣でないからCは金を拂はない。唯だ引受だけをし、更に之を割引屋へ持つて行つて、此處で割引いて貰ふ。詰りAの拂ふべき金に對して、Cが引受をし、其の手形をDの所へ持つて行つて割引をする。若しCが直ぐに金を拂へば、引受屋と割引屋とを兼ねることになるのだ

が、それでは危險が多いから、危險を全部負擔して困ると云ふ時には、引受屋は引受だけの責任を負ひ、割引は割引屋がする。割引屋が割引をした手形は、又それを自分の所に溜めて置かないで、其中の或る部分は、直ぐに銀行で再割引をして貰ふ。或は英蘭銀行へ持つて行つて再割引をして貰ふのである。

此の手形を受取つた銀行は、期日が來れば又Aから金を取らなければならぬ。五千圓をAから受取るのであるが、倫敦の銀行にはAやBの手形だけではない、XなりYなりZなり、世界中から澤山の手形が集つて來て居るので、其の手形をAが拂ふ期日、若くはXYZが拂ふ期日まで待つて居ない。之を引當てにして爲替を賣る。それも其の爲替を賣るのでなく、他の爲替を賣るのである。例へば倫敦に於て紐育に對して二億萬磅の債權があるとすると、二億萬磅だけの爲替が賣れる。どう云ふ人が買ふのかと云ふと、亞米利加から品物を買つて、其の代金を亞米利加へ拂はなければならぬ義務のある人が買ふのである。金を拂はなければならぬ義務のある人が、金を亞米利加へ送る代りに銀行へ行つて亞米利加宛の爲替を買ふ。亞米利加の銀行で金の取れる爲替を買ふ。爲替には此手形一覽後直ちに、若くは何十日後、或は何ケ月後に幾ら〳〵の金をお拂ひ下さいと云ふやうに色々の種類がある。一覽後直ちに御拂ひ下さいと云ふのを參着爲替と云ふ。普通爲替相場と云ふ時には、參着爲替の相場を取つて言ふ。參着相場が何時でも土臺になつて居る。參着相場よりも下にあるのがTT相場、即ち電信爲替相場（Telegraphic transfers）である。是は電報料が掛るのと、期限が短い。故に其の電報料と利子とを差引いたものが相場になるので、爲替の立相場は常に參着爲替である。

所で其の爲替には受取る方と拂ふ方とある。それが丁度同じ位であれば相場が平準點（Par）に近くなる。平準點と云ふのは英吉利の磅に對する亞米利加の弗、獨逸の馬克、佛蘭西の法、或は日本の圓との、金の値打の比較である。日本の一圓が二志〇片八分の三であると云ふのは、英吉利の二志〇片八分の三の金と、日本の一圓と丁度同じである。それを平準點と言ふのである。それで爲替の賣と買とが略々同じ額ならば、平準點

に極く近くなる、勿論キッチリ平準點に歸すると云ふことはない。何となれば爲替を送る間の日數があるから、其の間の利息がある。其から若し金を送るとすれば、運賃が要る、保險料が掛る。だから金を送るよりも爲替で送つた方が何時でも幾らか安く上る。所が爲替相場が高くなると、金を送つた方が却つて安く付くやうになる。運賃も掛け、保險料も掛けて、金を英吉利から亞米利加へ送る。或は亞米利加から英吉利へ送つた方が割合が安くなることがある。滅多にさう云ふことは起らぬが、偶にはさう云ふことがある。其の現金を輸送するも、爲替で送るも同じであると云ふ點を現金輸送點と云ふ。現金輸送點よりも爲替相場が上れば、金を送つた方が安く付く。併し金點も決して確定不動のものではない。何となれば運賃は上つたり下つたりする、保險料も上つたり下つたりする。運賃が安くなり、保險料が安くなれば、金點は割合に低くなり、運賃が高くなり、保險料が高くなれば、金點も高くなる。故に餘程替爲相場に相違がなければ、金を送つては引合はないから、自ら金を送らないやうになる。

けれども亦人爲的に金點を高めることもある。金が國外に出て困ると云ふ場合には、金點を高くして、金を送れないやうにすることもある。それは何處で誰がするかと云ふと、中央銀行でやる。即ち英蘭銀行でやる。どうしてやるかと云ふと、英蘭銀行の公定利率を高める。二分であつたものを五分にし、八分にし、一割にする。さうすると金利が高くなる。金利が高くなれば、英吉利から亞米利加に輸送するには少くとも一週間は掛るから、利息が高くなると從つて金點が高くなる。中央銀行の利率と云ものは、其の國内の資本の需要供給の關係も見て居るが、同時に外國に對する金の輸出入と云ふことにも注意し、これで調節をして行く。さうして其の以外に、爲替相場に手加減を加へることはいけないことになつて居る。中央銀行の公定利率の高低に依つて、爲替相場の調節をすると云ふことは極めて健全なることであつて、又しなければならぬことになつて居る。所が今世界中で、それの出來て居る國は一箇國もない。日本などは戰爭前も出來なかつたが、今も尙出來ない。唯倫敦だけは金の自由市場であるから、中央銀行の

利率の上げ下げに依つて、爲替相場を調節することが完全に行はれて居つた。此れが世界金融中心市場たる英國の戰前の狀態の一班である。

然るに今度の戰爭が始まつた爲めに、此英國の金融市場に大變化が起つた。今まで圓滑に運轉して居つた機關が、開戰と共にピタリと止まつた。と云ふのは非常に巧妙に出來て居る機械であるから、故障がなければ巧く動いて居るが、髮の毛一筋程の故障でもあると、全體の活動が忽ち止まつてしまふ。日本の金融界のやうな粗雜な仕組なら、假令齒車一枚位缺けて居てもガタピシし乍らも動いて居るが、英國の金融市場は其仕組が餘り巧妙に出來て居た爲に、今度の戰爭が起るや否や、忽ち其の運轉が止まつてしまつた。扨然らば其の故障の爲に英吉利の金融界にどういふ變化が起つたか、以下之を說明して見やう。

八　英國金融市場の變調

歐洲大戰の開始は世界經濟の中心たる英國の金融市場に大變調を齎らした。何故であるかと云ふと、戰爭が始まれば今迄のやうな金の自由市場といふものがなくなつてしまふ、倫敦に行けば必ず金が取れもするし拂ひも出來、總ての債權債務の決濟が出來る、總ての爲替は倫敦に集中すれば宜いと云ふことが出來なくなるから、出來る丈け金を持つて行かう、それも爲替で送つたのでは危險であるからと云ふので、爭つて英蘭銀行に向つて金を取りに來た。是は色々の形に於て取りに來た。預金を引出しに來る者もある、手形を英蘭銀行へ持つて來て、買つて呉れと言ふ者も殖えて來た。手形で持つて居つては危險だと云ふので、現金に換へて貰つて自分が持つて居る。それから英蘭銀行の發行した兌換券も、平生は外國へ送る必要でもなければ兌換を請求に來ないのが、兌換券で持つて居ると危險だからと云ふので、兌換に來る。それらが一日に非常な高に上つた。今迄は金に換へないで、唯紙と紙とが形を變へて、グル〳〵廻つて居つた。それで巧く金融機關が動いて居つたのが、悉く金にしなければならぬことになつた。即ち段々說明した極めて巧妙に出來て居つた機械にタツタ一つ狂ひが出來た、金の出入が自

由でなくなつた。金の自由市場は全くは無くなつたのではないが、無くなりはせぬかといふ懸念が起つた爲に、全體の機關がピッタリ止まつてしまつた。英吉利の金の自由市場といふのは、自分の所に金が澤山あると云ふ譯ではない。國内に金を持つて居る額から言へば、佛蘭西でも、露西亞でも、英吉利より多い。多いが金の自由市場ではない、と云ふのは金が溜つて居るだけで流出さない。流出しても、其の流れが誠に細い。細い流れで入つて、細い流れで出て行くのである。所が英吉利は寸時も停滯して居ない、斷えずドシ〳〵流出し、又斷えずドシ〳〵流れ込んで居る。だから其の水を汲もうと思へば何時でも入用だけ汲むことが出來る。さう云ふ働きが出來て居つたのが、戰爭の起つた爲に、出て行くものは出て行くが、入つて來るものは殆んど止つた。獨逸も、佛蘭西も、露西亞も、平生から金の自由市場ではないのが、戰爭が始まつた爲めに金の出ることを急にピタリ止めてしまひ、さうして一面には兌換を停止したから、今迄此等の國から英吉利へ入つて來たものが入つて來なくなつた。目に見えて一番澤山流れて來る所の川が止まつてしまひさうになつた。まだスッカリ止まり切りにはならぬが、止まりさうになつた。そこで愚圖々々して居ると、金の自由なる供給が得られなくなるから、今の中に金を取つてしまふ方が宜い、本當に得られなくなつたら兌換の請求に行つても駄目だから、今の中に取つて置かうと云ふので、中央銀行に對する金の要求が非常に殖えて來た。

さてさうなると、之を唯だ自然に放任して置いて、利率の引上げで抑へると云ふだけでは力が足りない。非常手段に出なければならぬ。其の非常手段として何をやつたかと云ふと、歐羅巴大陸の獨佛露國等では兌換を停止した。兌換券を今日限り引換へないぞと言つた。英吉利では兌換停止はしない、今迄の歐羅巴の戰爭の經驗では、戰が始まると直に兌換を停止したと云ふ例は滅多にない。何となれば兌換を停止すると云ふことは、非常な不名譽である。又非常に市場を攪亂する。故に出來るならばそんなことはしたくない。兌換停止は、或る意味から言へば國の身代限りと同じであると云ふ考が、

深く歐羅巴人の頭にあるから、出來るだけは避けたのである。併し今度の戰爭では、それを避けないで、皆即時に兌換停止をやつた。流石の英吉利でさへ英佛戰爭即ちナポレオン戰爭の時には兌換を停止した。コレは拂へるだけは拂つて、愈々拂へなくなつたから支拂を停止したのである。其の時にはもう餘程金が減つてしまつて居た。所が今度獨逸や、佛蘭西や、露西亞が兌換を停止したのは、金が無くなつたからではない。金は少しも減らない。まだ開戰したばかりだから、少しも減りはしない。寧ろ金の出ることを手心したから、少しは殖えた。そこへ兌換停止をしたから金はある。即ち拂へば拂へるのに兌換停止をしたのである。之を個人に例へると、金が無くなつて、拂へなくなつたから、どうぞ拂ひを待つて呉れと云ふのが一般普通であるのに、今度の獨佛露のやり方は左樣ではない、金はある、拂はうと思へば拂ふ金はあるのに、拂はないで、待つて呉れと言ふのである。是は甚だ怪しからん、拂へるものを拂はないのは怪しからん、如何に非常な時と雖も、拂ひ得るものを拂はないで、兌換停止をしたのは怪しからんと言へば言へるのだが、今日になつて見ると、獨逸、佛蘭西、露西亞等が、開戰の初めに當つて兌換停止をしたことは、大變機宜に適つて居る。若し此の時にやらなかつたならば、戰爭以外に餘程の苦痛を被らなければならなかつたと云ふことが今では明瞭に分つた。

是れは主として獨逸の智慧である。獨逸は開戰の場合には、直ぐに兌換停止をする準備をし、之に要する一切の法律規定までもチャント拵へて居つたから、開戰と同時に直ぐそれを實行して、バタ〳〵と門を閉ぢてしまつた。戰爭前までは、學者も政治家も、金と云ふものは入用の時には何時でも得られるものである、だから兌換に必要以外の金を持つて居る必要はないと言つて居つた。所が獨逸では、實際の施設として、此の學者の說、學問上の定論とは全く矛盾したことをやつて居つた。即ち普佛戰爭で佛蘭西から取つた償金の中、十二億萬馬克、即ち六千萬圓程に當るだけの金を、伯林の直ぐ近所のスパンダウのユリウス塔と云ふ所に仕舞つて居つた。其の塔の中に嚴重の金庫を拵へて入れて置いて、一中隊の兵隊に番をさせて居つた。之を見た世界の財政家、經濟學者の

大部分は嗤つて居つた。馬鹿なことをするものだ、六千萬圓の金を寢かして置いて、少しも利用しない。運用すればそれだけ利息が付く、一八七〇年代から今日迄には非常な利息が溜つてゐる、馬鹿なことをすると言つて嗤つて居つたが、今度の戰爭になつて、四十年餘も六千萬圓の金を唯だ寢かせて置いた効能が分つた。即ち直ぐに之を帝國銀行の所有に移し、尙色々な方法で、民間から金をどし〳〵吸收した。と云ふのは、戰爭中は金が要る、非常に金が要るけれども、それは使つてしまふのではなく、持つて居ると云ふことが必要である。何故持つて居ることが必要かと云ふと、戰爭中に使ふのではなく、戰爭が濟んで、愈々常態に歸ると云ふ時に、ウンと金を積んで居ると云ふことが必要である。どうせ戰爭中は色々非常手段を執つて、金の出ることが出來ないやうになつて居る。英吉利のやうに兌換停止をしない國でも、金の出ることは事實上殆ど出來ないやうにして居る。唯だ兌換停止をすると云ふことは、體裁が惡いと云ふだけである。體裁が少し宜いと云ふことの爲に、どん〳〵兌換の請求に應じて金を出せば、戰爭中も心細く、又常態に歸つたときに、土臺となるべき金が無い。さうなると戰爭が濟んでも何時迄も民間に流通して居る銀行券は兌換が出來ないで不換券になる。不換券は勿論いけない。戰爭中、非常の時には我慢もするが、常態に復してもまだ不換券を有つて居ると云ふことは、是は經濟界を攪亂する。戰爭が濟んで、平時の狀態に歸る時、成べく早く兌換を恢復するには、金をウンと持つて居なければならぬ、其を獨逸は今やつて居る。それから佛蘭西でも、露西亞でも、兌換の維持が出來るならばそれに越したことはないが、どうもそれは覺束ないから、それよりまだ拂へば拂へるが、今は待つて呉れ、其の代り決して倒しはしない、懲じ今拂つて、他日若し誰れかの債權を踏倒すやうなことになつては、國民一般の迷惑になるから、さうならない爲にやつたのである。之に反し英吉利は今日迄ズット兌換を維持して來て居るが、是は英吉利にして初めて出來ることであつて、獨逸や、佛蘭西や、露西亞では迚も出來ない。三年も續かぬ。否一年續くことも出來ないと云ふことが分つて居つた。そこでどうせ兌換を停止しなければならぬなら

ば、行き詰つてからするよりも、今まだ餘裕のある中に停止する方が害が少ないと云ふので停止したのである。

英吉利は戰爭前と同じに兌換制度を維持して居るが、英吉利と雖も無制限にやつて居つてはやはり金が無くなつて、結局は兌換停止をしなければならぬことになる。そこで兌換停止をしないと云ふ名目を何處迄も立てる爲に、一方に於て非常に制限した。其の制限とは何かと言ふと、外國爲替の作用を利用したのである。即ち英吉利では兌換停止はしなかつたけれども、開戰と同時に銀行の休日を臨時に延長した。政府の命令を以て英吉利中の有らゆる銀行を强制的に三日間休ませた。恰度其の日は日曜日に當つたから木曜日になつて店を開けさせた。事實四日間休ませたのである。木曜日になつて開店したが、十分に營業させないで、數日後になつて初めて本當に營業の出來るやうにした。これは甚だ姑息の遣り方であるけれども、當時の急に處する手段としては已むを得なかつた。何故タツタ三日や四日休んだゞけで、都合が付いたかと云ふと、戰爭が始まると共に、英蘭銀行に對して金の引換を求むる者が非常に殖えた。又平生は金の引換に來なかつた割引屋、或は市中銀行が、自分の持つて居る手形で、英蘭銀行に買つて貰へるものは皆買つて貰ひに來た。又今迄小切手で仕拂つて居つたのが、小切手で受取るのを拒み、正貨で拂つて呉と云ふ者が多くなつた。又市中銀行に預金をして居つた者も、預金を引出す、所が市中銀行にもさう十分に金のある譯はないから、市中銀行は英蘭銀行に求める。併し英蘭銀行にしても、無限に金の準備がしてあるのでないから、兌換券を非常に增發した。丁度金曜日と土曜日、此の二日は非常に兌換券を增發した。增發すると、英吉利の兌換券は五磅(約五十圓)が一番小さいのだから、大きな仕拂には差支ないけれども、小さな仕拂には困る。如何に英吉利と雖も、五十圓の紙幣ばかりでは仕拂が出來ない。殊に之を受取つた小賣商人、勞働者、薄給者などは非常に不自由である。だから之を直ぐに金貨に引換へる。金貨は十志(シリング)と一磅、即ち五圓及び十圓であるから、是ならば大抵間に合ふ。後は補助貨でお釣を取れば宜い。さう云ふ風で外國貿易

の爲でも何でもなく、國内で使ふ爲に金の需要が非常に殖えた。そこで金曜日から土曜日に掛けて英蘭銀行から出た兌換券が、工場主なり商店なりから、勞働者、雇人などの手に渡つた時は土曜日で、土曜日の午後は休みだから、兌換が出來ない。日曜日は當然休みだが、月曜日に店を開けば、一時に引換の要求があると云ふことは分つて居る。兌換券の出た後の市中の形勢が不穩である。そこで一時に來られては溜らぬから、銀行の休日を延長した。是が爲め金は受取つたが、何處へ行つても兩替が出來ない。強いて兩替すれば損が行くから、成べく使はずに持つて居る。所がもと〳〵要る爲に引出した者は寧ろ小數で、戰爭になつたから萬一の場合を想像して、遽てゝ引出した者が多かつた。一時不安の念に驅られて取付けたのだから、二三日經つて段々落着いてから考へて見ると、馬鹿氣たことをした、要りもしない預金を引出して、利息がフイになつたと云ふやうなことで、又其金を元の銀行へ持つて行つて預ける。預ければ預けただけ英蘭銀行に返る。三日間休日を延長して、木曜日に店を開けると果して預金が大變殖えて來た。さう云ふのが一の働きである。

今一つは、さて其の曉に、やはり金を要求して來る者がある。是は本當に金が要る人で、さう云ふのは二日や三日休んだのでは心變りをしない。本當に金の要る人は、多くは外國に金を送る人である。外國に金を送る人は誰れかと云ふと、商人などは送らない、幾ら爲替相場が高くなつて、現金輸送點になつても、現金輸送の事實は商人自身がやるのではない、銀行がやる、或は割引屋がやる、或は引受屋がやる。詰り金の貸借を以て商賣にして居る者、即ち爲替關係者である。此等の人は何の爲に金が要るかと云ふと、平生は爲替の運用で、唯だ帳尻の差額を現金で遣り取りして居つたので、それは誠に僅かなものであつた。然るに開戰となるや、英吉利の金融市場に對して疑惧の念を懷く者が多くなつたので、倫敦の金融業者に向つて現金を送つて呉れろと云ふ要求が增して來た。さうすると是はどうしても送らなければならぬ。そこで引受屋、割引屋も好んでするのではないが、債務を決濟しなければならぬから、これは兌換券を持つて來て金

と引換へて行く。であるから市中銀行、割引屋、引受屋等は、外國に拂はなければならぬものが無くなれば、英蘭銀行に金の引換へに來なくなる。來るなと言はなくても來なくなる。所がそれは默つて居つては出來ない。そこで政府の力で堰を設けて之を制限した。英吉利は世界の各國に對して多くの債權を有つて居るが、一方には債務をも有つて居る。所で英吉利から金を借りて居る方は戰爭が起つても默つて居る。アナタの方で要りさうだから返しませうと言つて來る者は一人も無い。之に反して貸して居る方は、サア返して呉れと言つて取立てる。債權と債務とが一緒になつて來れば巧く決濟が出來るが、債務者の方は默つて居て、債權者だけが取立てる。それでは如何に英吉利と雖もやり切れるものでないから、之を防ぐ爲に引受屋、割引屋、銀行業者、其の他一般の人民に對して、外國の債務は一時支拂を停止するやうに命じた。それが即ちモラトリウムである。モラトリウムと云ふのは延ばすとか、延滯とか云ふ意味で、借金を倒すのではない、唯だ引延すだけである。併し戰爭になつたからと言ふて急に借金の支拂を延ばす必要がある譯ではないが、當時の英吉利の事情としては是亦已を得ざる手段であつた。素より好ましい方法ではないから、英吉利では間もなく廢してしまつたし、英吉利に眞似をしてモラトリウムをやつた他の國でも事實は皆廢してしまつた。日本は必要がなかつたのでやらなかつたが、戰爭に少しも關係のない國迄も之を好い機會にしてやつた。あの偉い金持の英國でさへ、拂ふべきものを一時待つて呉れと言ふのだから、吾々貧乏人がやつても差支ないと云ので、南米邊の小さな國までも眞似をして、モラトリウムをやつた。是は非常な人權蹂躙と言へば言へるが、併し其の人權蹂躙は、主として外國に對する人權蹂躙である。借金を拂ふのに、平時の樣に品物で拂ふならば宜いが、現金で拂はなければならぬのだから、其は困ると云ので仕拂を延期させた。是は個人々々が今戰爭が始まつたから仕拂はないと言へば甚だ信用を害し、又法律問題を惹起すが、國家の命令を以て、英吉利の總ての引受屋、割引屋、銀行業者は、暫く仕拂をしないでも宜い、色々の條件を設けたが、其の條件に從つて拂はないでも宜いと云ふことになつた。

外國に拂ふ必要が無くなれば、兌換券を英蘭銀行に持つて行つて、金に引換へて貰ふ必要が無い。そこで前に出した兌換券は、又英蘭銀行に戻つて預金になつた。是に於て前に出した兌換券は、色々な形で間もなく回收されてしまつた。英蘭銀行では一度出した兌換券が再び歸つて來ると、それを二度と出さない、直に燒いてしまふ。日本の日本銀行兌換券は、出て行つたり戻つて來たり幾度もするから、ボロ〳〵になつたり穢くなる。英吉利の兌換券は皆綺麗で、ボロ〳〵になつたのはない。世界で一番ボロ〳〵の紙幣は、希臘、亞米利加、佛蘭西、獨逸などである。吾々は紙幣と云ふと、お宮があつたり肖像があつたりして、美しく印刷されたものゝやうに思ふが、英吉利のはさうでなく、眞白の紙に唯黑く印刷してあるだけで、札とは思へない。さう云ふ風で一旦出したものが歸つて來ると、直ぐに燒いてしまふ。更に出す必要があれば、又新にゴロ〳〵刷つて出す。それで四五日の間、兌換券の發行高が非常に多くなつたと云ふだけで、又舊に返つてしまつた。

この銀行休日の延長、モラトリウムの實行と云ふやうなことは、あの場合に於ける臨機の處置として寔に已むを得ないとであつたが、之に依つて英吉利が世界金融の中央市場であると云ふ顏は、潰れてしまふた。英吉利に外に偉い所がある譯ではない。英吉利に行けば、如何なる借金でも直ぐに出來るし、又返さうと思へば返せもする。それから金の自由市場であると云ふことが偉いのである。所が金が自由ではない、兌換は停止しないけれども、モラトリウムと云ふやうな非常手段を採つた。斯うなると英吉利と雖ども必ずしも安全でない。倫敦なら大丈夫だと言つて安心して置くことが出來ぬ。或はモラトリウムの範圍をもつと擴張して、結局英吉利にある外國の債權を踏み倒すやうになるかも知れない。當に金の貸借ばかりではなく、品物の遣り取りも、保險も、運賃も、何も彼も倫敦を土臺としてやつて來たのが、土臺が壞れてしまつたので、皆困つてしまつた。成程獨逸や佛蘭西や露西亞のやうに、兌換停止をしなかつたとは結構であるが、元來獨逸や佛蘭西や露西亞は、世界の金融中心市場でも何でもない。唯だ自國だけの事

をして居つたのであるから、兌換を停止した所が、困るものは自國民だけである。外國に拂ふ必要があるから金が要るのだが、外國に拂ふ必要がなくなれば、金が要りはしない。日本のやうに少しも金を使はないで差支ない。所が英吉利の英吉利たる所以の、世界金融の中央市場であると云事實が無くなつてしまつたから、入つて來るものも入らないし、取れるものも取れない。自分の方で拂はないから、相手の方も拂はなくなつた。

その結果は何に現はれて來たかと云ふと、色々のことに於て現はれたが、一番初めて現はれて來たのは亞米利加との爲替相場である。戰爭の始まる直く前英吉利の爲替相場は大體斯う云ふ風であつた。

巴里	英貨一磅に對し	二十五法一六
瑞西	同	二十五法一七
白耳義	同	二十五法二三
和蘭	同	十二ギルダー一五
露西亞	同	九留七二
紐育	同	四弗九三
伯林	同	二十馬克五三五

此處で爲替相場の立方を一寸云へば、英吉利の爲替相場の立方と、他の國の爲替の立方とは大抵反對になつて居る。それは英吉利の相手國の方が發動して爲替を取組むから、相手の國の相場を其の儘英國自らの相場にして居るのである。但し日本のは違ふ。日本のは英吉利の一磅に對して何圓と云ふのではなく、一圓に對して英貨二志〇片八分の三と云ふ風に立てゝ居る。所で戰爭の始まる前の相場は此の表のやうであつたが、戰爭が始まると間もなく變動が起り、殊に一九一四年八月から十二月までの五ヶ月間に非常に變つて來た。紐育だけに就て見ると、一番安い時には四弗九十三仙、一番高い時には六弗五十仙、尤も是はホンの一日、それも丸一日ではなく、僅か半日ばかりであつたが、兎に角六弗五十仙と云ふ非常な變調を來した。是は全く英吉利が世界の金融中央市場た

る實を無くなした最も著しい證據である。四弗九十三仙位の見當であつたのが、急に六弗五十仙、商品ならば物に依ては其の位の變動のあるとは幾らもあらうが、爲替相場に斯樣な變動の起つたのは甚だ稀なことである。亞米利加の人が英吉利に金を送らうとするのに戰爭前には英吉利に一磅の金を送るに四弗九十三仙であつた。言換へると一磅の爲替が四弗九十三仙で買へたものが、戰爭が始まると間もなく、六弗五十仙拂はなければ一磅の爲替が買へなくなつたから、亞米利加人は非常に損をした。非常な損だから金を拂はない。即ち英吉利の方で借金を返さないから、亞米利加でも借金を返さない。併し亞米利加はモラトリウムで返さないのではなく爲替相場の爲に返さないのである。爲替が高いから馬鹿らしくなつて、誰れも英吉利に爲替を送る者がなくなつた。どうでも斯うでも返さなければならぬ者は金で送る。現金で一磅に當るだけ送らうとすれば、以前の四弗九十三仙に運賃と保險料を加へれば宜いのだから金を送つた方が得である。尤も六弗五十仙と云ふのはホンの僅かの間であつたが、五弗や五弗少し餘になつたことはあつたから、英吉利と亞米利加との間の爲替は止つてしまつた。是が爲に日本も大に影響を被つた。と云ふのは日本から亞米利加へ金を送るのに、今迄は直接亞米利加へ爲替を組んで居つたのが、英米爲替がこんなに變つて來たから、亞米利加へ送るのに、亞米利加へ直接送らないで英吉利に送つた。日本と英吉利との爲替相場はやはり二志〇片八分の三、フラクションに幾らか變動がある位のことで、大した變りは無かつた。であるから例へば日本から二志〇片八分の三の割合で千磅送ると、其の千磅が英吉利を通つて、亞米利加に行くと六千五百弗になる。戰爭前は四千九百三十弗にしかならなかつたのが、六千五百弗となる。コレハ極端であるが五千弗とか五千二百弗には度々なつた。故に直接に亞米利加に爲替を送るより、英吉利を通じて紐育宛の爲替を買つた方が同じ一弗拂ふのにも、前より少ない金で濟む。だから日本の爲替にも影響を及ぼして、大變それが行はれた。是は獨り日本との關係ばかりでなく、何處の國でも同樣であるから、亞米利加に金を送らうと云ふ時には、先づ英吉利に金を送る。そこで英吉利へ英吉

利へと金を送つた。即ち英吉利は、大變金が要る場合に、大陸諸國から全く來なつたが、斯く爲替相場の關係で大陸以外の他の國から出來るだけ金を吸收した。金のかき集めを爲替相場でやつたのである。

又亞米利加から英吉利へ送る金も、爲替で送れば損が行くから現金で送る。是は爲替相場が大變高いから、商賣が出來なくなつたり、或は拂ふものを拂はなくなつたから、戰爭前程の取引はなくなつたが、やはり送らなければならぬ金がある、それは爲替に依るよりは現金で送る。そこで英吉利が金を吸收しやうと云ふ目的が達せられた。例へば日本が英吉利を通せば大變利益だと云ふことになると、ドン〳〵英吉利に爲替を送る。さうすると片爲替になる。片爲替と云ふのは、日本から英吉利に送る爲替が多くなつて、向ふから此方へ來るのが少いことを謂ふのである。取る方が少くて、送る方が多いから兎に角日本の勘定に於ては、世界の何處かにある金を英吉利に送らなければならぬ。印度、支那、濠洲等、英吉利宛の爲替を組めば、皆金が英吉利に行く。そこで金が大に英吉利に入つた。是は即ち戰爭前に英吉利が有つて居つた中央金融市場と云ふことの御蔭である。開戰後中央市場たることの値打は減つたが、併し其の作用を利用して、兎に角英吉利が目前の急に充つる爲に外國爲替を利用したのである。所で亞米利加の爲替がなぜ一番飛上つたか、他の國の爲替も變つたが、なぜ亞米利加の爲替相場が飛上つたかと云ふと、戰爭が始まつて、英吉利が資金を吸收しやうとするのに、歐羅巴大陸諸國はもう駄目だ、皆自國に吸收する必要があるから、英吉利に送れない。それなら世界の國々の中、何處に澤山資金があるか、吸收することの出來る國は何處かと云ふと、日本でもなければ、支那でもない、印度でもなく、亞弗利加でもない。唯だ亞米利加一國しかない。故に亞米利加から一時の助けを藉りるより仕方がない。然るに恰かも此の亞米利加の助けを藉りやうと云ふのに、英吉利は又大變便利なものを有つて居る。と云ふのは、英吉利は澤山の資本を亞米利加に投下してある。亞米利加に金が貸してある。だから態〻亞米利加へ行つて借金を起さなくとも、從來亞米利加に貸してある貸金を取付けて、

之を英吉利に持つて來れば金を吸收する目的が大分達せられる。併し貸してある金は、遊んで居る譯ではない、總て夫れ〳〵事業に使つてあるから、サア今返せと言つても、急の間に合はない。又株式會社の株券になつて居るものは、會社に資本の償還を求むることは出來ない。出來ないが其處が金融市場の働きである。紐育は倫敦のやうな世界の中央金融市場ではないが、倫敦を除けば世界で一番發達した金融市場、ウォール街と云ふものを有つて居る。是は世界的でない、亞米利加的であるが、兎に角亞米利加の有價證券は皆紐育のウォール・ストリートに集つて、此處で賣買されて居る。紐育に行けば亞米利加の證券は何時でも賣買が出來る。倫敦ならばブラジルの公債であらうが、日本の公債であらうが、支那の株券であらうが、何處の國のものでも賣買が出來る。紐育の市場では、他國のものは出來ないが、亞米利加の有價證券ならば殆ど倫敦と同じ位に自由自在に賣買が出來る。そこまでは發達して居る。其の亞米利加の有價證券を英吉利は澤山有つて居る。英吉利の政府が有つて居る譯ではないが、民間に澤山ある。銀行の手にあり、資産家の手にある。それらの有價證券をウォール街に持つて行つて賣れば宜い持つて行くにも及ばぬ、書留郵便で送れば宜い。それも直ぐに送る必要はない、電報一本打てば事が濟む。何々會社の株をどれだけ賣ると云ふことの電報を一本打てば、證券は後から送つて宜い。是も亞米利加でなくては出來ない。他の國、例へば支那の證券などでは駄目である。サア戰爭が始まつた、直ぐに資金が欲しいと言つても、支那には證券を自由に賣れる市場が無い。日本は支那より幾らか優つて居るけれども、日本へ持つて來て英吉利人が日本の公債社債を賣らうと言つて電報を打つても、少しは賣れるだらうが、さうなると忽ち相場が暴落して市場を攪亂する。市場が小さいから、少し大きな賣買があると滅茶々々になる。亞米利加のウォール街は可なり大きいから、左程市場を攪亂しないで賣る事が出來る。從つて英吉利の目的が達せられる。英吉利に取つては、亞米利加があつたから非常に有難い。同じく資本を輸出した中にも、亞米利加に輸出して、亞米利加の事業に資金を投下してあつたと云ふことが大變英吉利に取つて强味であ

つた。ソコデ、英人の持つて居る米國の有價證券をドシ〳〵ウオール・ストリートで賣つた。此れが即ち英米爲替相場が突飛に飛上つた一の原因である。

けれども此の證券を悉く賣つてしまつて、今まで貸してあつた貸金は取付けてしまつた後の英吉利は、戰後に於ては甚だ心細い。亞米利加以外の國の事業に資金を投下することは、亞米利加より危險が多い。イザと云ふ場合に一向間に合はない。日本に貸したつて、支那に貸したつて、亞米利加のやうには行かない。又戰爭前に返つて亞米利加の事業が英吉利の資金を求めるやうになれば宜いが是は六ケしい。即ち戰爭の爲に英吉利は一時的に國際金融市場としての實を失つたのみならず、恐らくは戰後永久的に、少くも亞米利加に對する英吉利の勢力は無くなるであらう。紐育が倫敦に代つて、世界の金融中央市場になると云ふことは、是は出來ないことであるが、今まで倫敦に依賴して居つた亞米利加の金融市場は、少くとも亞米利加だけは離れてしまつて、今まで亞米利加の事業から得て居つた英吉利の利益は、皆亞米利加が自ら之を收めるやうになるであらうと思ふ。之が歐洲大戰の爲めに起つた、英國金融市場の大變調である。

九　戰費の負擔と國民經濟改造の機運

――此一節は大正七年一月『第三帝國』に掲載せり――

以上說明した英國金融市場の大變調は軈て來る可き世界經濟改造の序幕である。而して他方に於ては、戰費の負擔の爲めに各交戰國の國民經濟に大變調が起りつゝある。此事を少し詳しく話して本講演を終らうと思ふ。

今回の戰爭の始まるまでの各國の經濟は、生產を本位として居つた。生產に依つて富が作られ其作られた富が流通して個々の人の手に歸し其を消費する。即ち生產――流通――消費と云ふ順で、從つて經濟學に於ても生產論、流通論、消費論と分ち、流通論も更に交換、分配に分つて、經濟學を四つの部門に分つた。其中でも生產を出發點とし、生產が十分でありさへすれば、其の他の事は自ら之に準じて行く。故に國家としても民間の生產を奬勵し、生產を保護してやれば、流通も自ら圓滿に行はれ、消費も自ら十

分になるから、流通に對しては餘り干渉せず、唯妨害となる可きものを除去してやれば宜いと云ふことになつて居つた。商品輸出を以て立國の基礎として居た頃の英吉利に於ては政府は唯販路を開くと云ふことをするだけで宜い、販路さへ開ければ、後は賣ることも、代金を取立てるとも、それは商人がするから、政府の力を藉りるに及ばぬ。又金融市場の如きものに就ては、政府は直接には殆ど何等の干渉もしない、唯英蘭銀行を經て利子の上げ下げで調節をするだけである。又通貨の如きも、自ら增減するに任せて、人爲的に何等の手加減をも加へないのである。英吉利の金貨本位と云ふものは、政府が少しも手を加へずして、圓滿に流通が行はれるから一番良い方法と認めて採用したのであつて、他の國は英吉利と商賣をする關係上、金貨本位にするが宜い、さうして置けば國内の事情はそれに相應して行く。少しでも金貨本位に疵が付いてはいけないが、疵が付かない限りは、政府では少しも手を付けないとしてある。尤も昔はさうでなかつた。日本に於ても德川時代、又西洋に於ても昔は通貨の事に就ては國家が非常に干渉した。其干渉は主に自分の利益の爲にしたのであるから、或は不換紙幣を發行するとか、實際に價の無い貨幣を無理に流通せしめるとか、惡貨を流通せしめて其のカスリを儲ける。即ち金貨銀貨の目方を減らしたり、或は純分を少くしたり、或は中へ混ぜ物を入れたりして、一分のものを一分二朱に使はせると云ふやうなことをしたのである。

所が金貨本位となつては、さう云ふことをしたくも出來ない。若し強てすれば金貨本位でなくなる。金貨本位を維持するには、兌換制を完全に維持して置けば宜い。兌換制を完全に維持すると云ふことは、中央銀行の營業所に、營業時間内に兌換券を提出して金貨と引換を求めたならば、躊躇なく其の額に相當するだけの金を渡してやる、又金を持つて來て請求したならば、何人が幾ら持つて來ても、必ず其を金貨に鑄造してやる、それを名づけて自由鑄造と云ふ。此の兌換と云ふことゝ、自由鑄造と云ふことを固く守りさへすれば宜いのである。所が昔はさうでなかつた。如何なる時に如何なる貨幣を何程拵へるかと云ふことは、全く政府の都合次第で、人民は少しも知ることが出來なかつ

た。けれども今日金貨本位國で、自由鑄造を認めて居る國に於ては國内に幾ら貨幣があるべきかと云ふことは人民が極めると言つて宜い。尤も誰が幾らと言つて極める譯ではないが、例へば金の塊を有つて居る、或は金の指輪を持つて居る、其を金貨にして貰はうと思へば、日本銀行に持つて行つて鑄造を請求する、さうすると日本銀行では純分を量つて、それに相當するだけの金貨に拵へて與れる、即ち我が貨幣法第十四條に『金地金ヲ輸納シ金貨幣ノ製造ヲ請フ者アルトキハ政府ハ其ノ請求ニ應スヘシ』と云ふことがある。若し五圓の金貨を一つ、十圓の金貨を一つ殖やさうと思へば、それだけの金を持つて行きさへすれば宜い。民間に金を持つて居る者が多くなれば、金貨は幾らでも殖えるのであるから、兌換制と自由鑄造を守つて行けば後は干渉してはならない。干渉しなくとも國内に必要なだけは金貨が出來、必要が減ずれば減るので、自ら調節される。

兌換券は何時でも金貨と引換へらる可きものであるから、兌換券だけで流通して居る間は其の儘に置き、引換に來た者には何時でも引換へてやるのであるから、兌換券が多過ぎると、自然日本銀行に持つて來て金貨と引換へる者が多くなる。さうなると準備金が少くなるから、兌換券の出方が減る。又國内で餘計に通貨が要ることになれば、日本銀行に對して割引貸付の要求が多くなるから、兌換券が殖える。干渉しないでも、自然に巧く行くやうになつて居る。

消費に就ても同樣である。是は衞生上、或は取締の上から或る制限を設くる必要のあることも無論あるが、大體に於て誰が何を食はうと、どんな家に住はうと、どんな衣物を着やうと、如何なる生活をしやうと、國の風俗を破り秩序を紊さない限りは全く自由である。自分の得た月給を皆使つてしまはうが、半分貯畜して置かうが、四分の一貯蓄しやうが、それは全く其人の自由であつて、公の安寧秩序を害さない限りは少しも干渉しない。專ら生産を奬める、生産を奬めると言つて、一々命令をするのではなく、人民の知らないことを敎へてやるだけである。直接に保護金を與へるとか、手を引いて敎へてやるのでなく、詰り儲かるやうにしてやるだけである。若し外國から安い物が澤山

入つて來て、其の物の値が安くなれば、其事業は起らうとしても起ることが出來ない。さう云ふ場合には、消費者に取つては氣の毒であるが、輸入税を課して其品物の價を高くする、高くすれば國内で作つたものが引合ふから其の事業が起つて來る。或は米に輸入税を課すると米が高くなる、さうすると日本の農夫が作つた米が高く賣れるから、米の生産が多くなる。是れが所謂保護政策である。然るに英國は此政策を取らないで自由貿易政策によつて、民間の活動を成る可く自由にさせる方針を取つて居たのである。

所が戰爭が始まつてから後の經濟、即ち現在に於ける戰時經濟は之と正反對に各交戰國は皆消費本位となつた。戰爭は大なる消費であつて、儉約は出來ない。何でも彼でも敵に勝たなければならぬ、敵に勝つにはそれだけの物を使はなければならぬ。そこで消費を本位にして、生産及び流通は消費に順應して行かなくてはならぬと云ふ狀態に變つて來た。それは誰がすると云ふのではなく、自然の大勢である。我が日本の如きは、交戰國の一員ではあるけれども戰爭しては居らぬ。青島を攻略した後は英國海軍と共同戰位のことで、大した戰爭をして居らぬから之が爲に國費が著しく膨脹して居るのではない。亞米利加は此の頃大兵を歐羅巴に送ると言つて居るから、さうなれば歐羅巴諸國の仲間入をするけれども、それまでは亞米利加も同樣である。其の他の歐羅巴の交戰國は皆消費本位になつて居るのであるから、此の間に立つて生産本位の國が儲かるのは當り前である。先方は盛んに消費して居る、消費一方であるのに、此方は作る一方で使はないから、富んで行くのは當然である。所で戰爭の爲に失ふ所のものは決して獨り經濟上の入費ばかりでなく、人を澤山使はなければならぬ。經濟上の損失は寧ろ小なるものである。人の損失は、金錢に見積ることが出來ない、極めて貴重なものである。經濟上の入費は、金額に積つて言現はすことが出來る。今戰時狀態の調査に於て最大の權威として知られて居る丁抹コーペンハーゲンの戰時事情調査局の最近の調査を揭げて見よう（米國「アナリスト」より取る）。

交戰諸國戰費一覽表（單位百万米弗）

	一九一四年自八月至十二月（五個月）	一九一五年（一ヶ年）	一九一六年（一ヶ年）	一九一七年自一月至七月（七ヶ月）	自一九一七年八月至一九一八年八月七月（見積高）（一ヶ年）	自開戰時四個年間總計
英國	九〇〇	五、二五〇	七、六〇〇	七、〇〇〇	一三、二五〇	三四、〇〇〇
佛國	一、六〇〇	四、六〇〇	六、六〇〇	三、八〇〇	七、二〇〇	二三、八〇〇
露國	一、三〇〇	四、四〇〇	五、六〇〇	三、七〇〇	六、五〇〇	二一、五〇〇
伊國	…	六五〇	二、三〇〇	一、七〇〇	二、八五〇	七、五〇〇
白、セ、ル、蘭	六〇〇	一、五〇〇	一、六五〇	一、〇〇〇	一、八五〇	六、六〇〇
聯合國合計	四、四〇〇	一六、四〇〇	二三、七五〇	一九、四〇〇	四二、四五〇	一〇六、四〇〇
獨逸	二、二〇〇	五、四〇〇	六、八〇〇	五、二〇〇	九、九〇〇	二九、五〇〇
墺伊、土、ブ	一、三〇〇	四、四〇〇	五、一〇〇	三、一〇〇	五、八〇〇	一九、七〇〇
合計	三、五〇〇	九、八〇〇	一一、九〇〇	八、三〇〇	一五、七〇〇	四九、二〇〇
總計	七、八〇〇	二六、二〇〇	三五、六五〇	二七、七〇〇	五八、一五〇	一五五、六〇〇

即ち大正七年七月までに、總計無慮千五百五十六億弗、即ち三千億圓計りかゝる勘定である。

英國に就て見るに英國一ヶ年の國民總所得高は二十四億磅、日本の二百四十億圓程あると云ふ。英國の富の總額はどれ位かと云ふと、是は國民所得、即ち國民が年々稼ぎ出す所の富の三倍乃至四倍に當ると云ふ計算が妥當なりと認められて居る。これは英吉利だけでなく、獨逸でも佛蘭西でも大體同じである。其であるから國の富を悉く消費し盡しても、三年なり四年の間、元だけの所得を使はずに全部積んで置くことにすれば、又富の恢復が出來る。若し其の積む所の額を、以前の所得の倍にすれば、一年半若くは二年で元の通りになる勘定である。

所が英吉利の失ふ所は上に掲げた政府支出の軍事費のみに止まらず、其の以外にも色々な損失がある。例へば平生は生産に從事して居た人が、生産から離れて戰爭に從事して居る、それらの人の稼ぎ高も無くなつて居る、或は生産の爲に設けられた工場なり製造所なりが軍需品を作る爲に使用せられて居る、此等のものも損失の中に加ふべきであると唱へて居る者があるがそれは誤りである。なぜかと言ふと、生産に從事して居つた

人が生産を止めて戰爭の爲に働いて居ると言つても、此等の人に對しては、やはり報酬を拂つて居る、其の報酬は主に英吉利の政府が拂つて居るのである。而して此等の報酬なり、其の他の品物の買入代なりが積り積つて右の額になつたのである。だから右金額の外に、生産に從事する人間が、戰爭に從事して居る爲に生産が出來ない、それも損失であると言つて計算するのは誤りである。

そこで此の軍事費として使はれて居る金高の内容を別けて見ると、凡そ六つになる。其の第一は出征兵士の入費、其總人員數は別表の通りである。

出征兵數

英國	七百五十萬人	米國	二百萬人
佛國	六百萬人	露國	一千四百萬人
伊國	二百五十萬人	白耳義、セルビア及葡萄牙	百萬人
聯合側合計三千三百萬人			
獨墺側合計	一千五十萬人	墺匈	七百萬人
ブルガリア國	五十萬人	土耳其	二百萬人
獨墺側合計二千萬人			

總計　五千三百萬人

而して死傷數左の如し

死亡數

英國	三十萬七千五百人	佛國	百二十八萬二千五百人
露國	二百二十五萬人	伊國	十五萬七千五百人
白耳義	七萬五千人	セルビア	十六萬五千人
ルーマニア	十萬人		
聯合側合計四百三十三萬七千五百人			
獨逸	百三十二萬七千五百人	墺匈國	百七萬七千人
土耳其	二十二萬五千人	ブルガリア	三萬七千五百人
獨墺側合計二百六十六萬七千人			

總計　七百萬四千五百人

負傷兵數

英國	二十三萬一千人	佛國	九十五萬一千人
露國	百七十一萬九千人	伊國	十一萬人
白耳義	四萬九千人	セルビア	六萬三千人
ルーマニア	六萬人		

聯合側合計三百十八萬三千人

獨逸	九十五萬三千人	墺匈國	七十九萬九千人
土耳其	十五萬七千人	ブルガリア	二萬七千人

獨墺側合計百九十三萬六千人

總計　五百十一萬九千人

死者の總計が七百萬人、負傷兵數總計が五百十二萬人、合せて千二百十二萬人が人命に係る損害の總計である。

は(一)戰需品軍の製造に從事して居る者の入費、是は軍需品の製造に從事しなければ、それだけは生産の方に働くから、それだけの損失になる。第三は戰爭に使はれた所の鐵道、船舶、自動車、馬車、馬匹の働き、此等のものは戰爭の爲に使はれなければ、生産の方に使はれる、所がそれが生産に使はれずして戰爭の方に取去られたから、是亦一種の戰爭の爲めの損失である。第四は戰爭の爲めに死亡し、或は負傷したりした人に關する人及物の働き、即ち死んだ人を埋葬するとか、負傷者を治療する爲に醫師、看護婦、或は事務員等も相當に要する。此等の人も戰爭がなければ、何れも皆生産の方に働くことが出來た、其が戰爭の爲に生産に從事することが出來なくなつたのである。(死傷兵數は別表を見よ)。　第五は生活費の騰貴、戰爭に行つたつて食べられるだけしか食べない。それは平生遊んで居る時よりは食物の量が多く要するか知れぬが、さう餘分に食べるものではない。唯だ國内で食べる代りに、何百萬と云ふ兵隊が國外に出て居るから、其の戰地へ送る運賃や、其の他の費用が高くなる。被服でもさうである。併し被服費とか食費とか云ふものが全部損になるのではない、若し全部損と云ふ勘定にすると間違ふ。戰

爭が無くとも食べもすれば着もする、故に平生より高くなつたゞけが損になつて居るのである。第六は其の他の戰爭の爲めに特に新たに起つた所の費え、即ち材料の費えである。平時ならばレールを拵へる鐵で軍艦を造り、平時ならば工業に使ふ原料で彈藥を拵へる。是も全然損になるのでなく、使ひ方の變つたゞけの損である。先づそれだけが戰爭の爲に特に生じた入費である。

さて是れだけの入費は誰れがどうして負擔するかと云ふと、各國の政府には、之を負擔するだけの力がない。政府は人民から其の所得の或る部分を、租稅なり、其の他種々の形で取つて使ふのであるから、詰り國民が負擔するのである。英國の戰費は英國民が負擔し、獨逸の戰費は獨逸國民が負擔し、佛蘭西の戰費は佛蘭西國民が負擔するのである。所が同じく戰費を負擔するのに、其の負擔の課し方が色々ある。其の課し方の如何に依て經濟上重大なる差異を生じて來る。先づ國民が負擔するには、國民が現に有つて居る所の富を政府に納めるのが一の方法である。それから戰爭中、戰爭に從事して居ない國民が、孜々營々として働いて作り出した富の一部分を政府に納めることも負擔の一の方法である。此の二つは現在其處に在る所のもので戰費の負擔をする方法である。個人にしても、例へば旅行をする、其旅費は旅行を始める前に自分の持て居た貯金を以て支辨するか、或は其の月に受くる俸給の一部分を以て之に充てるかと云ふやうなものであつて、共に現在の富を以て支辨する方法である。其の外に、現に今其處に在る富でもなく、又現に作り出しつゝある富でもない、將來出來る所の富を目當として負擔すると云ふやり方がある。國民から見ると、以上二種の方法があるのである。

政府の方から言ふと、此の負擔の分け方に三つある。其の一は戰爭前にあつた稅よりも多くの稅を課し、其の增收を以つて戰費を支辨するのである。其の二は借金をするのである。即ち公債を募集する、或は一時借入金をして、それを借換へ借換して行く是れである。借金にも二つある。一は償還期限の長い公債であつて、他は短期の一時借入金である。短期の借入金は屢々行はれて居る、例へば露西亞が日本から軍需品を買つて、

其の代金が拂へないから露西亞の大藏省證券を日本に賣出した、是は詰り一時の借入金である。英吉利でも大藏省證券を賣出して居る、けれども戰時中は迚も返せないから、新規に又大藏省證券を賣出して其の金で返すと云ふやうなやり方を取る。其三は增稅でもなければ借金でもなく、物價騰貴を以て支辨する方法である。物價騰貴と云ふのは、一面から言つた言葉であつて、他面から言へば通貨の膨脹と云ふことである。

即ち政府の方から言へば此の三つの方法があるが、國全體として言へば現在の富、現在の稼ぎ高を以て支辨するか、若くは將來の稼ぎ高を以て支辨するかの二つだけしか途はないのである。所が此に就て間違つた解釋をして居る者が多い。政府の方から言つた所の、增稅を以て戰費を支辨する方法とは、國民から言ふと、現在の稼ぎ高なり、現在の富なりを以て支辨する方法と同じことである。それから將來を目當にして戰費を支辨すると云ふことは、公債なり一時借入金なりを以て政府が支辨するのと同じであると、斯う云ふ風に考へて居る人が少くない。それは違つて居る。さう云ふ風に解釋することは覺え易くて洵に結構である。又一應の說明ならそれで宜い、大體はそれに相違ない。借金は今此處に在るものではなく、將來に於て拂はなければならぬ、又增稅は今此處にある金でなければ、納稅することが出來ないから、大體に於てそれに相違ない。而も普通の場合に就て言へば其の通りであるが、此の度の戰爭に於てはさうでないことが澤山ある。殊に此の點に於ては英吉利と獨逸とでは其眞相が大變違つて居る。

現在の財源を以て戰費を支辨する第一の方法は、今此處に在る富を削つて戰爭に使ふ。現在此處に在る鐵を以て軍艦を造り大砲を拵へて戰場に運ぶ、或は今此處に在る所の材料を以て兵隊の服を作り、或は彈藥を作つて戰爭に使ふと云ふのである。所が現在の富と云ふものは、英吉利にしても獨逸にしても佛蘭西にしても、さう多いものではない。前に云ふ通り年々の稼ぎ高の三倍若くは四倍しかない。だから少し大袈裟に使へば此の財源は直ぐに盡きてしまふものである。けれども英吉利は國內に在る富の外に、國外に於て大變富を有つて居る。過去に於て輸出した所の資本が澤山ある。約四百億圓の富が

外國に放資してあると云ふ、日本などゝは大變に譯が違ふ。英吉利には國内の富の外に國外にも澤山の富があるから、それも使ふことが出來る。それで先づ第一に其の國外に在る富の回收の出來るものは回收して戰費の資源に充てる。それが即ち亞米利加の證券の賣出し、所謂證券の動員である。兵員を徴發して動員する如くに、證券を動員して戰爭の用に充てたのである。生産的に投下した所の資本を呼戻して之を戰爭の費用に充てた。併しながら是は英吉利に取つて甚だ危險な方法であることは前に説明した通りである。英吉利の英吉利たる所以は、外國に澤山の資本を投下して、其の力を以て世界を抑へて居つたことにある。然るに戰爭の爲めとは言へ、之を回收して使つてしまふことになると、今度は新に貸付けやうとしても、思ふやうに貸付けられない。現に亞米利加の如きは將來は英國から借りるまいから、他に適當な借手を求めなければならぬ。又其の貸付ける富も新規に作らなければならぬ。恰も蛸が自分の足を食つて生きて居るやうなものである。國外に少しも富の無い國より、國外に富があるから、之に手を付けやうと思へば付けられる、それが爲め大變優る所があると共に、劣る所もある。其の劣る所以は、英吉利が商品輸出國から資本輸出國に變つた點に在る。資本輸出國になつたのは結構であるが、結構過ぎて魔が差し始めたと云ふのと同樣に、戰爭に當つて非常に入費が掛る、此の入費はどうしても國民が負擔しなければならぬ、幸ひ英吉利は平素富を作つて外國に貸してあるから、直ぐに自分の身を抓らないでも、外國に貸してある金で戰爭が出來ると云ふのであるから、一面から言へば寔に結構なことであるが、他面から言ふと、さう云ふ當てがあるから自然國民の努力が足らない。非常な消費をして居るのだから、餘程一生懸命になつて消費を補塡する爲に努力を要する時であるにも拘はらず、どうも眞面目にならない。是は英吉利人の愛國心が獨逸人に對して劣る譯でもなければ、非常の時に非常の覺悟が英吉利人に缺けて居ると云ふ譯でもない。英吉利人は獨逸人程臥薪嘗膽をしなくとも濟む。成程外國に貸してあるのを回收すれば、將來に亘つて利息が取れなくなると云ふ不利益はあるが、脊に腹は代へられぬ。外國に貸してある金を取

りさへすれば、差向きの苦痛はない。戰爭に行つて居る人の代りまで働いて、國民の生産能率を高め、其の餘計に稼ぎ出した富を政府に納めて、戰費に充てゝ貰ふと云ふ必要が少い。殊に獨逸に比べて非常に少い。であるから獨逸程眞劍にならない。如何に最眉目に見ても一生懸命になり方が少い。戰爭中でも無駄をして居る。幾ら國民勤儉野戰だとか、アスキスのお嬢さんの婚禮の祝に、三鞭を拔いたのが贅澤だなどゝ言つて騷いでも、國民全體がまだ本當に眞面目になつて居ない。殊に上流社會は相變らず贅澤をやつてゐる。贅澤をするな、獨逸を見よ、佛蘭西を見よ、露西亞を見よなどゝ言つて叫んだ所で、身に差迫つた必要がないから、本當に緊縮した氣分になれない。

此の點から言ふと獨逸と英吉利とでは氣分が大變違つて居る。英吉利は段々と富が增して結構であつたが、餘り結構過ぎてダレ氣味になつて居つた。其の事は近頃となつて心ある英吉利人は氣が付いて心配して居つた、けれども多數の國民は何とも思つて居なかつた。然るにさて戰爭となつて見ると獨逸人は非常の覺悟をして居るに、英吉利人は餘り眞面目になつて居らない。是は英吉利の國民性が惡いとか何とか言ふ人があるけれども、それは當らない。英吉利人も獨逸人も、同じ狀態になれば同じ氣分が起るに違ひない。或は獨逸は智識が發達して居るとか、或は科學教育が盛んだとか言ふ、其も無論關係はある。乍去之を必要とする大原因がなければ、やはり本氣になつて働き出しはしないであるから國の進步と云ふことは、唯々富が增したから宜い、外國に澤山金が貸してあるからと云ふやうなことで極まるものではない。殊に英吉利の如きは、餘程大なる暗黑の半面のあると云ふことを證據立てたのである。

國民が餘計の富を以て戰費を負擔すると云ふことは、詰り戰爭用の爲めに餘計に富を殘すと云ふことである、餘計富を殘すのには、餘計に稼ぐと云ふことゝ、使ふことを少くすることゝある、消費と云ふことは、是までは大體人民の自由に委せて、政府が之に干涉をしなかつた、生産の方にばかり重きを置いて、消費の方は構はなかつたのが、今日ではさう行かなくなつた、富を餘計に剩さなければ、戰費を拂ふことが出來ない、

此の非常なる戰費に應ずるが爲には、三杯の飯は二杯に減らし、十遍食べる所は五遍に減らしても、國の富を餘計に剩して、戰費に充てるやうにしなければならぬ、英吉利は國外に貸金を有つて居つたから、自分の身を非常に詰めなくとも宜かつたが、併しそれは永久にあるものでない、一度回收すればそれ切りであるから結局は生産を增加し、消費を節減して之に應ずるより外はない。

獨逸に於ても外國に貸付けてある金がある。それは英吉利程多くはないが、英佛に次いで獨逸は外國に金を貸付けて置いた。であるから獨逸も之を回收して使ふことが出來れば、無論回收して使つたに相違ない。所がそれは敵國通商禁止で聯合國に取つちめられて居るから絶對に出來ないから、獨逸では外國に貸付けてある富は勘定に入れなかつた。今でも入れて居らない。外國に貸してある所の資本は、今日と雖も少しも手が付いて居らぬ。是は戰爭の結果沒收されることになれば仕方がないが沒收されない限りは依然としてある。所が英吉利の亞米利加にある債權は、大いに回收してしまつたから、四百億圓の貸金に大分手が付いた譯である（約百六十億圓と云ふ）。獨逸の對外債權は少いが少しも手が付いて居らぬ。兎に角獨逸は今や四面に敵を受け弱い墺太利だの勃牙利を引連れて戰爭をして居るのであるから、潰されてしまへば夫れまでゝあるが、潰されない限りは、外國に在る債權は戰後獨逸が使はうと思へば使ふことも出來る。又戰爭中取れなかつた所の利子も、戰後には一時に入つて來るのである。恰度吾々が人に金を貸してあるが、どうしても返して呉れない、今自分は金が要るから出來るなら返して貰ひたいが、返して貰ふ見込がないので據どころなく苦しい思ひをして遣り繰りして居るやうなものである。獨逸だとて、決して自ら好んで外國にある富を使ふまいとして居る譯ではない。否、使へるならば使ひたい。けれども使へないと云ふものは、主として英吉利がさうして呉れたのである。英吉利が獨逸を苦しめる爲にモラトリウムをやつた。最初のモラトリウムは、英吉利の金を擁護する爲にやつたのであるが、其の必要は直ぐに濟んでしまつた。後のモラトリウムは敵國に對する一切の支拂を停止し、敵國人との通商

を禁止し、獨逸の品物は決して賣買してはならぬと云ふことにした。さうして段々其の範圍を擴張して、日本までも其の仲間入をして、敵國との通商を禁止することにした。一方には英吉利の絶大なる海軍を以て獨逸の海岸を封鎖し、蟻も通さないと云ふ位にまで嚴重に見張つて居るので、獨逸は外國の債權を回收しやうと思つても、どうしようとしても何事も出來ない。倫敦の市場は無論獨逸の請求には應じない、紐育も同樣、巴里も、ペトログラードも皆塞がつてしまつた。それは獨逸政府のものばかりでなく、獨逸人民に對しても同樣であるから、銀行の預金も渡さなければ、利益の配當も渡さない。又獨逸が有つて居る外國の證券を賣らうと思つても賣れない。例へば英吉利の會社の株券、社債券でも、其の所有者が獨逸人であると云ふ時には、何處へ行つても買つて呉れない。故に回收したくも回收することが出來ない。世界中何處の國も皆さう云ふ風であるから、獨逸は外國に在る所の富を戰爭に使ふことは全然出來ないのである。

そこで獨逸は國內の富に手を付けた。尤も此點は英吉利も佛蘭西も露西亞も共通である。併し國內の富の大部分と云ふものは、其の儘では戰爭に使へない。國內の富の一番多いのは土地及び土地に卸した資本である、土地を彈藥にすることは出來ない、土地を軍艦にする譯にも行かない。斯く土地を直ぐ戰爭に使ふことは出來ないが、土地に對する權利を處分すれば戰爭に使ふことが出來る。其の權利の處分は國內だけで處分したのでは使へないから外國人に賣らなければならぬ。所が例へば英吉利の土地を亞米利加人に賣り其の代りに食糧や、軍器や彈藥や、色々の軍需品を貰つて、之を戰爭で使つてしまつたとすると、亞米利加から貰つた物は皆無くなつて、國內の土地は亞米利加人のものになつてしまふと云ふことになるから、是は甚だ危險である。外國に在る財產を處分することさへ宜しくない、況や國內の財產を外國人の手に移して、其の代金を彈藥にして打つてしまふと云ふことは大變な損である。損であるが、是は英吉利には少しある。佛蘭西にもある。併しながら獨逸には其も出來ない。何となれば國を嚴重に封鎖されて、有價證券さへ賣れないのだから、土地の如きものは賣買が出來ない。であるから獨逸の

富は少しも外國人の手に渡つて居ない、皆獨逸人のものである。唯獨逸人の間を轉々して居るだけである。同じ獨逸人の間を、AからBに行き、BからCに移つて行くだけである。即ち現在の富を使ふと云ふことは、其處にあるものを使ふのではなくして、戰爭に就て現に使ふ物を、國内で新規に拵へるか、或は外國にある物を買ふか、其より外に方法はない。買ふと言つても、唯だ金高が當るだけで、其處に在る物を使ふのではない。英吉利國内の鐵なり羊毛なりを、直ぐに軍用に使ふこともあらうが、併しそれだけでは戰爭は出來ない。新しくさう云ふ材料を作らなければならぬ。新しく作るのは、今現に在る富ではなく、是から新に作り出す富である。であるから現在の富は、外國から其品物を取るより外はない。外國から取る時には、代を拂はなければならぬ、或は借金をしなければならぬ。英吉利の戰費總額五十八億磅に當る品物は、何處から來るかと云ふと、國内からも出、國外からも來て、戰場で消費されてしまふのである。現在國内に在る土地なり建物なり機械なりを外國人に賣つて、其の代りに品物を外國から取るか、或は代價を拂つて外國から品物を取るか、兎に角外國から品物を取寄せなければ之を戰爭に使ふことは出來ない。それから現在の國内の財産を處分せず、代を拂はずに外國から品物を取ると云ふのには、借金をしなければならぬ。今は拂ふことが出來ないから他日拂ふと云ふ約束をして品物を輸入する、それが現在のものでなくして、將來のものである。將來お返し申しますと言つて、借りて置いて、それを彈丸にして打ち、軍艦にして沈めてしまつたとすれば、それだけのものは必ず他日返さなければならぬ。

所が獨逸は、今回の戰爭に於てさう云ふことも出來ない。自國の富を外國人に賣ることも出來なければ、自國から代を拂つて外國の物を買ふことも出來ない。所謂敵國通商禁止で、何にも外國から獨逸へ輸入することが出來ぬ。尤も和蘭を通つたり、或は伊太利の參戰前には伊太利を經、若くは瑞西などを通つて多少漏れて這入つたが、其は少部分で、大體に於て何も入らない。何も入らない爲に苦しい、けれども、其の代り國の富も、外國へ出て行かない。獨逸も開戰の當初に於ては非常手段を以て金を回收し、又之

を擁護することに努めたけれども、今日となつて見ると、獨逸の金貨を保護して居るのは英吉利の海軍である。獨逸は何もして居ないが、英吉利の海軍がすつかり網を張つて何も入らないやうに、又出さないやうにして居るから、金貨の流出することもない。

さう云ふ風に獨逸は一切の物が外國から入つて來ない爲に、あれだけの大戰を、苦しいながらも自辨して居る。所が英吉利は骨を折つて色々なことをして金貨の流出を抑へて居るけれども、どうしても出て行く。獨逸の潛航艇が暴れ出してからは、外國からの輸入が大分困難になつたけれども、それでも尙盛んに外國から色々の物を輸入して戰爭に使つたり、又は國民が其を食つたり飲んだりして居る。であるから金貨が流出する。亞米利加へ行く、日本に來ると云ふ風である。

其から將來の財源、即ち借金をして外國から品物を買つて戰爭に使ふと云ふ方法も、獨逸の方には全く出來ない。タツタ一遍亞米利加で借りたが、其れ以外には外國で借りた事がない。國內では六回の公債を募つたが、それは皆獨逸國民が應じたのであつて外國人の應じたものはない。從つて其利息も國內に拂ふだけで、國外には出て行かない。元金の償還にしても、政府が國內の人民から取立てた金を公債所有者に返すのであるから、國內を右から左にと轉々して居るだけである。之に反して英吉利は國內でも公債を募つたが、外國からも少しは借りて居る。一面には聯合國に貸出してもある、戰爭が長く續けば續く程、外國に對する借金が殖えて、貸した方は減つて來る。さうなると英吉利は何もしないで利息だけでも二十億圓の品物が入つて來た爲に輸入超過であつたが、今度は其の狀態が變つて、借金が殖へたから、輸入超過をして居た日には國が立たなくなるかも知れない。即ち國民が生產をして稼いで、輸出を多くせなければならぬ。今まで利息を當にして居つた國が、稼がなければならぬと云ふ、前とは全然變つた立場に立つことになる。即ち英吉利の國是を變へなければならぬやうになる。富が又以前のやうになれば宜いが、其まで暫くの間、英吉利も若返らなければならぬ、大に若返つて、此戰爭中から努力しなければならぬのであるが、英吉利人はまだ努力が足らない。戰爭

の入費を支辨するのでさへ、將來の富を當てにして、現在の稼ぎ高を以て戰費を支辨することが、甚だ少いと言つて識者は憂へて居る。戰爭と云ふ重大事件を目前に控へながら、尙且つ努力の十分でないと云ふことは、英吉利の將來に對して洵に憂慮すべき次第である。

獨逸は外國に對して借金が殖へて居る譯ではない、貸金も殖えないが、借金も殖えない。其の點は戰前と少しも變りがない。併し戰費は英吉利に劣らない程使つて居る。但し其の支辨は皆國內限りでやつて居る。或は國內に於ける稼ぎ高の大部分を政府が取上げて政府が使つて居るのである。だから今は苦しいが、戰後に於て外國へ取られるやうなものが無いから大いに樂である。今の戰爭中、政府が取つて使つて居るものは、戰後は要らなくなる。尤も償金でも非常に澤山取られることになれば格別、左もない限りは全く要らなくなるから、これを生產に使ふことが出來る。さうなると生產が大に發達して、戰爭前であつてさへ獨逸人は英吉利人に比べて勤勉力行の人間であつた、金の利息も可なり入つたが、それだけでは安心して居なかつた。大に國內の產業を興し、勤勉努力して居つた、そこへ戰爭となつて外國から何も入つて來なくなつたから、食ふ物も食はず、飲む物も飲まないで、皆戰爭の方に使はれて居る、是が一朝變つて、安逸の習慣が付けば兎に角、さうならなければ戰爭に使はれた力は生產に使はれ、產業を發達せしむることになる。又戰時の覺悟が生產上の覺悟となつて、戰後も引續いて努力したならば、非常な力となるに違ひない。是れが英吉利と獨逸との著るしい相違の點である。

さて政府から見た戰費支辨の方法は、增稅をするか、借金をするか、物價を騰貴させるか、此の三種であるが、增稅をすると云ふことは、大體に於て現在の財源に據ることである。即ち自己の富を稅として政府に納める、或は其時の稼ぎ高を納めると云ふのであるから、其れは現在の財源であるけれども、增稅は現在の財源のみであると思ふと又間違が起る。と云ふのは稅が非常に重くなつて、現に所有する所の富、若くは現在の稼ぎ高では納め切れない時には、仕方がないから借金しても納稅の義務を果すと云ふこと

になる。是は愛國心からでもあり、或は法律の制裁を受けるからでもあるが、兎に角借金をして稅を納めるやうになる。是は政府から言へば增稅の形であるが、國全體としてはやはり將來の財源を當てにすると云ふことになるのである。

所が此の點に於ても獨逸と英吉利とでは餘程違つた所がある。獨逸の方は同じ借金であるけれども、國民相互の間の貸借である。だから是は獨逸全體として見る時には借金が殖えたのではない、現在の富が使はれて居るだけである。例へば百圓の稅を納めなければならぬに、自分の稼ぎ高は五十圓しかないから、後の五十圓は納められない。仕方がないから人から五十圓借りて納めたとすると、其人は五十圓の貸主、私は五十圓の借主になつて居るが、政府には稅として百圓納めたことになる。所が其の五十圓を、若し稅として納めなければ或は食べてしまふかも知れぬ、或は何かに使つてしまふかも知れぬ。又借りた所の五十圓は、若し私が借りに行かなければ、銀行に預けてあるかも知れぬ。さうすれば銀行では其の金を寐かしては置かないで、何かに利用するから、それが

國家の設備になつたり、或は商業の資本になつたりして働いて居る。所が私が借りに行つた爲に、貸主は銀行から五十圓引出した。其が爲め今まで生產的に使はれて居つたものが、銀行から其人を通じ、私の手を通じて租稅として政府に納めることになつたのであるが、それは國から見れば現在のもので將來の財源ではない。生產に使はれて居つたものが、不生產の戰費として使はれるだけであるから、將來を當てにしたものではない。獨逸國內にあつたものが、形を變へて使はれたに過ぎない。

所が英吉利のやうに、外國から借金が出來ると、其狀態が變つて來る。例へば前と同じ樣に私が五十圓の金を人から借りたとしても、其人が其五十圓を銀行から引出す、銀行では其の金を國內の事業から回收するのでなく外國の債權を回收するかも知れぬ。或は外國の借金を殖やすことになるかも知れぬ。外國の金を借りて來て使ふと云ふことになると、其は將來を當てにした財源である。さうすると同じく私が百圓の稅を納めたにしても、五十圓は二つの違つた借金である。獨逸の方のは國內の金を甲から乙に貸

借するだけであるから、是は現在の財源である。英吉利の方で言へば、外國から借りた金であれば、何時か之を返さなければならぬ。だから增稅を以て戰費を支辨すると云ふことは、將來を少しも當てにしないものであると言ふことは出來ぬ。獨逸の如きは現在の財源ばかりで、將來のものはないが、他の國に於ては大體は現在の財源であるが、將來のものが少しも無いとは言はれない。

そこで戰爭に使つたものは、後に殘るものも幾らかあるが、大部分は無くなつてしまふ。後へ殘つたものも、之を生產に使ふやうに變へやうとすると大分損が行く。戰費と云ふものは、全部無くなるものではないけれども、大部分は無くなる。之に就て借金が殖えると殖えないとで、何う違ふかと云ふと、戰爭中には變らぬ。戰爭中は獨逸も英吉利も變りはないが、戰後に於ては其の關係が大變違つて來る。

獨逸は開戰以來、此健全なる增稅に依て戰費を支辨すると云ふことは少しもしてない。爭の爲に稅は少しも增して居らぬ。皆借金で戰爭して居る、獨逸の戰爭は借金戰爭である。六回の軍事公債の上り高を以て、此の戰爭をやつて居る。是は無論宜いことではなく、不健全なるやり方である。併し借金に依ると云ふのは、悉く將來の財源を當てにするとのみ解釋してはならぬ。增稅を以て戰爭をすることが、必ずしも現在の財源を以て戰爭をすると云ふことにならないと同樣に、借金を以て戰爭をすることも、大體に於ては無論將來の財源を當てにして居るのではあるが、悉くさうであるとは云へない。獨逸が借金ばかりで戰爭をして居ると云ふことは、將來の財源のみを當てにして、現在の財源には少しも依らないと云ふのではない。此の區別は極めて大切なことである、予は我國民に向つて切に此の點を力說したいと思ふものである。

今回の戰爭に於て、獨逸が募集した六回の軍事公債は、今まで日本で募集した所の公債或は英吉利などで今まで募集した公債とは全く流儀が違つて居つて、獨逸新發明の公債募集の方法によつたものである。最初英吉利の學者は大に之を罵り、最近まで罵つて居つたが、近頃になつては獨逸の眞似をして、獨逸の通りのことをやつて居る。是は段

々公債募集が困難になつたから、脊に腹は替へられない。ツイ此の間まで獨逸は潰れる、あんなことをやつて居るから、財政上自滅するの外はないと言つて、非常に非難して居つた方法で、如何にも變挺なやり方であるが其を眞似し出した。其方法は公債募集の方法として、財政學上から言へば迚も話になるやり方ではないが、何しろ外國との交通を全く斷たれて、あれだけの大戰爭をやつて居るのであるから、財政學にばかり拘泥して居られぬ。財政學が重いか、國が重いかと言へば、それは殆ど比較にならぬ。今までの有らゆる財政學の原理を蹴飛ばしたやり方をしても、國家の急に應じなければならぬ。如何なる方法を考へ出したかと云ふと、前後六回に亘つて非常に巨額の公債を募つたのであるから、そんなに金のある氣支はない。金は拵へれば幾らでもあるが、それは金貨ではない。金は山から掘出さなければ無いから金貨ではない、紙幣である。紙幣はゴロ〳〵刷つて出せば幾らでも出來る。そこで紙幣をどし〳〵刷つて出したから金はある。金はあるが、金があるだけでは戰爭は出來ない。能く言ふとだが、戰爭するには一も金、二も金、三も金、金程入要のものはないと言ふ。けれども實は金が要るのではない。戰爭に要るのは軍艦である、大砲である、彈藥である、又其他の軍需品は金があれば得られるから、それで金が要ると云ふのである。金があつても買ふことが出來なければ、少しも金の値打と云ふものはない。富士山に登山して雨風に閉ぢ込られた場合に、如何に澤山の金を持て居つても、何の役にも立たない。食べるものゝ役にも立たなければ、着る物の役にも立たない、却つて邪魔になる位のものである。獨逸は恰度富士山頂に押込められたやうなもので、金はあつても外國から買ふことが出來ぬのであるから、當り前ならば迚もあれだけの戰爭は出來ない筈である、疾に降參しなければならぬ。所が不思議にも獨逸は聯合國に對抗しつゝ富を拵へて居る。そんなに富が出來さうもないが、拵へるより外には仕方がないから、どし〳〵拵へて戰爭の入費の支辨をして居る。即ち獨逸の公債は、將來の財源も當てにして居るが現在の財源でもやつて居る。であるから、借金を以て戰費を支辨するのは、將來の財源を當にして居るものであると云ふ普

通の財政學の書物に書いてある事は、今度の戰爭には少しも當嵌まらぬことになつた。

獨逸政府が第一回第二回の軍事公債を募集した時には、國民は其の資力を擧げて之に應じた。所が第三回目邊りになると、應募する力が無くなつて、殆ど不成立に終るべき狀態であつた。應募したくも國民には金がない。それにも拘はらず不成立どころではなく、五回目も六回目も相當の應募があつた。どうして資力の無い國民をして公債に應ぜしめたかと云ふと、それは借金をさせて公債に應ぜしめたのである。政府が借金をするに就て、國民には資力が無いから借金をさせた。然らば其の貸人は誰れか、借人があれば貸人が無ければならぬ。外國からは借りられない。其貸人は誰れかと云ふと、政府である。詰り貸人が借人になつて、借人が又貸人になる。同じ人々の間で貸す方になつたり、借りる方になつたりして居るのである。それなら何も貸したり借りたり、餘計な手數をせずとも宜いやうであるが、さうは行かない、貸したり借りたりするからこそあれだけの戰爭が出來るのである。是は誰れが考へたのか知れぬが實に妙案である。人民を

して借金をせしめると云ふのは、今其處には無いけれども、戰爭をしつゝある間に、一方は盛に富を增させる方法である。人民をして消費を極く少くして生產を多くし富を多く殘させる方法として、訓令を出したり、說諭をしたりする位のことでは駄目だから、一方に利益を與へて借金をさせ、樂しんで首を縊らせて居るやうなものである。お前の所の豚を寄越せ、雞を出せ、小麥を出せと言つて無理に奪つて行くと、國民は酷いことをする、無慈悲な政府だと言つて怨む。そこで同じく取つて行くのではあるけれども、只でお前の物を取つて行くのぢやない、それだけお前の財產が殖えるのだからと言つて出させるから、喜んで出す譯でもなからうが、兎に角厭な顏をしないで出す。出すと言つても、現在其處に在る譯ではないから、一生懸命に拵へて出すと云ふことにする。其の日から急に心掛をして、向ふ鉢卷で小麥を作り、豚を飼ひ、自分の食べるものは極度まで節して政府に運んでやる。政府の方でも一時に要る譯ではないから、必要だけの分量が、水の流れのやうに每日斷えず入つて來れば、其で戰爭が出來るのである。

それは何う云ふ方法でやつたかと云ふと、軍事公債を募集する時に、政府は銀行の動員、郵便局の動員――をして、それでもまだ足らないので小學校の教員まで動員して公債を募集した。それはどう云ふやうにしたかと云ふと、一々の人に就て、お前は愛國心があるなら第三回軍事公債に應募しろと言ふ。人民の方では、愛國心はあるから應募したい、けれども第一回第二回の公債に應じてしまつて何も無い。公債の利子も取つてなければ、貯金も無いから應募することが出來ないと言ふ。それでも何か財産があるだらう、一番宜いのは外國の證券だ、亞米利加の會社の株券でもあればそれを出せ、お前は地所を有つて居るだらう、家屋を持て居るだらうと言つて、有らゆる財産を提供させ、それも無いと言ふと、尙追求する。一切の金目のものを出させて、それも無くなつたと云ふことになると、今度はそれなら第一回第二回の軍事公債を有つて居るだらう、それがあれば、其の軍事公債を抵當にして金を借りて、其の金で第三回の軍事公債に應募しろと言ふ。此の規則も戰爭が始まると直ぐに出したので、戰時貸付金庫條例と云ふものである。本部を伯林に、支部、派出所、出張所を各地に置いて、軍事公債を抵當に金を貸付ける。そこで例へば前に發行した軍事公債の額面千麻克のものを持つて行くと、八百麻克貸して呉れる。其も金で渡すのではなく、戰時貸付金庫證券（Kriegsdarlehenskassenschein）と云ふもので渡す。そこで其の證券を持て公債の募集を取扱つて居る銀行に持て申込む、態々持て行かないでも宜い、第一回なり第二回の軍事公債を戰時貸付金庫の支部なり出張所なりへ持て行つて、第三回の軍事公債に應ずると言ひさへすれば、其の場で其の手續までもして呉れる。だから何にもなくても第三回、第四回の公債に應ずることが出來る。

さて千麻克の第一回軍事公債を以て八百麻克の戰時金庫證券を借り、第三回の軍事公債八百麻克に應募したとすると、結局千八百麻克の債權を得て、八百麻克の債務を負つたと云ふことになるのであるから、自分の財産としては差引元の千馬克だけで、少しも增減はない。又政府の方から見ても同樣で、第三回軍事公債が成立したと言つても、新

規に金が入つた譯ではない、唯形が變つたゞけである。どうせどんな工夫をしたつて第三回軍事公債の成立しやう譯はない。其は戰時貸付金庫證券で拂込だからではない。獨逸帝國銀行の兌換券を持て來ても、或は金貨を以て拂込でも同じ事である。と云のは金貨を戰爭に使ふのではなく品物が要のである。必要な品物が無ければ駄目だ、物さへあれば何で拂つても、借金で借金を拂つても、其物が戰爭に使はれることは同じである。

それなら此の第三回軍事公債と云ふものは、どう云ふ意味があるかと云ふと、第一回軍事公債も、第二回、第三回軍事公債も、其の償還期限は戰爭のズッと後のことで、容易に返されるものでない。利息だけは拂つて呉れる。所で一方の八百麻克の戰時貸付金庫證券に對する利子を拂はなければならぬ。其の方の利子は公債の利子より幾らか安くなつて居る。例へば公債が四分とすると、貸付金庫證券の利子は三分六厘とする、幾分か利益がある。即ちそれだけの手數を掛けることに依て、愛國心を充すのみならず、四厘の利得がある。所が同じ取られるのであるが、無理に取上げられるのでなく、喜びつゝ取られると云ふのは此處のことである。公債の償還期限は何十年かの後であるのに、戰時金庫證券の方は直ぐに返さなければならぬ。返濟期限が短くなつて居る。而もそれは濟し崩しになつて居る。恰度日本の日濟貸の眞似をしたやうなものである。それも態々給料を拂つた人を使つては大變だから、皆公務の傍ら、否寧ろ公務よりも其の方に多くの時間を費して居る。自分の飲み物、食べ物を減らしてまでも其金を納める。返す方も取立てる方も一生懸命である。此の返すと云ふに就ては今自分に物がある譯ではないから、稼ぎ出すより外はない。返す必要がなければ、在るだけのものを飲んだり食つたり、樂をしてしまふ。所が是非それを返さなければならぬと云ふので、無理にも稼ぎ、又節し得られるだけは節して、餘りを多くする。それが積り積つて、戰爭が出來るのである。第四回の分も第五回の分も、第六回の分も、皆それを繰返したゞけである。唯だ第四回の時には第三回の八百麻克が六百麻克になり、第五回の時には第四回のが四百麻克になると云ふやうに、次第に遞減して行くのであるが、返してしまふまでは、其の人

の責任は増す一方である。八百麻克だけの時には、日に三麻克づゝ返して行けば宜かつたのが、其の次には八麻克になり、十麻克になり、十二麻克になるのであるから、中々尋常では返されない。國民は何れも非常に苦しい思ひをして居るのである。

斯うして前後六回の公債を募つて戰費に充てたが、それは現に其處に在る富を借りたのではなく、詰り國民の將來の稼ぎを借りたのである。國民が戰時貸付金庫證券を借りた其の瞬間に、是からどんな苦勞をしても、一層働いて返さなければならぬと云ふ心を起させるのが公債の應募の目的であつて、其の結果が富を生じ、其生じた富によつて戰爭を續けることが出來たのである。是は外國から買ふことも出來ず、借りることも出來ない獨逸であるから出來たので、他の國では出來ない。英吉利などでは眞似をしても、巧く其の眞似が出來ない。英人は前には獨逸の此のやり方を非常に嗤つて居つたが、近頃では獨逸のやり方を賞讃するものが殖へて來た。又實際に於ても、普通の公債の募集の方法では思ふやうに行かないので、銀行を利用して、此の公債の募りに應じろ、此の公債に應募するに都合が惡ければ銀行は便利に金を貸してやる。それは前の公債を持て來い、前の公債を以て來れば八掛で貸してやる、七掛で貸してやるから、其の金を以て今度の公債の募りに應じろと言つて頻りに公債を募集して居る。所がそれでもまだ足らないと云ふので、今度は戰時貯蓄證券と云ふものを發行した。是は全く獨逸の眞似をしたものだが、獨逸の戰時貸付金庫證券のやうには巧く行かない。又銀行で融通すると云ふ位のことでは、國民から十分絞れない。公債を抵當にして金を借りる或は戰時貯蓄證券を買ふと云ふことの裏には、國民が食ふ物も節し、飲む物も節して、成べく多く富を殘して戰爭に使はうと云ふ意味があるのである。而してそれは現今の獨逸のやうに苦められて居るから出來るのであるが、英吉利人は、まだそれ程緊張した氣分になつて居ないから、迚も獨逸のやうに巧く行く筈はない、成功しなからうと思ふ。成功するには、英吉利の國情が一變した後でなければならぬ。然るに此の戰爭の爲に少しも困つて居らぬどころでなく、成金がウヨ〳〵出來、正貨が殖えて聊か持餘して居ると云ふ日本が、

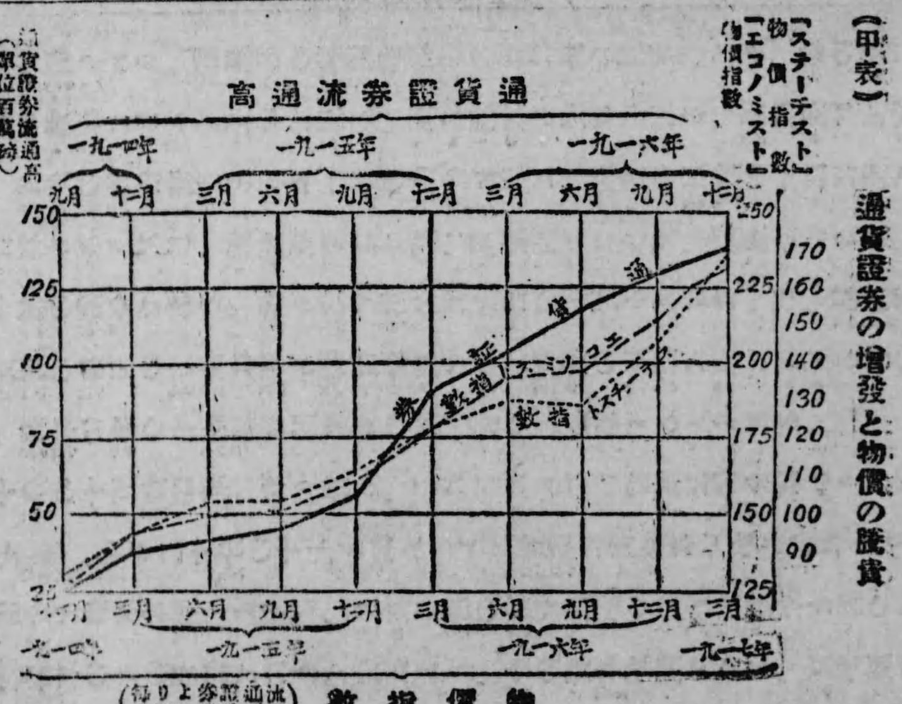
又其の眞似をして、戰時貯蓄證券法と云ふものを、この間の臨時議會に出した。直ぐに引込めたが、兎に角出した。是は英吉利の直譯である。如何に飜譯政治が好いと言つても、非常特別の覺悟の時に行ふべきことを、それも直接に獨逸の方の飜譯なら、飜譯として少しは恕する所があるが、英吉利に一旦飜譯したものを重譯して行はうと云ふやうなことは以ての外である。急に國民に金が儲かつたから、これを無駄に使はずに、成べく生產の方に使はせやうと云ふならば、獨逸の眞似ではいけない。若し獨逸が日本ならば、決して其樣な眞似はしないであらう。

兎に角英吉利で眞似をしたと云ふのは、少くとも獨逸の成功を證明したものである。獨逸の成功と云ふのは、詰り形は將來の財源に依ると云ふ公債の形ではあるが、其の實はさうでない。國民をして儲けたものを貯蓄させると云ふどころでなく、殆ど無から有を生ぜしめると云ふ位にしたから成功したものである。であるから獨逸は戰爭の爲に損害を受け、弱つて居るには相違ないけれども、此の大戰爭に際して戰費の全部を民の努力に依て支辨し、外國に對して借金を貽さず、又外國に在る貸金にも手を付けなかつたから、今後の戰爭に依て國が滅びてしまへば格別、現在の程度で平和になつたならば、戰後獨逸の活動は頗る眼覺ましいであらう。之に反して聯合軍の方、中にも露西亞の如きは現在の財源も將來の財源も使つて居る、殊に將來の財源を非常に多く使つて居る。

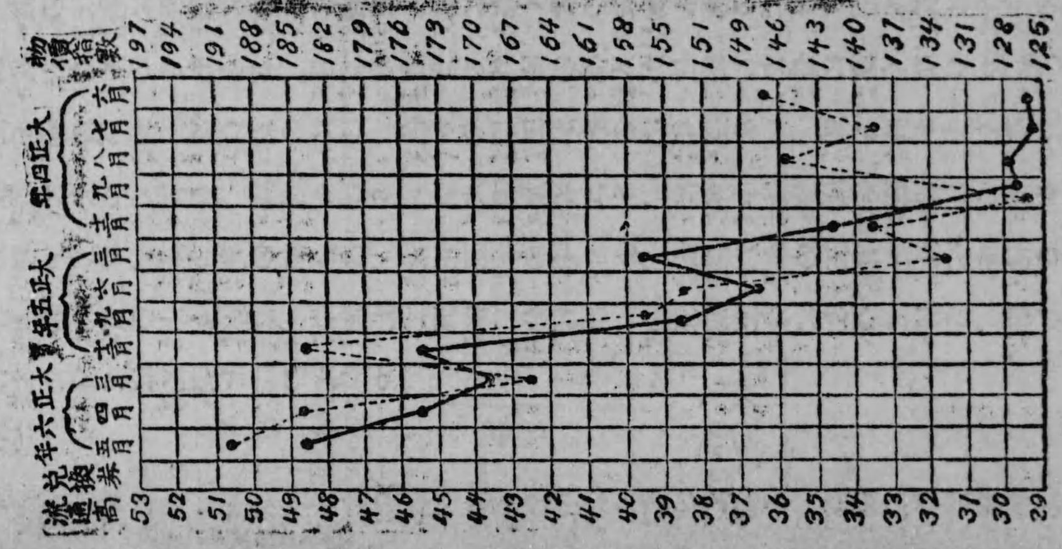
英吉利は獨逸のやうに戰爭の爲に全く增稅をしないのではない、可なり增稅をして居る。即ち所得稅の稅率を引上げ、茶の輸入稅を高くした。此の二つは、英吉利で收入の增加を圖る時には第一に利用する稅である、其他にもある。英吉利が戰爭を始めてから大正六年十月二十七日までに使つた戰費の總額は五十七億九千七百九十三萬磅であつて、其の內現在の稼ぎ高で支辨したもの、即ち國家の增稅で支辨したものが十三億八千五百萬磅で、殘り四十四億一千二百萬磅は全部將來の財源引當即ち借金になつて居る。であるから英吉利でも心ある人は、是は政府のやり方が間違つて居る、出來るだけ現在の稼ぎ高で支辨するやうにしろ、もつと稅率を高めろ、生活に必要なだけを殘して、そ

れ以上は全部取つても宜い。下層社會の所得の少い者からは取る餘裕がないから、主として所得の多い金持から取るが宜い。其の割合は一磅に付て一磅取つても構はないが、事實さう云ふことも出來ないから、一磅に付て十七志、即ち二十分の十七までは取れる。無論それは平時には出來ないが、國家非常の場合に於ては、餘剰のある者から多くの稅を取ると云ふことは必ずしなければならぬと云つて居る。なぜ平時に於て一磅に付て十七志取ることが惡いかと言へば、金の有る人は即ち資本を作る人である。營々として物を作り出すのは國民全體であるが、之を使つてしまはないで殘して置いて、生產の用に充てるか充てないかと云ふことを掌つて居るのは金持である。其の金持が折角殘して置いたものを、平時に於て殆ど全部國家に出させることにしたならば、此等の人の貯蓄心を妨げて、富の殖え方、資本の殖え方が減るから、それは宜しくない。けれども戰時は別である、それに戰爭が濟めば、直ぐにそんな稅率は廢すのである。戰爭中は消費本位で、どし〳〵使はなければならぬから、資本として殘して置いても仕方がない。即ち戰爭中は貯蓄心を害する程度の高い稅を取つても差支ない。どの道要るのであるから、將來のものを當てにして使ふより、今の資本が減つても、富が減つても仕方がない。借金を將來に貽すよりは、今在る所の富を使かつた方が宜いと言つて居る人がある。十七志、即ち二十分の十七と云ふことは實際に出來ないかも知れぬが、十五志、即ち二十分の十五位は確に取り得る。それを取らないで唯だ借金ばかりして居ると云ふことは、將來に向つて禍根を貽すものだと言つて痛論する人もある。

戰費支辨の第三の方法は即ち物價騰貴を以て戰費の財源に充てゝ居ると云ふことも、やはり一種の借金である。誰も之を借金だと言つて居る人はないが、結局借金である。是は英吉利もさうだし、露西亞もさうだ、佛蘭西もさうだ、獨逸もさうだ。歐羅巴の交戰國は、皆此の物價騰貴と云ふ一種の借金を以て、戰費の財源の一部に充てゝ居る。さうして其の飛沫を日本も受けて居る、亞米利加も受けて居る。是は受けて宜い所もあるが、又惡い所もある。歐羅巴の諸國が戰爭の爲に幾ら何をしても、其の爲に吾々日本人



（甲表）　通貨證券の增發と物價の騰貴



（乙表）

騰貴と云ふことは、善かれ惡かれ吾々の頭の上に影響を及ぼして來て居る。

の頭の上には、別に目に見えた直接の影響はない。所が第三の戰費支拂の方法たる物價

英吉利に就てニコルソン先生の調べた表を甲表に掲げて置く（英國統計協會雜誌より取る）

日本に就ては乙表を作つて見た。

日本の物價の上り方は、平均して五割二分何厘、約五割三分になつて居る。併し是はまだ輕い方で、英吉利の如きは、大正三年の七月と、大正六年の五月と比べて見ると、丁度倍になつて居る。獨逸もさう、亞米利加もさう、世界中物價は皆騰貴して居る。

此く物價が高くなつたのには、色々の原因があるに相違ない。即ち物が少くなつた爲に騰貴したものもあらう、日本の如きも外國の輸入が杜絶した爲に高くなつた物もあり、其の反對に外國に非常に賣行く爲に高くなつた物もある。けれども其は今回の物價騰貴の原因としては寧ろ小なる方で、最も大なる原因は通貨の膨脹と云ふことである。日本で言へば、日本銀行の兌換券の流通高が殖えたと云ふことである。是は英吉利、佛蘭西、露西亞、獨逸、亞米利加、何れも同樣である。獨逸では戰時賠償金證券と、獨逸帝國銀行兌換券とが大變に殖えて居る。是は兌換を停止して、金貨と引換ないから幾らでも出せる。英吉利は兌換制度を維持しては居るけれども、事實は兌換に非常な制限を加へて居る。さうして一方には兌換券でない所のものを拵へた。即ち流通證券（カーレンシー・ノーツ）を拵へて、通貨と同樣の働きをさせて居る。それが爲に通貨が大變に殖えて來た。

金貨本位の國の通貨としては、勿論金貨でなければならぬ。所が金貨は中央金庫に入れて出さないことにし、金貨の代用をする紙だけにした。所で金と云ふものは、殖やしたいだけ勝手に殖えるものではない。山から掘出すか何處からか買つて來なければならぬのだから、容易に殖えない。又要らないときには決して殖えない。餘計なものがあると海外に出て行く、或は潰されてしまふ。指環になつたり、色々な細工物になつたりする。金貨が餘り多くならないやうに自ら調節の働きをするものは第一が內國の取付、第二が外國の取付、第三が消費用取付、此の三つである。其で金が多過ぎもせず、少な

過ぎもせぬと云ふ働きをして居る。けれども紙は、幾らでも譯なく出來る、其の代り要らないからと言つても少くならない。金ならば要らなければ外國に出る、或は指環になつたり、色々な裝飾用にしてしまふが、紙幣では鼻紙にもならぬ、寧ろ半紙の方が役に立つ。紙幣となると、幾ら澤山になつても調節の方法がない、伸縮性に極めて乏しい。だから一度膨らんだら膨らんだ切りで縮むることが困難である。紙の通貨は出せば出す程膨らむ、それを承知して居て今度の戰爭では各國共に之を出して居る。其の中でも露西亞の如きは滅茶々々に出して居る、戰爭前の四十倍も出して居る。革命後のことは更らに分らない。而もそれに對して獨逸のやうな工夫もせず、何もしないで、唯だ手當り次第に濫發し、紙で戰爭をして居る。即ち各國とも紙で戰爭して居ると云つて宜しい。斯くの如く紙の通貨を濫發した爲に通貨の値打が下つてしまつた。

物が殖えれば値の下ると云ふことは當然である。通貨が或る物に對して下つたのでなく、何に對しても下つたのである。戰爭前は金の世の中で、通貨が一番偉いものであつた。ロムバード街を中央市場として各國が此處を取卷いて經濟を立つて居つたが、戰爭が始まるや否や、金と云ふ立派なものが姿を隱して、其の代りに紙が威張り出して來た。それが非常に殖えたから、迚も以前のやうに人が尊重して呉れない。何か買はうと思つても、以前程には賣つて呉れない。米を買ふ、絲を買ふと言つても、以前と同じ代價では物を賣つて呉れない。それが即ち一般の物價騰貴と云ふことである。

物價が騰貴すると、吾々が物を得るに高い代を拂はなければならぬ、其の高い代を拂ふと云ふことは、取も直さず戰爭の入費の一部分を吾々が脊負ふと云ふことである。稅として取られる、或は公債の募に應ずると云ふことは、吾々が承知して戰費を負擔するのであるが、物價騰貴は取るとも言はないし、又吾々は取られるとも氣が付かない、けれども矢張り自分の飲む物、自分の食ふ物を出して戰爭に使つて居ると云ふことになるのである。何となれば今迄で十圓で買へたものが十二圓に上つた、然るに自分の給料は元の儘であつたとすれば、物價の上つたゞけは自分の食べ物飲み物を減らさなければなら

ぬ。其の減つたものは、即ち政府が持て行つて戰爭に使つて居るか、或は成金連の暴富の一部分を形づくつて居るのである。英吉利國民が物價騰貴の爲め苦んで居る、獨逸國民が物價騰貴の爲に苦んで居ると云ふのは、戰費の一部を物價騰貴と云ふ形で取られて居るのである。稅の方は是とは違ふ。稅にも善い稅と惡い稅とあるが、兎に角民間から取立てたものは、徵稅の費用を除いた以外の全部は政府の手に入る。差引かれるものが極く少い。公債は、形次第ではあるが、差引かれるものが稅に比べると大分多い。物價騰貴は、吾々國民が自分の用を節して出した高と、政府が實際に戰爭に使ひ得る高とでは、其の間に非常の差がある、無益の失費が多い。であるから國民所得の取上げ方としては最も不適當にして害の多い方法である。所が新に稅を增し、或は公債を募ると云ふことになると、色々の故障が出る。或は少し下手にやると、國民が大騷ぎをして政府に迫つて行くが、通貨を膨脹せしめて物價を高くしたのでは、國民は何とも言はない。政府から言へば寔に容易い方法であるから、英吉利のやうな極めて愼重に事をする政府であつても、之を以て戰費の一の財源として居るのである。所で此の頃日本でも、米價の調節とか、物價の調節とか言つて、一部の人々は騷いで居るけれども、是が日本特有の理由であるならば、それは日本だけの手段で何うにもなるであらうが、世界的の原因である以上は、やはり世界的の理法で支配されるのである。

そこで戰後是が如何になるかと云ふと英吉利は今の三つの方法の中でも、大部分は借金を以て戰爭して居る。今の値の下つた金で借金して居るのである。所が戰後此の公債の償還をする時分には、貨幣の値が上る。戰前程にはなるまいが、兎に角物價が今より下つて、貨幣の價値は上るに相違ない。其の時に償還するのであるから、今の公債の募りに應じた者は、安い金で貸して、高い金で返して貰ふことになる。呼値は同じであるが一磅なら一磅に對する購買力は多くなつて居る。所が獨逸のやり方のやうに、全體の國民から無理に絞つて取つたのは、結局自分達が拂つて自分達が取る。利子の支拂も元金の償還も、政府の收入を以て政府が拂ふのであるから、それを受取る個人々々には

多少の相違があるとしても、國民全體の上から見ると同じになる。然るに英吉利の如く資產を多く有つて居る者が主として公債の募りに應じ、下層の者の應募して居る割合が非常に少いと云ふ場合には、國全體の上からは出入は同じであるが、人に依て大變違ふことになる。戰後下層民の働いた、公債を有つて居ない者の働いた高い金を取つて、利息を拂ひ元金を償還すると云ふことになるのであるから、貧乏人が骨折つて働いた金を以て金持に返すと云ふことになる。從つて貧富の懸隔を益々大ならしめることになる。況んや英吉利は是まで資本が潤澤で、外國に貸してあつた分も非常に多かつたが、戰費として國內の富も消費し、又外國に貸付けてあつたものは回收したりしたので、資本の在高は非常に減つて居る。資本は減れば減る程金利が高くなる。金利が高くなれば勞働者の勞銀が下る。勞銀が下つた時に於て勞働者は高い稅を取られ、而して其の稅は金持の所へ、或は利子となり、或は元金となつて支拂はれる。即ち貧乏人から取つた金が金持の所へ行くと云ふことになるのであるから、戰後に於ては、此は餘程の變調を持來すことになるは疑を容れないことである。

貧乏人から取つた金を、金持にやると云ふことになると、茲に社會主義の思想が勢力を得るやうになると云ふ懸念がある。此の點は英吉利が最も憂慮すべきであつて、佛蘭西も略々同樣であるが、英吉利程ではない。獨逸に至つても其の憂がある。

今日の有樣から考へても、戰後に於ては國民の所得の分配の割合が大變に變つて來るに違ひない。其の場合に如何に富が流通するか、流通の仕方も今までとは餘程變つて來る。良くなるか惡くなるか分らぬが、兎に角流通本位の經濟になると言つて宜い。其の時に之を巧く處理することが出來れば、戰爭で受けた創痍は意外に早く恢復する。十年も二十年も掛りはしない。けれども若し其の處理が惡いと、何年經つても恢復が出來ない。さうして其の恢復した資本は、必ず生產資本になるであらうが、それに就ても、其の移り變りの時に色々面倒の事件が起るに違ひない。戰爭の爲に變つた所のものが、各々其の途を得るまでは、經濟界がガタ付く。或は非常に景氣が好くなつて、事業が勃興

するやうにもなるであらうし、其の勃興も健全なる土臺の上に起つたものでなければ、又バタ〳〵と倒れる。恐らく普佛戰爭後の獨逸どころではなく、餘程大きな變動が來るに相違ない。若し歐羅巴が非常な亂調子になれば、日本にも自ら影響が來らざるを得ない。現に通貨の膨脹、物價騰貴の影響さへ及んで來て居る位であるから、戰後に於ける變動も、必ず日本に及んで來るに相違ない。此間に處して若し我國がボンヤリして居つたならば、殆ど輓回すべからざる苦境に陷るであらうし、處置宜しきを得れば將來益〻福利を增進するに至るであらう。此點は今から十分に考へて置かなければならぬ。此れが即ち戰後に於ける經濟生活改造の機運を語るものである。然らば其改造は如何なるものたる可きか、其は自ら別の機會を待つて論じたいと思ふ。

二　金の經濟と物の經濟

——大正六年五月『日本評論』掲載——

一　英國經濟政策の破綻

英國最近の經濟狀態を見るに、全く從來の政策施設を拋棄して、今や、事々物々、獨逸の執り來れる經濟政策を模倣するに至つたのである。例へば其の食料政策の如きも、獨逸と同樣の施設をなし、食料長官なるものを置き、食料の分配、代價等を調節制限するの方法を採るに至つた。從來、獨逸の政策施設を罵倒嘲笑して居た英吉利が、今や其の罵倒し嘲笑した所の政策施設を、其の儘模倣するの已むなきに至つたのは實に天下の奇觀ではないか。實に英吉利は開戰以來、總ての方面に於て、從來誇りやかに執り來つた其の政策を變更して、之れを獨逸化せしめねばならぬ必要に迫られたのである。此の英吉利の獨逸化の新しき一例として予は英吉利近時の軍事公債の募集方法が全然獨逸式

に依つて行はれて居ることを見逃し得ぬのである。即ち最近に至る迄、罵嘲して居た獨逸の公債政策を自ら模倣せざるを得ぬ場合となつたのである。此れ等の事實、即ち英吉利の獨逸化と云ふことは、實に英吉利の經濟政策の破綻を物語るものである。

斯くの如く自國の採れる政策制度が、最も進歩したるものであり、最も健全なるものであり、以て他國に範とせしむるに足ると自負して居た英吉利の政策制度は、今や大革新を施さねばならぬ時機となつたのである。現今に至る迄、英吉利の貨幣は、ポンド、シリング、ペンスと云ふが如き十進法に依らざる非文明的の方法を以てして居る。然るに此頃になつて英國の實業家、政治家、學者等は此の貨幣制度の弊害に晩くも氣付いて、之れをポンド、プロリン、ミル、即ちポンドの十分の一はプロリン、千分の一はミルとする十進法に變更せよと力說して居る者がある。或は又亞米利加のドルを採用せよと唱へ、而して其は度量衡にメートル式を採用する前提たらしむ可しと言つて居る。斯くの如く從來は國自慢であつた政策制度を今や改革しなければならなくなつた英吉利の最近の事情に因るも、時勢の變を知るべきではないか。然るに我國に於ける英吉利心醉者は、今猶ほ舊き英吉利の政策制度を以て、此の上もない最高最上のものと考へて居るのは、寔に迂遠千萬と謂はねばならぬ。殿樣の言動が絕對性を有つて居た舊幕時代に於て、殿樣の爲す事云ふ事は何事でも善良であると考へて、殿樣が跛を引けば、臣下の者共も跛を引いて歩くことを此上もない自慢と心得るやうなもので、其の愚や憐殺すべきである、英吉利が世界に横行濶歩して居た時代ならば、或は英吉利本位で遣つて行かねば不都合の場合もあつたが、今次の戰爭に因つて英吉利は少くとも其の世界的中心たる地位を減縮せられたのは疑ふべくもない。此の時機に方つて、猶も英吉利の眞似をして行かうとするは、愚昧の至りである。我國の英吉利化は實に甚だしい。我國從來の制度を以てした方が、餘程便利である場合にも、態々、煩瑣な英吉利式を採用して居る。例へば鐵道の如きも、メートル式か又は日本尺を採用した方が簡易であるにも拘らず、マイル、チエイン、リンクを用ひて居る。英吉利が此れ等の制度の煩瑣にして不便なる

を感じ、今や之れを改良せんと志して居るのは、英吉利が其れだけ賢明になつた證據で、英吉利の爲めに慶賀すべきことである。而して公債募集方法の改良の如きは、賢明になつたものゝ中に於て著しいものゝ一である。

二　英國の「貸付金庫」の利用

蓋し獨逸に於ては、開戰以來、五回の軍事公債の募集を行つた、想ふに今頃は第六回の募集に着手せんとして居る事であらう。而して第四回迄の公債應募の狀況を見るに、回を重ぬる毎に其の應募人員に於ても、其の應募金額に於ても、增加するの結果を示し、而して割合に少額の應募者が增加するの傾向を呈して居るのである。第五回目に至つて其の應募成績は稍々不良の徵候を示した。是れ疑ひもなく獨逸の疲弊困憊せる事を表明するものであるが、併し小口應募、即ち二百マーク以下の應募者は依然として多數を占めて居る。斯る好成績を齎す所以は、獨逸の巧妙なる政策に基くのであつて、即ち「ダルレーンヌ、カッセ」貸付金庫を利用するのである。英國は獨逸の此のやり方を嘲つて、右の手で奪つたものを左の手で與へるやうなものであると云つて居た。實際獨逸の此の政策は所謂伊勢詣りのひぢきのやうなやり方であることは吾輩の屢々公言した所である。されば英國の經濟學に養成せられた人々は、此の獨逸式のやり口を極めて排斥して居たのである。貸付金庫を利用すると云ふのは、例へば何億圓かの公債を募集して得た金を、次ぎの公債募集に利用するのである。即ち人民に資金を貸付て應募せしむるのである。第一回の時にAなる人間が五百マークの公債を引受けたとして、其のAと云ふ人間は第二回の募集の際には百マークだけしか募集に應ずるの力がない、之以上の餘裕がないとすれば、五百マークの第一回の公債を抵當にして、六掛けか七掛け位で金を貸してやる、五百マークの七掛けであるから三百五十マークを貸す。此の借りた金に百マークを加へて四百五十マークの應募をなし得ることになる。第三回目には四百五十マークの公債を抵當に取つて應募の資金に充てしめる。第四回も是れと同じ方法を採つて、人爲的に人民の應募力を作つて、應募せしめるのである。蓋し此のやり方は永久に持

續せらるべき可能性を有つて居ない。故に斯る公債の募集方法は大いに戒慎すべきであることは云ふ迄もない。されば英吉利では獨逸の此やり方を罵嘲して居たのであつたが、今や英國の銀行家、政治家、經濟家、乃至は新聞雜誌は、此獨逸式の方法を唱導するに至つた。ロンドン・エコノミストやステーチストの如きも力を極て之を推奬して居る。或る論者は獨逸式の此の方法に反對して、人民に金を貸して、其れに依つて公債に應募せしむるが如きは二重の手數が要る。それよりも銀行の預金を直接政府へ廻して、銀行と政府との間に貸借關係を成立せしめたならば可いではないかと云ふものがある。之れに對して今日の英吉利の金融經濟學者等は、銀行から直ちに政府に貸さないで、人民の手を潛ると云ふことに意義がある、新らしい富は其所に生ずるのであると言つて居る。思ふに人民に借金をさせることは、人民をして何彼につけて儉約せしめる事になるのである、公債の償還は概して長期であつて、其間は政府より人民へは金を還さぬ。所が銀行は人民へ貸付た金の返濟を迫る、無理をして貸付けられた金であるから、人民はあいそれと金を銀行へは返濟が出來ない、何うしても冗費を省き、身を儉素に守つて行き、以て借金を返濟する方法を講じなければならなくなつて來る。即ち結局、國民に強制的儉約を行はせる事となるのである。獨逸の公債の募集の方法は斯る手段を以て講ぜられて居る。これ實に國民節約野戰を間接に行ふものである。英吉利國民は贅澤な生活に馴れて居るので、戰爭に當つても、中々其の贅澤が止まぬ。自分の金で自分が贅澤をするのに何んの惡いことがあるものかと云ふやうな氣持で居る。之れには英吉利の爲政家は閉口する、そこで何うしても獨逸の眞似をして強制的に國民を質素に生活せしめるやうな方法を講じなければならぬと考へた結果、公債の募集方法を貸付金庫に因つて行ふことにしたのである。之れも英吉利の獨逸化の著るしい事實である。

三　『金の經濟』より『物の經濟』へ

英吉利は今次の戰爭の勃發するや、異口同音に獨逸の軍國主義は、世界の平和を攪亂するものである、人道の敵は實に獨逸である、されば獨逸の軍國主義を破壞して、平和

攪亂の種子を根絶せしめねばならぬと敦圍いたのであるが、獨逸を破るどころか實際は其の反對に、英吉利が獨逸の政策制度施設に征服されて了つた形である、即ち英吉利は日一日プロイセン化して軍國主義を濃厚にして行くばかりである。所謂ミイラ取りがミイラになつたのであつて、英吉利當初の云ひ分を思ひ浮べると滑稽の至りである。故に英吉利人の中には、縱令、戰爭には負けても構はないから、英吉利は何所迄も英吉利の特色を發揮して、プロイセン化せぬやうにせねばならぬと憤慨して居る者もある。そして英吉利人は、今回の戰爭は全く義戰である、人道の爲めの戰ひである、平和の爲めの戰ひである、白耳義が中立を犯され、悲慘な運命に陷つたゝめに戰つて居るのであると稱して居るが、これは殆んど荒唐無稽の空言であることは知者を俟つて後に知るを要せぬ。今や英吉利人の中にさへ、前言の空言であることを告白して居る者さへあるではないか、經濟學大家のエデウオールスなども公言して居るのである。之れで幾ら外國人を瞞着しやうと思つても駄目である。然るに我國の識者の中には、今尙、眞面目に英吉利の戰ひは正義の爲め、人道の爲め、平和の爲めなどゝ思つて居る、英吉利に化かされて居るにも程があると云はねばならぬ。斯くの如くにして英吉利の裏面上の戰爭の理由、卿ち平和人道の爲めと云ふ理由は立たなくなつて了つた、故に表面から云へば、英吉利は其の戰爭の意義を失つたのである。之れは英吉利として殘念千萬の事であらうが、我々から見れば結構な事である。其だけ英吉利は國家として賢明になつたものだと謂へるではないか。元來英吉利人は個人主義功利主義の國民であるから、公に奉ずると云ふ精神に乏しい、此の點に於て獨逸人は數等優つて居る、此の私を捨てると云ふ精神の旺盛なことは實に獨逸の强味であると云はねばならぬ。英吉利が後ればせに變則的に獨逸の眞似をするに至つたのは英吉利が覺醒し、改革の機に入つたものであつて、之れを喜びとそすれ、決して悔むには及ばない。

以上は英吉利のプロイセン化の一例に過ぎぬのであるが、總の政策制度に於て、英吉利は從來自慢にして居た自國の政策制度を拋棄するか、若しくは改革しなければならな

くなつたのである。之れを經濟上から見れば、英吉利本來の『金の經濟』が意義を失つて、『物の經濟』にならねばならぬと云ふことになつたと云ひ得るのである。即ち英吉利の『金の經濟』主義は國家の存立を全うして行く上に於て完全なるものでないと云ふことが暴露された、『金の經濟』主義は覆滅崩壞したのである。之れに代るに獨逸流の『物の經濟』主義を以てするの氣運に赴いて來たのである。

四　『金の經濟』の組織缺陷

『金の經濟』は、總てのものを金に替へて見る、金を中心として、總ての仕事仕組が行はれる。故に『金の經濟』に於ては、金に現はれた需要のある物は生産される、眞に需要があつても金の利益の少いものは生産されない。富者の贅澤品の如き物は利益が多いから盛んに生産されるが、貧者の生活の必須品は利益が少いから、比較的閑却されると云ふ傾向になる。此の事に就ては河上肇博士が其の近著『貧乏物語』に於て甚だ趣味深く説明して居られる。勿論、『金の經濟』には長所のあることは否まれぬが、然も其の弊害に堪へざる事が夥しいのである。予が近著『國民經濟講話』に於ても詳説して置いた通り、國民經濟なるものには主體がない、故に統一的に意思を定め、一定の秩序や計畫を立てゝやると云ふことがない。之れが爲めに河上博士の云つて居る通り、生産と云ふことが甘く調節され按配されない、金持の贅澤の爲めに、貧乏人に取つての必要品の生産力が減殺される樣な傾向を呈する。されば富者は或る程度以上は其の贅澤を止める丈けの自制心があつて欲しい。併しながら之れは望んで實行し得らるゝ事は先づ以て困難である。今日の經濟組織に於ける缺陷は、實に富者の滿足を充たして貧乏人の滿足を充たすに缺くるの憾みある事である。今日では生産はデスポーニーブル・キアピタルが左右して居る。富者が生産品の種類なり數量を決めて居るのである。英吉利流の『金の經濟』組織は此の弊害を甚だしく發揮して居る。

五　資本侵略戰の時代

今次の大戰の原因を世間では種々の方面に求めてゐる。勿論戰爭を惹起せしめた原因

又要素としては、政治上のこともある、經濟上のこともある。併しながら、それ等のことを以て主要原因と見るは淺薄である。其の主要なる原因は、英國のキアピタルマグネート即ち資本閥が、其の最高の利益を獲得せんが爲に反目確執した事に存して居るのである。即ち新興の獨逸の資本閥が現狀を打破して、世界に覇を唱へんと欲する意志と、英國の資本閥が現狀を維持して、依然として世界の金權を自己の獨占たらしめんと欲する意志との衝突である。資本閥の爭覇戰——之れが今次の大戰の眞相である、少くとも其の主要素で、英獨間の感情上の反目が之れに伴つたのである。

催ふにトレード・プロフィットの時代は去つた。今日迄は自國生產の商品を外國へ輸出して、以て利益を得んとして爭つたのであつたが、今や貿易に因つて利益を獲得せんとする時代は去つて、代るに資本を投下して資本利益を收めんとするの時代となつた。從來は商品の賣買に因つて利益を擧げたのだが、今は資本投下によつて利益を收める時代となつた。從來は販路の爭奪即ちトレード・ウオアーであつたが、今やキアピタル・ウオアーの時代に推移したのである。「金の經濟」を以て唯一の最上のものと考へ、且つ之れに依つて、世界の金權を倫敦に集めて居る英吉利が、今次の戰爭に因つて財政困難を感ずるに至つた。於是乎、英吉利は證券動員を行はなければならなくなつた。證券動員とは英吉利の資金が外國の事業に投じてあつたものを、本國に引上げる事である。即ち外國に投資せる金を英國に回收するのである。英吉利の金網は世界の到る所に張られて居る、其の張られて居る金網を引上げたのである。惟ふに戰後は此の金網を恢復し、又は新たに張るに付て、激甚なる競爭が惹き起るに相異ない、英吉利は從來の如く、其の金網を張つて行かう、撤去した所は之れを回復しやうと努める、獨逸は自國が取つて代つて此の金網を張り、其の經濟的勢力を伸張して世界の金權を自國に集中せしめんと努めるであらう。慾と慾との衝突、資本と資本の侵略戰となるであらう。

六　新局に處するの道

併しながら戰爭前迄の英吉利の經濟政策は、決して完璧なるものでない、大なる缺陷

があると云はねばならぬ。先づ自國の內部を强固にした上で、海外發展をなさねばならぬ。英吉利の政策は此の點に於て、非常なる缺陷があつた、大なる過誤を有つて居た。獨逸には此の缺陷が少なかつた。之れ獨逸が四方に敵を受けながらも、能く其の困難苦痛に堪へて居るのみでなく今日までは進んで攻勢的態度に出で、戰局の上に於て有利なる地位を獲得せる所以である。之れに反し、英吉利に於ては、『物の經濟』が『金の經濟』になつて居た、食料品も兵器も悉く『金の經濟』になつて居た、世界の到る處に植民地を有し、日沒なき大國として誇つて居た國が、戰爭以來は食料品の缺乏に困却するに至つた。是れ實に『金の經濟』の弊所短所を暴露した者である。勿論金の經濟なくして、『物の經濟』のみで行かうとするは、今日の文明生活から推して、一のユートピアであるが、『物の經濟』を無視した『金の經濟』は確かに畸形物である。今次の戰爭に因つて英吉利が其の誤れることを痛切に感知し、『物の經濟』に注意を拂ふやうになつたことは、英吉利の國家存立の上から見て悅ぶべきことであつて、決して悔ゆるには及ばないのである。且つ一般の國家、人類も、今迄は是が非でも英吉利の政策が絕對無上のものであるかの如くに考へて居たのが、今次の戰爭に依つて、大なる敎訓を得、其の經濟の立て方に就て、深く考慮を拂ふやうになつたのは賀すべきことであると云はねばならぬ。されば我々は此の敎訓、――眼前に開展され、提供された活事實を研究し、之れを利用して國家存立の上に適切なる政策を施さねばならぬ。今日迄我國は、無闇に英吉利の文物制度に心醉し、一にも英吉利二にも英吉利、英吉利の眞似さへして居れば國家の興隆は疑ひなしと思つて居たのが、今度の戰爭に依つて、其の誤れる事が分つて來た、之れは我國に取つては寔に喜ぶ可き事である。我々は進んで此の經驗を利用せねばならぬ時期に到達したのである。然るに我國の現狀を見るに、成金が出來たとか在外正貨が增加したと云つて夢中になつて恐悅して居る。今日は其んな事に有頂天になつて居る秋ではない、國民經濟の大本を確定し、內には國力を充實せねばならぬ秋である。

『金の經濟』は自然の勢であるが、今日迄は其の當否を考へなかつたのである。社

會主義の主張する所は、今日では一種の空想である、出來ない相談である。しかしながら此の戰の爲めに『物の經濟』の重要なることが分つた。『金の經濟』を固執して居た英吉利も『物の經濟』に降伏せざるを得なくなつて、獨逸化するに至つた。從來は空想として斥けられて居た問題が、近き將來の問題として考へらるゝに至つた。是れ實に重大なる問題ではないか。立憲だの非立憲だの、政黨だの官僚だのと云つて、空なる騒ぎをやつて居る時代ではない。政黨も官僚も、政府も國民も、力を合せて此の新らしく打開せられた局面に處して行くの方法を講ずるのが、當面の急務だと思ふ。其れには獨逸が滅んでも日本は少しの得もしない如く、英國が滅んだとて日本には別に損はないと云ふことを、先づ頭に置いて一切萬事を新らしい目を以て能く考へることを要する。

三　戰時經濟の一福音

――大正六年六月十五、十六日『臺灣日々新報』掲載――

茲に戰時經濟と名附くるは、主として交戰中にある國の國民經濟の事をいふのである。更に適切に言へば軍國經濟と呼ぶべきであらう、英語でエコノミックス、オブ、ウオアー(Economics of war)獨逸語でクリーグス、ウイルト、シアフト(Kriegswirtschaft)である。我國の如きは假令聯合國の一であるとはいへ、戰時經濟を營み居るとは言へない、無論戰爭により影響を受けて居るけれども、現に交戰しつゝある國とは趣を異にして居る。亞米利加の如きも亦同樣で、支那も愈々戰爭に參加することゝなつても、是亦適切なる戰時經濟に入るのではない。何となれば英、佛、獨、墺、露、伊の如く現に交戰中にある國の經濟狀態は中立國と異るは勿論、日、米、支の如き國とも亦違つて居る。即ち今世界の表には三種の國民經濟が存して居るのである。第一は純然たる平時の

國民經濟であるが、之れは殆んど無いと言つても宜しい、第二は戰爭により大なり小なり影響を受けて居る經濟狀態である、第三は茲に言ふ戰時經濟である。

戰時經濟は特に著しき特色を帶び、單に戰爭により影響を受けて居るといふが如きものにあらずして、殆ど歷史上未曾有の變化を來したものと言ふ事が出來る。今より百年前の英佛戰爭に於ても戰時經濟狀態は現はれたけれども、當時は規模小なるが爲め其の經濟上に及ぼす影響も今回に比すべくもなかつた。二十世紀に於ける經濟界の發達は歷史上殆ど其の比を見ない位である。今其の特色を說明すれば、先づ經濟には平時戰時を通じて異る特色を帶べる二種ある事を明かにせねばならぬ、即ち『物の經濟』と『金の經濟』である。吾々の日常生活は『物』に於てすると同時に『金』に於ても經濟を立てゝ行かねばならぬ。一個人でも町村でも府縣でも、大にしては國の經濟でも植民地の經濟でも常に物と金の兩方面を備へて居るのである。其の一方が具はつたからとて萬全なりと言ふ事は出來ない。兩方面とも充實しなければ圓滿なる經濟は成立しないのである。例へば我國に於て五千萬石の米を生產するとして、此の五千萬石を如何に分配し貯藏するか、何處へ何程を輸出するかといふことは、一面物の經濟であるが、又同時に金の經濟を呼起すのである。米價一石四十圓とすれば五千萬石は二十億圓、五十圓とすれば二十五億圓である、其の二十億なり二十五億圓なりの金高が如何にして定まるかといへば、第一米の價格の高下に依るのであるが、價格は大體に言へば需要供給の關係に基くけれども、仔細に觀察すれば社會各種の原因が綜合して居ることが判る。今日に於ては米を澤山作りたりとて必ずしも其の人が富めりと言へず、又經濟安全なりとも言ひ得ない。國に於ても亦同樣に五千萬石になれりとて之れを以て直に富力增進したりと言ふ事は出來ない。即ち物の經濟に於て成功したればとて、價格が之れに伴はなかつたならば富力を增したとは言はれない。適切なる例を言へば英國昨年の貿易高は金高に於ては一昨年に比し增加して居るけれども、物の數量に於ては却つて減じて居る。之れは戰爭により物價が著しく騰貴した爲めである。此の事は戰時經濟に取りては最

も重要なる點である。此の一事で略々明瞭なりと信ずるが、戰時經濟の特色は金の經濟が重要を減じ、物の經濟が重要を加へた事是れである。二十世紀の經濟狀態は此の戰時經濟と全然反對に進みつゝあつた。殊に英國の如き萬事金の經濟の支配する處であつた。單り英國のみならず何れの國も金の經濟が大勢力を持ち大發達をなして居つたのである、獨逸如何に强しと雖ども、英國の富力は優に之れに對抗して餘りあるを得べしとは、英國の金の經濟を以て獨逸の物の經濟に對抗し得るの意味であつた。英國人は餘程先見の明ある人にても、金の經濟が今日の實際狀況を呈し樣とは考へなかつた。英國の金の經濟に養はれて居つた頭では無理もないことではある。併しながら之れは非常な失策であつた、金の力の案外小にして物の力の非常に大なることは流石の英人にも明瞭になつて來た。之れを以て獨逸思想にかぶれたと言はれても辭する事は出來ない。

今日英國に於て計畫されて居る各種の事柄は、殆んど獨逸の跡を逐うて居るのである。獨逸は戰前は勿論其後も常に一歩づゝ前きに物の經濟の處理を進めて行つた。英國は絶大を誇る富力あれど、之れは物の力にあらずして、金の力である。金が萬事を支配する時代に於ては可なるも、今日となりては其の所謂富力は極めて薄弱となつて來た。金が如何にあつても其れのみでは甚だ不足を感ぜざるを得ないことになつて來た。ロイド・ヂョーヂは『獨逸の砲彈に酬ゐるにはチエック(小切手)を以てすべし』と云へるが、之れが英國の弱みである。平素ならば直に肉に代へ彈に替へらるゝも、今の戰時經濟に於てはそれは出來ない。斯の如くにして英國は平素の國是として固守せることを、片つ端から棄てなければならぬ事となつた、自由貿易主義を放擲し遂に國民節儉野戰或は戰時節儉運動といふものを初めて、國民に向つて極端に物の節儉を勸說して居る。殊に外國輸入品の使用を極端に制限すべきことを唱へて居る。普通節儉と云ふは金の儉約であるが今の英國のは金を使ふなといふにあらずして、物を使ふなといふのである。アスクイスの令孃が盛大なる結婚式を擧げたことに對して、有識者は之れ即ち國民節儉野戰を無效に終らしむるものであると論じて非難して居る。

又英國が軍事公債を募る場合には、成るべく之れを銀行に仰がずして、國民の微細なる資金を集むる方針を取つて居る。之れ必ずしも銀行に資金乏しきが爲めではない。各階級に亙りて公債を募るときは、自然國民全般の節儉が行はれるからである。最近六百萬人が公債に應じたるに對して、非常に喜んで居るのは此の意味である。之れに反して獨逸は物の經濟には出來得る丈けのことは疾くに遣つて居る。四面敵を受けながら今日尙ほ滅亡せざるは物の經濟に力をそゝいで居るからである。無論無い袖は振られないから永久に續くることは出來ない。現に勘なからず疲弊して居ることは爭はれぬ。獨逸にては敵兵の死骸を絞りて油を作つて居るといふ倫敦電報があつたが、之れは眉唾ものである。如何に獨逸人が非人道的なりとて之れは容易に信じ難い。恐らく馬匹より油を取つて居る位の事を誇張した報道であらう。道德上の是非善惡は別として、如何に獨逸が物の經濟に最善の努力を盡して居るかを想像することが出來る。要するに戰時經濟に於ては平時に於て重要視される金の力が案外役に立たず、之れと反對に物の力が如何に重要なるかを痛切に感ぜしめて居る。

扨て此の戰時經濟は戰後には果して如何になるであらうか。講和成立後は直に元の金の經濟に其儘復舊するであらうか。斯く苦しき教訓を受けた實物教育が痕跡も遺さずに、戰前に於ける金力萬能の經濟に戻らうとは信じられぬ。金の經濟は誠に心細いものである。金の經濟の頼み難きことは其の本家本元たる英國人自ら最も著しく學んだのである。今日迄進歩した經濟總ては金を本位として立てゝ來たのである。生產も流通も總て金が本位であつた。之れを司るものも金力即ち之れ權力であつた。自由競爭の時代に於ては全く金權萬能であつた、之れには非常に善き點もあれど亦惡しき點もある。之れを救濟せんとて識者間には研究もされたのであるが、何分にも金權强く如何とも爲し能はなかつたのである。金の經濟には一方に於て非常な無駄が行はれて居つた。金の有る者は人生に何等必要もなき贅澤品に巨費を投じても何等の非難も受けず、之れと反對に日常の生活にすら苦しむ者は非常に多數である。國の經濟の立て方でも金本位なり

し爲め、心ならずも無駄をして居ることが幾らもある。斯くの如くにして止まらなかつたならば、社會の將來は實に慘澹たる時代が來るであらう。

戰爭は一大慘禍なると共に一大幸福を齎したとも云ひ得る。何となれば物の經濟が如何に重要なるかの實物教育を示したからである。之れを善用せば人類社會を益することは決して尠少ではない。殊に下層社會は著しく緩和されることが出來る。貴族が身を下して職工となることは英佛等に於て聞く處なるが、而も彼等は實用に適せず、平素厄介視されて居る下層社會勞働者階級が如何に重要であるかと證據立てられた。此の實物教訓によりて金權萬能の勢を著しく殺ぐことが出來ると思ふ。而して講和後英國が全然金本位の經濟に復舊せず、戰爭によりて得たる、尊い教訓を利用して、物の經濟に亦重きを措くに至るりであらうと思はれる。然らば我國は如何であるか、我國は云ふ迄もなく戰時狀態ではなく、從つて物の經濟の重要なることを痛切に感ずる事がない。否所謂戰爭成金なる者出で來り、益々金權萬能の勢を長じ來つたことは誠に憂ふべきである。英佛は戰爭には苦しめるも將來幸福を齎すべき貴重なる實物教訓を受けた。我國が戰爭の爲め遺憾なく其の弱點を暴露せる金の經濟に益々深入りする事は危險千萬である。我々は深く反省するを要する。

四　戰後の經濟界に於て眞に恐る可き事は何

——大正六年七月十七日稿同八月『理財評論』掲載——

一

此度の戰爭は經濟上に種々の變化を齎らしたが其終局後に於て——否な現に戰局中に於ても——眞に恐る可き事は何であるかに就て我邦の論者の論ずる所我輩の承服し難いものが多々ある。新聞雜誌の求める儘に別に考へを旋らさないで、當座の思ひ付きを公

表することは無用なるのみならず有害であると云ふ一の好證左として、吾輩は數多き戰時經濟談を擧げねばならぬと信ずる。論者はメノコ論から盲斷して曰く、此度の戰爭は人命を損ずることも莫大であると共に、歐洲の富歐洲の資本を費消し盡くしたこと實に空前である。從つて戰後の歐洲經濟界は資本の缺乏に苦しむであらう。起るべき生產も資本の缺乏の爲めに起らず、而して其恢復は十年や二十年を期して待つ可きではない。或は五十年百年を要するであらう、是れ實に戰後經濟界に於て最も恐る可き事であると。而して獨逸に就ては特に此の恐大なりとし、獨逸は戰爭の上に於て如何なる成効を收むるとも、其富力の上に受けた打擊は實に甚大なるものであるから、戰後長い間經濟上の發展を沮まれ飛躍を爲すこと能はず、英佛米の爲めに壓倒せられるであらうと。今吾輩を以て見るに此論程の愚論は滅多にないのである。

二

第一此種論者は十九世紀の舊經濟觀たる資本萬能主義の夢想を脫せぬものである、生產の効程は常に既存資本の額によりて定まる Industry is limited by Capital と云ふジョン・スチュアート・ミルの謬論から覺めぬものである。第二に此種論者は經濟界は活物であることを忘れたものである。成程資本なくして生產が起らぬことは言ふ迄もない、乍併資本と云ふものは、資本なる固定態を取つて存して居るものでない、一國の資本は限定せられた或物ではない、否資本と云ふ具體的な物があるのではない。有るものは富である、其富の中或ものが生產營利に於て或る用法に向けられるときに始めて資本となるのである。生產が資本によつて限定せらるゝよりも、資本は生產の必要によつて或は增され或は減ぜられるのである。資本に對する必要大なるとき、具體的に云へば資本に對する需要が大にして、利子率と利潤率と（或は其一丈けが）が高いときは、今まで資本たらざりし富も資本となる。其反對に資本に對する需要減ずるときは、今まで資本として使用せられた富も資本でなくなつて仕舞ふ。而して資本となる可き富も一の流れの如きものであつて決して不動の固定態にあるものではない。直ちに消費することの要大

なるか、又は直ちに費消する方が、國民經濟的限界餘剩大なるときは、富として保有せられるものは少くなる。其反對に直ちに消費するよりも、富として保有し又は進んで資本として生産に投下する方が、國民經濟的限界餘剩大なるときは、富從つて資本は其瞬間に於て增加するものである。決して一定不易に富又は資本の高が限定せられて居るものでない。經濟界は絶へず限界餘剩價値の活則によつて支配せられ居る活物である。資本も此活則によつて支配せられて、絶へず時々刻々に或は著しく增し、或は著しく減ずるものである。國民資本と云ふが如き固定の大さのものは、決して存するものでない。是れが最近の經濟學理の打勝得た眞理で、ミル一流の資本觀の一擲せられた所以である。

三

從つて戰爭中資本の減少したのは事實に相違ないが、戰後何十年間も減少した儘で續く等と云ふのは、經濟界の通則を少しも知らぬ人の言である。我々は左樣なる幼稚な愚說に迷はされてはならぬ。況んや戰後五十年も百年も、資本の缺乏に苦しむ可し等と論ずるが如き、馬鹿らしくて挨拶も出來ぬ次第である、資本の增減は人口の增減と同樣である、否人口の增減よりも速かに働くものである。此度の戰爭で何十萬かの人命を損じたから、戰後二十年も三十年も歐洲は人口の少きに苦しむ可しと主張する人があつたら、其人は馬鹿者の稱を直ちに下されるであらう。戰後歐洲の出生率は必ず增進すべきこと今より逆睹することが出來る。戰爭の爲めに起つた人口の減少は、或度まで——或は全部——此の出生率增進の爲めに補塡せらる可きことは、今日から之を斷言しても差支ない。此の如く戰爭の爲めに減少した歐洲の富歐洲の資本は、必ずや戰後生産率の增進資本形成力の增進の爲めに、或度まで——或は全部、或國にては戰前の狀態を超越するまでも——補塡せらるゝと考ふ可きである。唯其十分に補塡せらるゝ迄には多少の日子を要する。然し其は決して甚しく憂ふ可きこと、甚だしく恐る可き事ではない。減少した資本を以て行はるゝ生産は生産能率——企業能率、勞働能率、土地收穫率——の

增進を惹起すに相違ない。資本減少の迷惑は相對的たるに止まる。英國に於けるより獨逸に於ける方、資本の減少が大なるときは、其相對關係に於て獨逸は苦しむ。何となれば獨逸に於ては英國に於けるより資本に對して高き報酬を拂ふことを要し、其れ丈け生產費を高めるか、又は勞銀利潤の分け前を減ずるかせなければならぬからである。

四

然るに歐洲各國共に戰爭の爲めに富の減少を來たしたならば、迷惑を被る度合は寧ろ少ないのである。即ち迷惑は主として相對的であつて絕對的ではないのである。英も獨も佛も富の減少を見るならば、資本減少の爲めに生產費の嵩むこと又は他の分配者の分前の減少することは同樣であつて、國際競爭上別に大した不利益を見ないのである。少く生產すれば少なく消費し、多く生產すれば多く消費する。資本減少の結果は消費を少くすることにはなるが、活物たる我々の經濟生活は又た之に順應して行くから、其處に甚だしく憂ふ可き事恐る可き事は起らぬ。唯暫時の不便とアブスチネンスとが一般に要求せらるゝに止るのである。斯くの如く戰爭の爲めに富の減少した事は、之れなきは之れあるには勝れりと雖も、決して之を以て戰後經濟界に於て眞に憂ふ可き事、眞に恐る可き事とするには足りないこと、戰爭の爲めに幾十萬の人が死んだとて、世界人口の永久的減少を憂ふるに及ばないと同一理に歸着するのである。

以上極く簡單に說明したから、舊經濟界の謬想に囚はれて居る人を正路へ導き來るには不十分であるかも知れぬが、先入の僻見を有せざる人に對しては粗ぼ事足りると信ずる。

五

さて然らば戰後の經濟界に於て眞に恐る可き事は何であるか。今此問に對し一言を以て答へれば、戰時中に採用せられた誤れる經濟財政々策の爲めに、國民所得分配の行程を根本から破壞する事是である。歐洲交戰國に於ては國民は皆必死な努力を爲して居るは疑がないが、然し戰時の爲めに誰が、何の階級が、最も多くの犧牲を獻じたかと云

へば、其は無産者階級である。有産者階級は、上に行くほど犧牲の財産に對するパーセンテーヂは少く、或る有産階級は戰爭成金とさへなつて居る。自己の生命をさへ國家の爲めに獻じて居るものが澤山ある、他方には却つて戰爭の爲めに財産を肥したものさへある。不公平も亦極れりと云ふ可きであるが、其は兩極端に就て言つたものであるから姑く論外として、其中間者流に就て見るに、戰爭の爲めに國家が費した莫大な費用は何れも國民の富又は所得を以て支ふる外はないのである。

六

さて國家が此費用を國民から取り立てるには三つの方法がある。第一は課税、第二は公債の募集、第三はインフレーション是である。課税に就ても其負擔の割合は無産者、下層社會に重く、上流の有産階級には比較的輕いのである。正しく言ふならば、英國の如き新たに徴兵制度を强制して、人民の生命をさへ國の爲めに徴發することゝした以上、有産階級に對する課税は或額以上は其人々の所得の全部を徴收す可き筈である中流に向つても生活の必要を十分に充し得た殘餘に對しては100%の税を課して然る可きである。此く言ふと或は反駁して云ふ人があらう。其れでは國民の貯財心を全く絶滅して、百年の長計たらずと。然り平和の時に於ては此くす可きではない。然し今戰時中に於ては富の蓄積、資本の形成を沮喪する云々の顧慮は少しも要らぬのである、平和恢復すれば直ちに100%の率は廢さる可きは無論であるが故に、其爲めに富の蓄積の妨げらるゝを憂ふるに及ばぬ。戰爭中は富は蓄積するよりも、直ちに之を國家の用途に充つ可きは無論である。ドーセ其れ丈けの富は消費せられるのであるから、之を蓄積したとて何にもならぬのである。然るに英國を始め何れの國でも、下層社會に對しては生活の必要以外の所得に對して100%に近い課税を實行して居ても、有産階級上流階級に對しては60%にすら及んで居らぬ。即ち課税の上に於て戰時非常の時と云ひつゝ、猶此の不平均が行はれて居る。然し之れは未だ眞に恐る可き事とは言へぬ、又た平時さへ課税の不平均は現存して居るのだから特に戰爭に伴ふことゝも言へぬ。

七

次は公債の募集であるが、此れは二つに分けて見ねばならぬ。眞に國民が新たに得る所得――又た新たに得可き所得を擔保として得たる借金――を以て之に應ずるは誠に結構な事であるが、既に一寸述べて置いた通り、英國でさへ此頃は獨逸の眞似をして、銀行の融通による應募を大に奬勵して居る。『公債應募の爲めの貸付の義は特に精々勉强して御相談に應可申候』との銀行廣告は英國の新聞雜誌に此頃頻繁に見る所である。此れ隱れたる一種のインフレーションである。加ふるに現はれたるインフレーションがある、今次に此二つを一つにして論じて見よう。

八

吾輩は戰後の經濟界に於て最も恐る可きは此の二種のインフレーションであると確信する。何となればインフレーションは國民所得分配の根本を滅茶苦茶に破壞するものであるからである。

戰爭に要する費用は現在又は將來の富を割いて之に當てる外はない。戰時增稅は現在の富又所得を以て戰費を支へる所以であつて、最も合理的にして最も餘弊の少い支辨法であるが、歐洲各國共租稅のみを以て戰費を支辨して居らぬ。租稅に依賴する割合の最も多いと言はれて居る英國ですら其割合は半分にも達して居らぬ。ソコデ現戰爭は主として將來の富と所得とを當てにして居るものと云はねばならぬが、其將來の所得を當てにすることが正當に行はれて居り、明瞭に確實に行はれて居れば、弊害はあつても不得止所と言はねばならぬ。即ち國民が將來何年かに涉つて年々生產する富、年々收得する所の所得の一部分を割いて戰費の補塡に正直に的確に當てゝ行くのであれば、現在直に支辨するには劣るけれども之を除いては先以て最も確實健全な方法と認む可きである。インフレーションは即ち之と異るのである。是又た一の戰費支辨法であるが其弊害最も大なるものである。其弊害は戰時中に於ても著大であるが、其最も恐る可きは平和克復の後に於てゝある。

九

此の方法たる誰が負擔に應ずるか少しも明瞭ならざる隱密曖昧の一の方法であつて、而して主として下層社會から甚だ多く其所得を奪取る所の方法であるからである。インフレーションに二種ある。一は前云ふ如く借金をして公債の募に應ずる是れである。其借金をした國民が向後の所得の中から其借金を償却して行けば、別に差支はないが、無理に借金を奬勵すること獨逸の如く、佛國の如く、又近頃の英國の如くであれば、自然借金をした國民は、融通に融通を重ぬることゝなる。自分が正直に贏得した所を以て償却すること能はざる程の無理な借金をする。又た戰時公債の募に應ずる爲めに今迄持つて居た他の有價證券を賣放つて其手取金を以て應募するが如きは唯だ乘り換へに過ぎずして、國民から云へば何の貢獻を成す譯でなく、而して其結果は一種のインフレーションとなる。何故なれば銀行からの融通又た證券の賣り放ちは銀行預金の增加、通貨の增加と以ふ形を取るに定まつて居る。從つて其額丈けは通貨を膨脹することになるのである。インフレーションの第二種は英國の戰時貯金證券 War Savings Certificate 並に流通證券 Currency notes の發行又た獨逸の貸付金庫證券 Darlehenskassenschein の發行を初め各國に於ける不換紙幣の增發即ち之であつて、直接に流通要具の額を增大することである。國家は課稅と公債とを以てして猶足らず、更らに自ら積極的に通貨を膨脹せしめて、以て一時を糊塗する。成程至極簡便な方法の樣であるが、素人の手療治で一時病を抑へたのと同じく、却つて病根を深からしむるものである。何故となれば通貨の膨脹は物價の騰貴を來し、其結果つまり國民一般に課稅以外に騰貴せる生活費に於て、戰費を負擔することになる。不知不識の間に非常なる負擔を爲す譯である。

十

物價騰貴の爲めに受くる打擊は有產階級よりも無產下層社會に强いことは言ふ迄もない。即ち唯さへ戰費の負擔の不公平なのを更らに助長することになつて、下層無產階級は益々苦む外はない。加之公債の募に應ずる者は兎に角多少の餘裕ある者である。

彼等が戰後に於て長い間受くる所の利子の支拂は、一般國民が負擔する、而して其負擔は下層者に重い。即ち下層者は戰後長い時期に渉つて、有產者の懷へ利子を拂ふ爲めに、納稅に於てのみならず、騰貴せる生活費の形に於て不公平に重い所の負擔を支拂ふ譯になるのである。而して公債の募に應じた有產者は、一方に增稅の負擔を爲すと共に、他方公債利子の支拂を受けるのみならず、戰時中價の下つた貨幣を以て應募したに對し、價の恢復した貨幣に於て元金と利子とを支拂はるゝのである。戰時中の百磅は戰後に於て百十磅百二十磅に相當する購買力を有するに至るであらう。是れ丈けでも彼等は利益を占める。加之年々支拂を受くる利息も、亦戰後に於てより大なる購買力を有するに至るであらう。然れば戰後に於て、下層者は彌々苦しむと共に、有產者の利益は遞增的となつて、玆に國民所得の分配狀態は根本的に破壞せらるゝことゝなる。是れが戰後に於て尤も恐る可く憂ふ可き事である。之に比すれば資本の減少の如きは到底日を同ふして談ず可きではない。

十一

我邦に於ては、戰後と云はず戰爭中の今日に於て、此作用が明かに現はれて居る。即ち當今の一般物價の騰貴就中米價の騰貴は、即ち我々國民が此戰爭の爲めに要求せられて居る犧牲を意味して居るのである。我邦は戰爭の爲め直接增稅の苦しみは受けないと安心して居るが、奚ぞ知らん我々は高き米、高き生活費、高き運賃、高き保險料の形に於て、一種の課稅をされて居るのである。而して他方には七割の配當をする郵船會社あり、國家が二千萬圓近くの戰時補償金を損して居る他方に莫大の利を占めて居る海上保險會社があり。又た幾十幾百の成金と稱する輩があり、米の買占に巨利を得て居る人々がある。我々一般國民が苦しい生活を爲しつゝあるは、我々所得の一部を高き物價の形に於て、彼等暴富者に獻上して居る次第である。然るに怠慢なる政府は、戰時所得稅は調査中に屬す、米價の調節は議會の閉會を待つて考究す可し等と、無責任千萬な事を唱へつゝ此の有樣を高見の見物して居る。

十二

さて我邦が此くの如き物價騰貴を繼續するに至つた根本の原因は（他の原因は姑く置き）在外正貨の手品にある。外國銀行預金を以て正貨準備に充て恬として耻ぢざる大非違にある、在外正貨を正貨準備に計上して、ドシ〳〵兌換券發行額を膨脹せしめるから、物價は他の原因なくとも騰貴するは當り前である。試みに大正四年六月より同六年五月に至る二ヶ年間の物價指數と兌換券流通額とを表に作つて見たに左の如き有樣を示して居る。

六八五頁乙表を見よ

兌換券流通高の增加と物價指數の大さとは、大體に於て、如何にも規則正しく併行して居ること一目瞭然たりと云ふ可きである。此事實は政府當局者が如何に辭を構へても之を否定することを許さないのである。在外正貨を正貨準備に充つる制度は、自ら兌換券の膨脹を來し、而して物價の騰貴となり、我々國民は眼に見えざる大なる增稅を賦課せられ、而して他方成金共を肥して居ること、なつて居るのである。

我邦も歐洲も（米國も今や參戰し而して其戰費を租稅のみに求めず巨額の公債（自由ローン）を募る以上同樣である）何れも戰後に於て國民所得の分配の根柢を破壞する事になる外はない。予は戰後の經濟界に於て眞に恐る可き事とは實に此の謂であると確信する。資本萬能論者以つて如何と爲すか。

五　意氣地なき戰後經濟論を排す

——大正七年一月『日本評論』掲載——

一　愚說の好標本

我國の經濟界には、屢々餘計な取越し苦勞や愚にもつかぬ杞憂等が行はれる。目下、經濟界に於て盛んに論議せられて居る所の戰後の經濟戰爭說や、獨逸の廉價投賣問題の如きは、即ち其の好標本である。若し我國の學者にオリヂナリチーがあり、我國の經濟界に自主的精神があつたならば、斯くの如き迷論愚說が事々しく行はるゝ筈は無いのである。

元來、今次の世界大戰は、漫然、英吉利の口吻を眞似て說をなす者の言ふが如く、カイゼルの野心や乃至は獨逸の軍國主義のみが其の原因では無いのである。吾輩をして云はしむれば、其の主要なる原因は英獨のキアピタル・マグネート(資本閥)が、其の利益を獲得擁護せんとする事に存するので、詮じ詰めて云へば、資本閥の爭覇戰である。言を換へて云へば、他國の利權、販路、勢力等を奪ひ若くは之れを壓迫せんとする經濟的帝國主義の結果、勃發したものであると云ひ得るのである。

二　英國經濟政策變動の原因

蓋し、英吉利は自由貿易主義の本家であつた。英吉利が自由貿易國たり、且つ自由貿易國を以つて今日の繁盛を見るに至つた所以は、彼が商賣國であつたからである。即ち彼は品質佳良にして價格低廉なる貨物を製出し得る國である。已に品が良くて價が廉ければ、其商品は何處へ賣り出しても賣れるに定つて居る。されば他に妨害者が無ければ、其の商品の販路は維持擴張することが出來るのは見易い道理である。從つて國家が態々是れに對して干涉するの必要を認めない。さればこそ英吉利には自由貿易主義が行はれ、而も巨大の國富を蓄積することが出來たのである。

斯くの如く良くて廉い品物を生產し得る商賣國たる英吉利であるから自由貿易主義が行はれ且つ其の成功を見るに至つたのである。此の英吉利の事情を知らずして、英吉利の經濟政策を其の儘他國に應用せんとするは大なる謬りである。オリヂナリチーなき學者の多くは、兎角斯る迷謬に陷るが誠に困つたものではないか。例へば三越吳服店の如き、信用あり聲價ある大商店ならば、正確な品物を正當な價格で販賣すると云ふ事が世

問に知れて居から別段自家の賣品の佳良なる事や、價格の正當なる事抔を吹聽する必要を認めぬけれ共、他の小商店に於ては、其の販路を擴張し、顧客を作る爲めには、勸誘員を出したり、目立た廣告抔をしたりして世間に自家賣品の眞價を知らせねばならぬ。三越は恰も自由貿易主義の英國の如く、後者は保護貿易主義の國家の如きものである。

前述の如く、商品を賣ることを本位として居た商賣國たる英吉利は、爾來、自由貿易主義に據つて、着々其の功果を擧げ、國內には富が充溢するに至つた。於是乎、彼は從來の商品專賣より轉じて、國內に充溢せる富を他國に投じて利益を收めんとするに至つたのである。商品輸出本位より轉じて今は資本輸出國とならねばならぬ事となつた。然るに商品の輸出と資本の輸出とは、二者大に趣を異にせざるを得ぬ、商品は單に賣りさへすれば宜しい、對手は何んな者でも構はぬ。然るに資本の輸出には、其の輸出先即ち債務者を吟味する必要がある、そして安全にして確實なる者を選擇せねばならぬ。之れは申す迄もなく、金を貸せば、結局は其の貸したる金を回收せねばならず、利子も取立ねばならぬ。若し債務國が確乎たるものでなかつたならば、貸金の回收も出來ず、利子の取立も出來なくなると云ふ結果を生ずる。故に資本輸出の時代には、從來の如き自由貿易主義では危險である。國家が相當の干涉保護をせねばならなくなつて來る。是れ即ち、保護主義に變轉せねばならぬ所以である。今や英吉利の經濟政策が一變しつゝあるのは當然の成行で、其の大海軍は嘗て商賣を保護したものであつたが、今日では資本をも保護するの責務を帶ぶるに至つたのである。吾人は斯の世界的情勢を能く觀察し、了解して置かねばならぬ。

三　戰後のダムピングを恐るゝは愚の至り

自國生產の商品を外國へ輸出して利益を收めんとする時代には、販路の爭奪は實に國際商業上に於ける重大問題である。而してダムピング（Dumping）に據つて其の販路を擴張せんとする者の出現するは、實に對手國に取つて大に警戒すべき事であるが、今日では販路爭奪の時代に非ずして、キアピタル・ウオアの時代に推移して居るのであるか

ら之れは恐るゝには足らぬのである。

蓋し、現大戰の結果、歐洲の各交戰國は甚だしく疲弊して居るが如くに觀察せらるゝが、世人は兎角今次の戰爭の絕大なることを論じ、歐洲交戰列國は其の富其の資本を極度に費消蕩盡したから、戰後に於ては列國の經濟界は資本の缺乏に苦しみ、それが爲めに生產困難に陷り、其の恢復には數十年も掛るであらうと臆斷するが、これは舊い經濟觀即ち資本萬能主義に囚はれた議論で、今日には通用せぬ。勿論、生產は資本が無ければ出來ないが、併しながら資本は固定したものでない、資本は生產に依つて左右せらるゝ作用を有つて居る。即ち生產に依つて資本は增減せらるゝものである。舊經濟觀たる資本萬能主義で、戰後の經濟界を判斷すると飛んでもない迷論謬說に陷る、我々は頭を一新して觀測を下すの要がある。

扨て然らば、戰後の世界經濟界は斯くの如しとすれば、英吉利も獨逸も、夫れ相當に活躍するのは分り切つて居る。戰爭の爲めに獨逸のマーケットは他國に奪はれて居るが、併し今日奪つて居る國の商品よりも、獨逸の商品の方が佳ければ結局獨逸が其のマーケットを恢復すべきは當然である。現に獨逸の製品でなければならぬ物も隨分有る。戰時の今日は獨逸の製品を得ることが出來ぬために、他製品で間に合して居る所もあるから、戰後に於ては獨逸の商品は旺んに市場に流れ出づるに相違ない。尤も其の商品は戰爭中に生產せられた物であるとか、或は開戰當時より停滯して居た物であるとか云ふものではない。戰後に於て生產せられたるものであるべきだと思ふ。斯くして獨逸は旺んにダムピングを行るとしても、而も之れを防止せんとするは愚の骨頂で、事實出來る事でもない。獨逸のダムピングが英吉利に取つては、勿論苦痛である可きで、今日から英吉利がそれを惧れて居るのは無理もない話であるが、それは苦痛を感ずる英吉利にして、初めて惧るべき筋合のもので、苦痛を感ぜぬ日本などが同じやうにダムピング〳〵と云つて惧ろしがつて居るのは、何の事やら吾輩には了解し兼ねる次第である。こんな心配は全く意味の無い心配である。況んや戰後の經濟戰などゝ云つて騷いだり惧れたり

するのは馬鹿々々しい話である。英吉利が惧れて居るから日本も惧れねばならぬ。英吉利が騒いで居るから日本も騒がねばならぬと云ふのなら、英吉利が亡びたら日本も亡びなければならぬと云ふ事になる。こんな馬鹿々々しい話があるか。吾輩は日本が英吉利に囚はれてゐる以上、正當な議論や觀察や判斷は起らぬと思ふ。

四　戰後經濟界の重大問題

獨逸が戰後に於てダムピングを行とか戰後の經濟戰が何うのかうのと騒ぐのは愚の骨頂で有と云事は、以上述た通で吾輩から見れば、そんなとは問題にならぬと思ふ。其よりも戰後に於て英獨共通の大問題が横はつて居る。之は貧富の問題である。今次の戰爭の爲に國民所得の分配が著るしく病的となつた。無資產者階級即ち貧者が多くの犧牲を拂ひ、其と反對に有產者階級は寧戰爭の爲に利益を占て居る此が戰後の大問題である。蓋し戰爭の爲めに國家が巨大の費用を支出して居る。その費用の調達には三種ある、課稅とインフレーションと公債の募集とである。公債は之れを外國債に據つたものもあるが、多くは內國債である。殊に獨逸の如きは巨額の內國債を募つて居る。而して此の戰費に使用される爲めに調達せられた金の負擔額を考へると、富者よりも貧者に重いのは疑ふ可らざる事である。課稅も然り、殊にインフレーションと國債の募集とは戰後の經濟界に恐る可き結果を與ふるものである。尤も國債も、政府がそれを募集する時には應募者に貸付金をして、その貸付けた金で應募せしめるのであるから、結局、國債の募集もインフレーションを齎すことになる。斯くして通貨は膨脹し物價は騰貴する。物價騰貴の爲めに受くる打擊は富者よりも貧者に甚だしいと云ふとは改めて言ふ迄も無い。同時に又、政府は其の國債を償還せねばならず、償還するまでは多額の利子を支拂はねばならぬ。之れを英吉利に就て見るも二十億圓と云ふ巨額に達して居る。これが爲めに政府はその資金を國民から調達せねばならぬ。その調達の方法は、結局、課稅に據らねばならぬ。稅金は之れを一般國民殊に貧者から絞り取ることゝなる、貧者から取り立てた金を富者に渡す、即ち右から左へと出すので、貧者は富者の犧牲に供せられる譯であ

る。何となれば國債の所有者は富者であるからどうしても富者の懷中に金が吸收されて了ふ。其の結果貧富の懸隔が益々激しくなつて來るのは自然の理である。これこそ實に戰後の重大問題で識者の第一に顧慮すべきことである。兎も角、今や世界經濟界は、非常の大變化大激動を受けつゝあるのである。

五　英獨の如き侵略主義の國たる勿れ

ダムピングに對する吾輩の見解及び吾輩の戰後の大問題とする貧富問題に對する意見は簡單ながら以上を以て足れりとして、扨て各國は何れも今次の悲慘なる大戰に依つて、不當に他國の市場を侵略せんとすることの不可なる所以を知り、之れが爲めに飛んでもない結果を起したと云事を悟つたであらうと思はれる。蓋し獨逸の軍國主義は勿論憎む可く是非共此を滅亡せしめる必要があるが、同時に英吉利の慾張り主義、我利々々主義をも排斥せぬばならぬ。其でなければ世界の平和は維持するとは出來ぬのである。

姉崎博士は昨年十一月の『中央公論』に於て『戰後の世界』と云ふ論文を發表した。

我輩は博士の意見には或る點に於て贊成し、或る點に於ては贊成することが出來ない。如何なる點を贊成するか、それは博士の言を縮めて言へば『日本人は侵略主義の考ばかりから戰後の世界の形勢を判斷するの傾向があるからいけない』と云ふ點である。即ち各國とも自由を尊重し、平和を維持することに努む可きで日本も勿論斯くある可きである。然らば我輩は如何なる點に於て博士の言に首肯することが可能ぬか。曰く、博士が英吉利や亞米利加のみが自由平和の確保者で、獨逸は侵略主義の代表者であると云つてゐる點である。これは大なる謬りである。侵略主義は獨逸のみではない。英吉利の如きは慾張りの甚だしきものであつて、明かに侵略主義の國家である。米國も亦然り、尤も米國は先年迄は人道主義の立派な國家であつたが、輓近の傾向は、正義人道を無視して、侵略的政策を取るに至つた。故に姉崎君が英米を正義人道の國の如くに見做して居るのは妄の至りである。我輩は英米獨、何れも平和人道の國家に非ずして、侵略主義の國家であると信ずる。たゞ國々に依つて、其の侵略の形式が相異して居るに過ぎぬので

ある。但し我輩は各國が人道主義を以つて世界に國を樹つるに至らんことを望む。此の點に於ては博士の意見に贊意を表するものである。

日本としては英米を人道主義の國家の如くに買被るのは愚の骨頂である、從つて英米の眞似をする必要は毫も無いのである、日本は日本として正しき道を進む可きである。即ち日本の國是を其のまゝにして進むべきである。今日迄、日本は歐羅巴の先進國のやうに惡いことをやつて居らぬ、尤も惡い事をしやうと思つても、境遇上出來なかつたのであらうが、兎も角惡い事をやつて居ない。されば戰後と雖も、英獨の疲弊の虛を衝いて、彼等の利權を獲取せんとするが如きは全く謬つた考へである。若し日本が斯くの如き金權的侵略主義を取るならば、それは第二の英國若くは獨逸である。

蓋し正義人道は政治上許りではない、經濟上に於ても本當の正義人道に立つのでなければならぬ。姉崎君の所謂世界が如何なるか許り考へて如何すると云ふ意氣のないのは世上の經濟論者に於て殊に甚しい。ダムピング何ぞ恐るゝに足らん。其を恐れて、我邦の立場を定む可し抔と云ふのは、姉崎博士の言を借りれば「國を亡ぼす」謬想である。

六　戰後の世界經濟當面の大問題

―大正六年十二月一日稿同七年一月『太陽』掲載―

一

聯合軍側も獨墺側も戰爭の爲めに非常なる損害を蒙つたから戰後に於ては兩方とも餘程の困難に陷るであらう、其恢復には恐らく數十年を要するであらう。而して經濟財政上に於ても其打擊は莫大なものであらうが、所謂經濟戰なるものが始つて獨逸などでは極力「ダムピング」を實行して市場の爭奪に勉めるであらう、聯合國は決して拱手しては居るまい、同じく極度まであらゆる方策を用ゐて之と對抗するだらう、是れが戰後

の世界經濟上の最大問題と認む可きである、唯幸にも我邦は此度の戰爭の爲め經濟上甚だ有利なる狀態を現出し何等の損失を蒙らなかつたから此勢を持續して行けば、戰後に來る可き經濟戰に處しても甚しき不利を感ずることなくて濟むであらう、唯問題は如何にして戰時中に得た利益を戰後までも持續して行く可きや否やにあると。是れが目今我邦識者の大多數を支配して居る戰後經濟觀であるように見受ける。吾輩は此の說に對して根本的に異なる考を有して居るものである。よつて此一文に於て少しく卑見の次第を開陳して見たいと思ふのである。

二

此度の大戰爭が聯合側敵側に均しく非常な打擊を能へたことは言ふ迄もない、其經濟上の打擊の如きは寧ろ小なるものに屬する。其れよりも遙かに大なる損害を兩方とも蒙つて居る。人命の損失は勿論負傷者の驚く可き數丈けでも、經濟上の損失などゝは到底日を同うして語る可きものではない。精神上の損害に至つては殊に大である、道德上の

損害も筆紙に盡くし得ぬ。尤も他方には戰爭の爲めに愛國心報國の精神自己犧牲心の著しく高まつたと云ふ美點も考へに入れねばならぬが、他方に於て國と國、國民と國民との間に深き敵對心を植え付けた大損害がある。基督敎徒同志が異敎徒に對するよりも甚しき憎惡の念を互に構へるようになつた損害がある。數へ立てれば實に際限のない事である。人類が被つた此の莫大な損害に比較するときは、經濟上又は財政上の損害の如きは殆んど言ふに足らないと斷じて誤はないことゝ信ずる。歐洲の人は今まだ戰爭に熱中して居るようであつて、戰爭の爲めに受くる人文の這個の大悲慘を或は十分に自覺せず、何處迄も此の戰爭を繼續しようとして居るが如くであるが、靜かに思を旋らして見れば、Is this war worth fighting?（此の戰爭は戰ふの價ありや）との根本的疑惑が胸中に湧き來ることゝ信ずる。殊に露國の如き其軍隊には殆んど鬪志なしと傳へられて居る。其國民も今や殆んど戰爭繼續を希はなくなつて居るようである。然るに英佛國は其の鬪志なき露國の兵士をして、其戰爭を厭ひ始めたる露國々民をして、飽迄も戰爭を

繼續せしむ可しとし、休戰又は講和の如きことを敢てするならば其の露國を敵とす可しとして强制しつゝあるのである。英佛又は米國の識者中高き道德の立場に立歸つて、此くの如き强制と、所謂獨逸の軍國主義なるものと、何れか人類存在の深き意義から見て、より多く非人道的であるかの疑問を起しつゝあるもの絕無ではあるまい。併し此は今予が論ぜんと欲する所ではない、予の論ぜんとする所は大戰の與へた幾多の損害中、寧ろ其小なるものに屬する經濟上の事柄にのみ限つて居るのである。

三

他の意味に於ける損害との比較を全く考慮の外に置いて單に經濟上の損害如何を考へて見ても、其は中々莫大のものであることは世人の云ふ通りである。聯合國の一切と獨墺側の一切との開戰當初から今日迄に費した戰費丈けを見ても、其額は實に莫大なものである。さて此の戰費なるものには廣い意味の戰費と、狹い意味の戰費と二樣あることを知らねばならぬ。今例を聯合國の旗頭たる英國に取つて一寸說明して見よう。英國が開戰當初から今日迄に被つた經濟上の損害即ち戰費とは、廣い意味で云へば英國政府の費やした戰費と英國々民全體が費やした戰爭に直接關連する費用とを總計したものゝ謂である。此額は精確には知ることは出來ない。國民の一人々々が直接間接に戰爭の爲めに費した額は如何に統計調査の機關の遺憾なきまでに發達して居る英國と雖も、到底之を調査計上する道がないので、唯だ概測を下し得るのみである。然るに狹い意味の戰費に至つては精密に之を數字に顯はして計算することが出來るのである。狹い意味の戰費とは何を指して云ふか、答英國政府が支出した戰費是れである。其額は明かに見り詳かに之を知ることが出來るのである。今最近の數字をあげて見ると千九百十四年八月一日から本年（大正六年）十月六日までの合計五十六億五千三百萬磅で其內聯合與國及領地への立替貸金（七月二十一日までにて）十一億七千百萬磅を差引くと、英國政府が戰費として使つた高は四十四億八千二百萬磅ザット四百五十億圓である。此が狹い意味で云ふ英國の戰費であるから之れに國民全體が支出した高を加へたなら、實に驚く可

き巨額に達するのである。此事實丈け見ると戰爭の齎らした犧牲は經濟上に於ても實に莫大なものであつて、其與へた打擊は想像も及ばぬようにも考らへれる。英國一ヶ國でさへ此くの有樣であるから、他の交戰諸國の戰費を總計したら猶更以つて言語に絕する次第である。ソコデ戰後の世界を考へるに當つて先づ此事實から出立せねばならぬ。戰後の世界經濟は此莫大な戰費の爲に被つた打擊の下に立つと云ふことが其前提である。而して英國以外の國は此巨額の戰費は殆ど全部負債を以て支辨して居るから、其戰費の全部は戰後の各國政府が其々に償却せねばならぬ次第である。英國丈は健實な方針を取つて戰費の一部は戰時中增稅によつて支辨して居る、乍去其は一部分に止まつて居るので英國と雖も大部分は矢張負債を以て支辨して居るので、右にあげた額の中國庫現收入を以て支辨した高は十三億五千七百萬磅に過ぎず、殘四十二億九千五百萬磅即ち約四百三十億圓は負債である。從つて其利子許りでも戰後に於て一ヶ年に我日本の公債の元金總高以上に當る額を支拂はねばならぬのである。此は英國の樣な豐な財政と雖も、中々以つて堪へ兼ぬる大負擔である。況んや其他の交戰國をや。故に此點丈けを捕らへて考へると戰後の世界經濟に於て現交戰國は非常にハンデキャップ付けられて居て、米國なり我日本なりは此點に於て甚だ有利な狀態に立つように一般に考へられるのも無理はないことである。然し乍ら此點が先づ吾輩に異論の存する所である。

四

戒程右の如き數字を見ると我々は唯だ驚愕に囚はれるの外はないが、其處が大いに吟味を要する點なのである。先づ第一に右に數字を以て現はした戰費は、貨幣價値を以て言表はした戰費であることを忘れてはならぬ。貨幣價値を以て言表はすと云ふのは金高を以て言表はしたと云ふことであつて、實際其れ丈けの金が費消せられたと云ふことは同じではない。四百五十億圓と云ふ貨幣が戰爭の爲めに費消せられたのではない。英國は開戰以來四百五十億圓を戰爭の爲に使つたと云ふが能くまあソンナに澤山な金が英國に在つたものだと言ふ人がある。此れは間違ひである、英國だとて四百五十億圓など

と云ふ金がある譯ではない、四百五十億圓と云のは開戰以來最近迄に使つた富（物及働き）を金高に積て見ば左樣なると云に外ならぬのである。其使つた物と働きとは如何なる物であるかを見なければ、實際の戰費なる物は分らない。其主なる物を擧れば第一には陸海軍の將卒の働き第二には間接に陸海軍の用を勤める人々一切の働き即ち兵器軍需品の製造に從事する人々の働き、及び此製造に使用した器械や材料、第三は戰爭の爲に使はれた各種運送機關（鐵道、汽船其他）の働き及其從業員の働き、第四傷病兵救護治療其他に使つた物及人の働き、第五陸海軍人の食料被服其他（但し平時要する物に當る分を差引かなければならぬ）等である。此等の物や働きは戰爭がなければ入らぬのであるが平時とても陸海軍に入費がかゝつて居るのであるから、其分は戰費の內に組入る可きではなく差引かなければならぬし、又戰爭の爲め新たに起つた物や人の働きは之を差引かなければならぬ。例へば平時に於ては無職者であつたものが戰爭の爲めに職業を得て働くようになれば其れ丈け國の富を增したのであるから、之れは戰費から控除す可きである。從つて金高で言表はした支出高は實際の戰費（即ち實際戰爭の爲めに要した餘分の失費）とは同じものではない。戰爭の爲に交戰諸國が被つた經濟上の損害なるものは國民各々が被る物は別としても、其國の政府の支出高丈に就いて言つても右に表はした金高の數字とは一致するものではない。此事は前段に於て『金の經濟』と『物の經濟』との區別に就て論じたが、我々は平時經濟に於ては常に金の經濟の支配の下に立つて居つて、凡て經濟上の物事を金の經濟に養はれた頭を以つて判斷して居るものだから、戰時經濟に就ても動もすると金の經濟の頭許りで判斷すると云ふ誤に陷るを免れない。

前段『ロムベード・ストリート本位の戰時經濟論を笑ふ』を見よ

戰費とは戰爭の爲めに直接間接に費やした支出の謂である。戰爭の爲めに支拂つた金高ではない。支拂つた金高の中には眞實の費用も入つて居るが又其他の物も含んで居るし、又反對に眞實の費用にして金高に表はれないものもある。戰爭用の軍需品製造工場で何萬圓の賃銀を拂つた、其賃銀總額は皆國の損に歸すると云ふものあらば其誤なることは誰も直ぐ氣が付くであらう。否更に一歩を進めて考へな

ければならぬ、英國は今日迄之を金高に積算して見ると四百五十億圓に當る丈けの物を政府として使つたのであるが、さて然らば此四百五十億圓に當る丈けの物（即ち以上あげた五項及び其他）が取りも直さず英國が其政府を通して被つた經濟上の損失であるかと云と、實は左樣ではないのである。其れ丈けの物を使つたには相違ないが使つたと云ことゝ、損をしたと云ふことゝは必ずしも一致しないのである。何故なれば前に言つた通り其使つた内には戰爭が無ければテンデ作り出されないものがある。又た其使つた人の内には戰爭が無ければ徒手遊食する人もある。であるから眞に戰爭の爲に被つた損失とは如何なる物であるかと云へば、其は積極的に現に使つた物ではなく其等の物を作り出す爲に生産が中止せられた物、其等の働きを爲すが爲めに打捨られた働きの合計が眞實に云ふ戰爭の損失となるのである。戰爭がなければ軍人軍屬の大部分、軍需品製造其他戰爭關係事業の從業員は、夫々平和の産業に從事して、富の生産に從事するのであるが、戰爭が在るが爲めに其等の産業は打捨てられ停止せられた。此く打捨てられ停止せられた生産物及人の働きの合計が即ち戰爭の爲めに一國が被つた損害の總計であるのである。然るに金の經濟に育てられた頭から見ると此の眞實なる損害を支拂金高さへ見れば其れで間違はないものと考へる。其誤なることの一點を云へば四十五億磅と云ふ金高は平時經濟の金高とは甚だ意味が違ふのである。英國の戰前に於る一ヶ年の國民所得高は約二十四億磅と推算せられて居た、此の二十四億磅に對して四十五億の損失があつたと云へば、餘程事重大に考へられるが、二十四億磅と云ふ其磅と、今日の四十五億磅と云ふ磅とは大に違ふ物である。即ち英國に於ても他の國に於る如く物價は非常に騰貴して居る、ステーチスト指數によると、戰前の千九百十四年六月三十日の指數に對する本年八月三十一日の指數は總平均に於て十一割六分五厘の增加を示して居る。即ち磅の購買力は戰前に比して半分以下に落ちて居るのである。然れば四十五億磅と云金高を戰前の磅に言直して見ると多くとも其半額にしか當らぬ譯で、即ち二十四億磅位となる。之を言換へると英國の年所得は二十四億磅であつたと云は昔しの話で、之

れを今日の購買力にて言表はすときは少くとも其倍額四十八億磅以上に當つて居るのである。此く正して見れば單に金高丈けから云つても戰費の大なることは勿論だが、一見して喫驚した程大なるものでないことは疑を容れないのである。所が此に對して次の如きことを考へるものが尠からずある。成程四十五億の戰費は購買力の減じた貨幣を以て言表はしたもので戰前に於て云ふ四十五億磅とは大いに譯が違ふには相違ないが、他方に於て戰前二十四億磅と計上せられた所得は今日は非常に減じて居るので、此の減少した所得から右の如き巨額の戰費を負擔すると云ふことを知らねばならぬ、假りに貨幣の購買力が半分になつたとして戰前二十四億であつた、所得は今日の金高に積つて見ると四十八億磅に當るとした所で、今戰時中の所得は此四十八億よりは遙かに少いのである、即ち實際の戰費は四十五億に加ふるに戰爭の爲めに直接間接引上げられて居る國民の所得高を以てした物に當る筈で、直接間接戰爭に從事する國民が戰前に於て得て居た丈けの所得は戰爭の爲に全く損失に歸した物であると。是れは甚しい謬想である。

何となれば右の樣に考へることは一つものを二度算入することに當るのである。直接間接戰爭に從事する人の働きは產業から取り去られたから、其れが損失に歸するものだと云ふなれば、其他方に於て政府より受くる所の俸給給與は之を利得の中へ算入して損害から差引なければならぬ。反對に政府が直接間接軍事に從ふ人々に支拂ひ又其の給與に費した高を以て損失なりと認むるならば、此等の人々が平時に於て得て居た所得を更らに損失として之に加算す可き筈のものではない。政府の支出以外に此等の人が受く可かりし所得が損失であると云のは、軍事に從事しつゝ猶ほ產業に從事し得るものと考へる間違に陷つて居るものである。戰爭に從ふことが損であつて、更らに其人々が平和の產業に從事し得ぬことも損失であるとは、一寸考へると如何にも尤千萬の樣に考へられるが、其は事實に合つて居らぬ。損失は戰爭に從ふことであるか又は平和の產業に從ひ得ぬことであるか、何れか一方のみでなければならぬのである。戰爭に從つたことも損であり、其爲めに平和の產業を營むことの出來なくなつたのも損であると云ふ可きではな

い。戰爭は平和の產業に從事して居る人何百人かを一方より他方へ移して使つたので、其眞の損失は此く移したことによつて平和の產業が營めなくなつたこと是れである。

さて右を以て戰爭の爲めに被つた經濟上の損失なるものゝ性質內容が分つたとして、其れが戰後の經濟に如何なる關係を持つかを論じて見よう。戰後英國を始め各國は巨額の負債を始末せねばならぬと云ふことが、先づ第一の問題である。戰費を負債にて支辨したことはつまり將來を見當てに戰爭をして居ることであるとは普通の解釋である。成程國の政府の立場から云へば正に左樣である。各國とも政府は戰時中の歲入を以て戰費を支辨した部分は甚だ少いか又は皆無であつて、何れも將來の國庫收入を見當に戰費を融通して居たのである。然し乍ら此れは政府の立場から云ふときの話で、國全體としての立場から云ふときは事體が違ふのである。英國を始め獨佛等の負債の大部分は內債であつて、外國から借りた部分は少い、殊に獨逸の如きは今日迄七回に涉る募債は全部國內に於て募入したのである。外國から借りた分は將來の返濟に國の生產品なり正貨なりを輸出せねばならぬから、將來其れ丈けの富は新たに稼ぎ出すか又は自國の富を其れ丈け取り去られるかせねばならぬものである。利息の支拂も無論左樣で年々公債の利子に當る丈けの富は外國へ取り去られるのであるから、其れ丈けの苦しみを國民經濟は忍ばねばならぬは勿論のことである。之に反し國內に於て募集した公債は自國內の富を使つたのであつて、公債の應募者が應募の爲め他から借入れた場合は其借入金の返濟の爲め將來に涉つて餘計の生產をするか、又は自分の費用を節するかせねばならぬので、其れは將來を見當てに使つた高であると云ふ可きであるが、現に自己の有する財產又は所得を以て應募した分は政府から云へば將來を見當てにしたのではあるが、國全體から云へば左樣ではない、現在の富を使つたものである。英國の四十三億磅の公債高の大部分は將來を見當てに支辨した高ではなく、戰時中に生じた所得又は現在の富を戰爭の爲めに使つたものである。英國全體として見れば其高丈けは負擔して將來に持越す物ではない。既に現金拂にして仕舞つたのである。其內には資本を喰ひへらしたものもあら

うし、個人消費用の富を戰爭の方へ繰替へた部分もあらうが、大部分は戰爭中に右に生じた所得を左に戰爭の方へ投じたものである。即ち國民各自が或は直ちに消費し或は將來の爲めに貯蓄す可き分を政府に貸付け政府は之を取り入れて戰爭の爲に使つたのである。だから其爲め國民の貯蓄高が減つたことは疑を容れない。又た生產々業の爲に用ゐらる可き資本が減じたとも疑ひを容れない、是れは戰後の經濟に重要な關係を持つて居る、即ち戰後の歐洲經濟は各國共著しき資本の減少を被むる可きは逆睹するに難くない。併し乍ら其高は決して國全體としての借金ではない。即ち消極的に資本が減少した丈けであつて、積極的に其れ丈けの負擔が殘るわけではない。我々が病氣に罹つて醫藥料の失費が嵩むとき出來る丈け家計を節しても猶且つ及ばないから郵便貯金を引出したり、又は家具家財を賣拂つて病院の支拂を濟ませたのと事理は同じである。其爲貯金高は減り、家具は減少はして居るが、別に借金が殘つて居るのではない。而して家計を節して醫藥の費に當て又は家內が平素營まない內職をして藥費の一部に當てた分は財產も減らないし、借金も造らずして事を辨じた物である如く、英佛獨其他の國に於て國民が戰時節約をやつたり、非常特別の働きをしたり、婦人が職業に從事したり、徒手遊食の輩が夫々職業に有り附いたりして、公債の募集に應じた高は恰も家計の節約細君の內職によつて藥費を支辨した如く、少しも國の富を減ぜず、資本に手を付けず、又將來に負擔を持越すことなくして、戰爭の費用を支辨したものである。此く考へ來れば各國共其政府の立場から見た負債高は實に莫大なものではあるが、其內眞に國全體の借金として將來に持越す所の積極的負擔たるものは一部分に止るのである。大部分は現に戰時中に於て支辨し了つたものである。戰時增稅によつて支辨したものゝみが、決濟ずみの戰費であると思ふのは大なる間違である。國民は租稅として政府へ上納する以外に、公債の應募と云ふ形ちに於て戰費の大部分を右から左へと現在端的に負擔し終つて居るのである。決して戰後までも之れを持越すものではないのである。再び前の例を以つて云ふと主人は病中僅かしか收入がないが、細君が自分の貯金や內職の所得を主人醫藥の費に

提供した如くである、其家全體として何の借金も病後へ持越す次第ではない。唯だ主人は細君に對して深き感謝と、而して若し細君と會計を別として居るならば主人は細君に對して其れ丈け借金を背負ふことゝなつて居るのである。即ち各國とも國全體としては其れ丈けの借金の持越しは無いけれども、國の政府は國民に對して其れ丈けの借金を背負つて居るのである。故に細君が主人に對して私しの立替金は帳消にして下さいと云ふが如く、國民が政府に對して公債償還の權利を放棄すれば借金はなくなつて仕舞ふのである。外の國は左樣な事はあるまいが、露國丈けは政府の方から强談的に汝の立替金は負けて置けと細君を壓迫する亭主の如き態度を取るかも知れない。

さて露國は別として他の國は獨墺側と雖も左樣な事は必ず爲すまい。況んや英佛の如き健實なる財政を維持する國をや。然れば戰後に於て此等諸國は年々の公債利子の支拂と、期限到着のとき又は數回借替後の或機會に於て元金の償還との義務を負擔せねばならぬのである。乍去政府其自身には利子を拂ふ可き高も元金償還用の高も所有して居るのでなく、又た自己の所得なるものは（官業及官有財産收入は別として）ないのであつて、右に當る高は必ず租税、專賣其他の形に於て國民から徵收する外はないのである。國民全體として云へば其應募した公債の元金も利子も取る權利が一方にあると共に、他方には又た其れ丈けの高は政府へ納む可き義務を課せられて居るのである。即ち國民全體として云へば貸しも借りもない出ず入らずである。假りに英國の內債高四十億磅とすれば國民は他日何時か其れ丈け政府から返して貰ふ權利を有すると共に、何年かに渉つて又た四十億磅丈けは一般政費以外に政府へ租税其他によつて納めなければならぬのであつて、差引零に歸するのである（外債は別問題たること勿論なり）。而して此の四十億磅と云ふ內には戰前に在つた富を以て之に充てたもの、もあらう、其れ丈けは國の富が減つたのである、富の內產業に資本として使はれて居た分は其れ丈け資本の減少を來したわけであるが、其補塡は政府は之を爲すのではない、矢張國民が戰後に於ける經濟的活動によつて自ら補塡する外に道はないのである。而して四十億磅中の大なる部分は

戰時中の所得を以つて支辨したものであるから、其分は別に補塡は要しない。即ち戰後に於て補塡を要する持越し高は、決して四十億磅など云ふ巨額によつて表はさる可きものではない、唯だ其一部分のみである。

五

右は國民全體として見た話である、而して英も佛も獨も墺も伊も露も皆同じ道理の下に立つのである。歐洲諸國は均しく戰爭の爲めに減少した資本の補塡を爲さなければならぬ仕事を持つて居る。御互ひに恨みつこなしである。而して此點に於て英國は兎に角租稅を以て戰費の一部分を支辨したし、又た公債應募にも餘り無理な細工を用ゐず、國民現實の所得を以て右から左へと現に支辨した部分が多くあつて、資本を喰ひへらした部分は或は小であるから、他の交戰諸國よりは戰後に於て樂であるかも知れず、其の反對に獨逸は貸付金庫の巧妙なる運用によつて隨分無理に借金せしめて公債に應募せしめ、且つ租稅支辨は全く爲なかつたから、國の資本を喰ひへらした部分も可也大であるかも知れない。而して米國及日本は資本を喰へらした事がないから或は可也有利なる狀態の下にあるかも知れないが、此點は後段に論ずるとして資本の喰ひへらしと否とに拘らず、兎に角政府として巨額の負債の始末をせねばならぬのであるから此點から先に論じて見よう。此が戰後の經濟の最根本的問題であるから。

六

各國の政府が巨額の公債に對して年々利子を拂ひ、又早晩其元金を償却せねばならぬと云ふことは、歐洲交戰國が何れも同樣に背負ふ所の重大事項であるが、其支拂償却は國全體として見れば右のものを左に移すと云ふ問題であつて、國外へ取去られると云ふ問題ではない。經濟學の術語で云へば生產の問題でなく分配の問題である。其れ丈け新しい富を作り出さねばならぬと云ふことが重要の意義を有して居るのでなく、其れ丈けの富が國民間に於て地位を換へると云ふ事が甚だ重大なる意義を有して居るのである。何故なれば前に縷述した樣に、其れ丈けのものゝ全部が將來に持越されて居るのではな

い、將來に持越されて居る物は資本の減少の補塡及外債の元利支拂ひ丈であつて、其以外の分即ち大部分は國全體として見れば既に已に支辨し了つて居るのである。戰後に於て新たに其れ丈作り出さねばならぬわけではない。唯だ主人と細君との間の、立替勘定を處理することを要する如き丈けである。政府としては一方一般國民から其れ丈け取つて、他方公債所有者たる國民に其れを拂渡すを要する丈けである。此點が戰後の經濟の特色を形づくる最重要の點である。即ち戰後の歐洲諸國の經濟界に於ては富の分配に非常なる變動が起ると云こと是れである。政府が巨額なる公債の元利支拂に要する收入を得る爲に課する租稅、專賣其他の增徵は國民一般に課せられる物である、獨り有產者富者のみに增課するのではない、無產者勞働者貧者も亦た必ず之を負擔せねばならぬのである。殊に間接稅の增徵は比較的に多くの負擔を下流階級に課する物である。英國が戰前まで取り來つた健實なる財政方針によつて重きを直接稅に置くとするも、猶全く間接稅に手を觸れないと云わけには行かぬ。況んや獨逸の如き其帝國財政が甚だ重きを間接稅に置いて居た國をや。然れば戰後に於て他の點は今問題外としても、比較的下流階級の負擔の增すことは、如何しても免れない事と覺悟して置かねばならぬ。而して他方に公債の元利の支拂を受くる所の國民は多く如何なる階級に屬するかと云へば先第一に財產階級であるは勿論である。其に次では財產階級とは云へなくとも兎に角多少の餘裕があつて公債の募集に應じ得られた人々である。最後には其の餘力はないけれども多少の經濟的信用があつて公債應募の爲めに借金をすることが出來、其借金を以て應募した人々である。獨逸の如きは隨分極端まで範圍を及ぼしたから所謂下流社會又は勞働社會の人々でも公債所有者は少からぬであらうと思ふ。先頃大藏省に開かれた黑田參事官將來の獨逸戰時經濟書展覽會出陳の材料で吾輩が調べた所によると二百麻克以下の應募の數が

第一回	二十三萬千百十二人	
第二回	四十五萬二千百十三人	
第三回	九十八萬四千三百五十八人	
第四回	二百四十萬六千百十八人	
第五回	百七十九萬四千八十四人	

ある、三百麻克以上五百麻克以下の應募者は

第一回	二十四萬千八百四人
第二回	五十八萬千四百七十人
第三回	八十五萬八千二百五十九人
第四回	九十六萬七千九百二十九人
第五回	六十八萬千二十七人

ある、最も多かつたのは第四回で五百麻克以下の應募人員が總應募人員五百二十七萬九千六百四十五人の内無慮三百三十七萬四千四十七人ある。此内には右に云つた無理な借金應募をしたものも澤山あらうし又た健氣な心掛けで身を切詰めて應募したものもあらうが、兎に角戰後の分配大變動に當つて聊か其影響を緩和する作用を爲す次第であつて、獨逸としては心强い點と云はねばならぬ。併し之れは唯だ人員の數から見たことで、金高から見ると、第四回の總募入額百七億千二百萬麻克の内五百麻克以下の募入總額は僅かに六億八百萬麻克にしか當らず、二百麻克以下の募入總額は二億百萬しかない。即ち人員の方からザット百分の六十に當る五百麻克以下の少額應募數も金高から云へば僅かに百分の六にしか當らないのである。無理に無理を重ね切り詰めに詰めた獨逸でさへ斯くの有樣であるから、英國の樣に遙かに樂にやつて居た國に於ては公債權利額の大々部分は無論裕福の者の手にあつて、下層社會の與る高は極めて少ないことは推し量られる。即ち戰後に於て政府から公債の元利として支拂ふ高の大々部分は國民中の小數なる財産階級富豪者の手に入るのである。而して此の小數者に政府が支拂ふ爲めに要する金は、貧者も中流階級も一般に租税其他として政府へ納入することを要するのである。即ち言葉を改めて云ふと戰後の公債始末は國民中の貧者勞働者下流社會の富を富豪財産階級へ年々ドシ〳〵運び移すことを意味するのである。吾輩が生産の問題として重要なるのみならず、分配の問題として重要なりと斷言した理由が此れで十分に明白となるであらう。所が之れのみに止まらない、右に說いた通り公債應募、租税增徵又は其他の方法で、現に戰時中各國が自國の資本を喰ひへらした部分が尠からずあることは疑を容れないから、戰後の歐洲經濟界に於ては資本の不足を感ずるであらう。而して戰後産業の復舊否

改新には資本を要すること愈々急切となるは、疑を容れない。即ち戰後に於ては資本に對する需要は戰前よりも增加す可きに他方資本の供給は戰前より減少して居ることゝなるに相違ない。需要が增して供給が少ければ經濟の大則によつて資本の價が騰貴す可きは當然である。資本の價とは即ち金利のことである。ソコデ少くとも戰後若干年間は歐洲に於ては資本の價たる金利は戰前よりは高かる可きは今より逆睹す可き現象である。所が金利が高ければ勞働者の受くる勞銀も必ず其影響を受くる事を免れない、其影響とは勞銀が金高では依然として居るかも知れないが實質に於て即ち其購買力に於て下落することは是れである。戰後に於て通貨の縮少が行はれゝば別であるが此は當分望みないことゝして通貨が多ければ物價の高いことは依然として繼續するであらうから、勞銀は金高では下落はせず或は却つて騰貴しても其購買力は却つて減ずるのであらう。或は物價は多少下落するかも知れない（其は物品によつて必ず起ることゝ信ずる）が勞銀も亦下落することゝなれば結局勞働者の實際所得は少くなるのである。金利として資本家の方へ取り去らるゝ部分が多くなれば、其れと同額とは云へないが或割合丈けは勞銀として勞働者の手に入る可き所得が減ずることは何の道免れ難いことである。而して右に假定した第二の場合即ち戰後通貨の縮少が行はれて貨幣の購買力が恢復することは歐洲各國の爲め希はしいことたるは勿論であるが、其は又た他方に更らに一の新らしい不公平を加へることゝなる。其理由は財產階級富者が應募した公債金額は戰時中購買力の著しく減じた貨幣を以て政府に拂込んだのである。然るに戰後貨幣の購買力が高まるものとすると、政府が公債所有者に元利金として支拂ふ高は金高には相違は起らないが、其支拂ふ貨幣は購買力の增加した貨幣であるから公債所有者は其間に更らに利益を受けることになる。安い貨幣を拂込んで高い貨幣で元利を返濟して貰ふのであるから其れ丈け得となる。即ち戰後下流社會から取つて上流社會に運ぶ富の實際高は、其金額を以て言表はされたものより更らに多いことになるのである。

七

斯く考へて來ると戰後の歐洲經濟界に於ける勞働者、貧者、下流階級の運命は實に同情に堪へない氣の毒極まつたもので、他方に富者資本家階級の地位は實に言ひ樣のない結構なものである。斯くて戰後の世界經濟當面の大問題は此の富の分配上に於ける大變調を措いて外にないことは讀者の十分なる諒解を得ることゝ信ずる。而して平和一度來らば、陸海軍人並に間接軍事に從事せる莫大なる人員は復員せられて產業界に職を求める、其調節が果して直ぐ行はれるか如何か、當分は職を得られない勞働者も澤山起るであらう。又た國內に止まつて男子の代りに職に就いて居た婦人勞働者の間に失職の現象が起るであらう。此等は長い間には其々其處を得て失職離職は戰前よりも多くはないことになるかも知れぬが、當分の間は必ず戰前よりも多いであらう。此又た勞働階級を苦む可き一の事柄である。戰爭は無職者を根絕した形であつて、此は不幸中の幸であるが其幸は戰爭が終ると共に消え去つて、却つて惡くなることを考へなければならぬ。

八

更にも一つ考ふ可き事がある、其は通貨の過增に甚く物價騰貴である。戰時中に於ては各國民共臥薪嘗膽の覺悟で、あらゆるものを國の爲めに犧牲として居るのであるから物價騰貴より來る苦しみも亦不得止事として忍ぶのであるが、若しも其れが戰後迄で繼續するとなると此犧牲は實に堪へ難きものとなると思ふ。元來戰時中に於ける物價騰貴には種々の原因もあるが、吾輩の信ずる所では其最大の原因は不換紙幣不換銀行券又は名は兌換にして其實不換なる紙幣及銀行券證券の過發是れである。此を英語で『インフレーション』と名けるが『インフレーション』は一種の隱れたる增稅と看做して大過ないものである。直接稅なり間接稅なり明かに租稅と名乘つて國民から取つて戰費に當てる外に、各國民は『インフレーション』の形に於て其所得を政府へ徵收せられて居るのである。物價が騰貴した爲め支出高が多くなるから不得止節約する、其節約した富は國民の貯蓄とはならぬ、誰の手に歸するかと云へば過增通貨を發行する政府の手に歸するのである。二片喰ふパンを一片に減じた殘りの一片は實は政府の收入に歸して戰爭又

は一般政費に充てられて居るのである。衣服を減す飲料を減す子供に與へるものを減ずる、其減じたものは何れも政府へ入るのである。此は戰時中は無論致方なしとして甘んじて犧牲を獻ずるが、戰後に渉つて殊に切り詰め一杯の生活をして居る下流社會が犧牲を繼續することは實に容易ならぬことである。

九

右段々説いた所で戰後の世界經濟當面の大問題は生產の問題でなくして、分配の問題であることが明瞭になつたと思ふ。即ち戰費其ものゝ額が莫大であつて而して各國の公債高が非常に增したことが戰後の大問題で、我邦や米國の如きが大に有利の地位に立つ所以は此の大負擔無きこと是れであると云ふ說の受取り難いことは分つたであらう。問題は戰費が莫大であつたこと其事でもなく、又其爲めに公債高が增したこと其事ではない、其れから起つて來る作用たる富の分配の一大變調是れである。所謂經濟學者が得意の題目とする國際間の經濟戰とか、獨逸ダムピング之に對する聯合側の對策の如きは事決して輕微では無いが、右に論じた根本の大問題に比すれば到底同一の談ではない。經濟戰やダムピング問題にのみ頭を沒して居るのは畢竟素町人經濟學に囚れた古い思想である。大戰爭の與へた大敎訓を理解する能はざる低級の經濟觀である。予の所謂ロムバード・ストリート本位の經濟財政觀である。金權的侵略主義の謬想を脫せざるものである。市場の爭奪、金融權の爭奪のみが大事件だと考へつゝある間に、世界の經濟界は其根柢に於て這般の大動搖を起しつゝあることに氣が附かないのである。今や米國は自ら求めて此の大動搖の渦中に國を投ずること歐洲諸國と同一となつた、而して此は米國である丈けに更らに細心の考究を要する。戰前「ブルートクラシー」(金權政治)の跋扈し開戰と共に驚く可き富の增加を主として此の金權階級に附け加へて大成金を現出した米國が、今又更らに正義人道の爲めとか小國の自由とか人道の解放とか樣々に立派なる名義を列擧して大戰に加入したことは、之を經濟上の眼から見ると右に段々說明した富分配の大移動の大潮流へ自ら好んで身を投じたものに外ならぬ。既に「ブルートクラシ

ー」の横行に於て世界第一の國である上に、更らに自ら求めて其勢を急進せしむ可き機會を作り出したことが米國參戰の經濟上の眞意義である。

十

顧つて我邦を見るに、世上論者の所謂戰時中の利益なるものあるは元より言を須たず、戰後亦た此點に於て有利の地位に立つ可きこともあり得るには相違ない。併し乍ら其れが我邦の最大幸福ではない、戰後に渉つて世界の變調に處して巧みに我邦の地位を維持することは實に希はしいこと勿論である。併し其れが可能であることが我邦の最大幸福ではない。從つて其を可能ならしむ可く努力することが凡ての經濟政策の「アルファ」にして「オメガ」たる譯では斷じてない。元より此れが爲めに努力することを怠つてはならぬ、乍併最大の努力、最善の貢獻の要求せらるゝは自ら存して他にある。我邦の最大幸福は右云ふ如き富の分配の大變調の渦中に投じなかつたこと是れである。多少は成金も出來たが他方には下層社會も惠に浴して居る、物價騰貴の爲めに苦しむものも澤山あるが又利したものも少からずある、即ち或度まで富の移動は惹起されたが、是を右に述べた歐洲諸國に比するときは到底同日の談ではない。是れが我邦の優勝の地位に立つ所以である（歐洲出兵の如き妄擧の斷じて非なる所以は、經濟上から云へば此の優勝の地位を一擲する結果に終るからである）。

然れども害のある所には利がある、得のある所には損がある。歐洲諸國は右の如き大難局に陷つたと共に他方大なる利益を經濟上に得た。其れは別事ではない、戰費を負擔する爲めに極度まで無駄を省き、又た種々有用の工夫發明を起し、國民が緊張した氣分を養ひ得たこと是れである。戰費の大部分は實に既に已に國民の節儉勤勉によつて支辨し了られたことは其事が喜ばしい丈けに止まらぬ、之によつて養ひ得た國民能率の增進勤儉耐苦の風俗習慣が永く戰後に渉つて彼等の生產力を高めること是れである。是れ實に苦中に得た樂、不幸中に見出した大幸福である。此生產力の增進能率の向上、勤儉活動の習慣のある以上は以上に列擧した大難局に處しても早晩國力を十分に恢復する事を

得るに至るであらう、其の多い國民ほど戰後に活躍し得る。獨逸の如き戰時中實に名狀す可からざる困難を嘗めたが其代償として得た國民生產力の增進も亦た實に非常なものであらう。獨逸が戰後疲弊に倒るゝが如き事の斷じてないは此點から考へても明々白々疑を容れない所と思ふ。英佛兩國に就ても亦然りと思ふ。其反對に我邦は世上論者の云ふ如く戰時中大なる利益を得た、戰後も其は或度合まで續くであらう是は實に有難仕合である。乍併其と同時に他方には歐洲諸國が得た這般の大利益は殆んど我邦に來つて居らぬ。多少の新面目を呈した事は勿論であるが、歐洲諸國民が命懸けで得た貴重なる經驗國民能率の大增進に比すべきものは、我邦に於て之を見ることが出來ないのである。戰後の世界經濟に處して我邦の最も憂ふ可きは此一事である。獨逸のダムピング、米國の保護政策、歐洲諸國の經濟戰の如きは此一事に比すれば甚だ小なる憂である。戰後の世界經濟は一方に非常に緊張した氣分、著しく增進した能率を養ひ得て、Social Reconstruction（英國人の近頃唱ふる『社會改造』）を企つる所の歐洲諸國と、他方には此の變化を被らなかつた日本始め他の諸國とによつて經營せらるゝことゝなるとは、我々の一刻も忘れてはならぬ所である。

論じて茲に到れば、次の如き結論は聰明なる讀者の首肯を購ひ得ることゝ信ずる。歐洲諸國は此の長所を飽迄助長するによりて、富の分配に於ける大變調を無事に切り拔けることを第一の務とする如く、我邦は此の大變調を蒙らなかつたと云ふ長所を飽迄助長し、無益なる政策によつて其渦中に投ずるが如きことを極度迄戒飭し、又た社會政策の建設を進むることによりて今後に於て新たに此種の現象の起らぬよう飽迄努力すると共に、他方には能率の增進、國民覺悟の緊張を出來る丈け歐洲諸國民の程度に近づかしむるによつて、其の差違より來る不利益を可成輕減することが、日本が戰後の世界經濟に處する最大の務である。是れ吾輩が堅く執つて信ずる所である。

第四篇

國本は動かず

‖黎明日本の諸問題‖